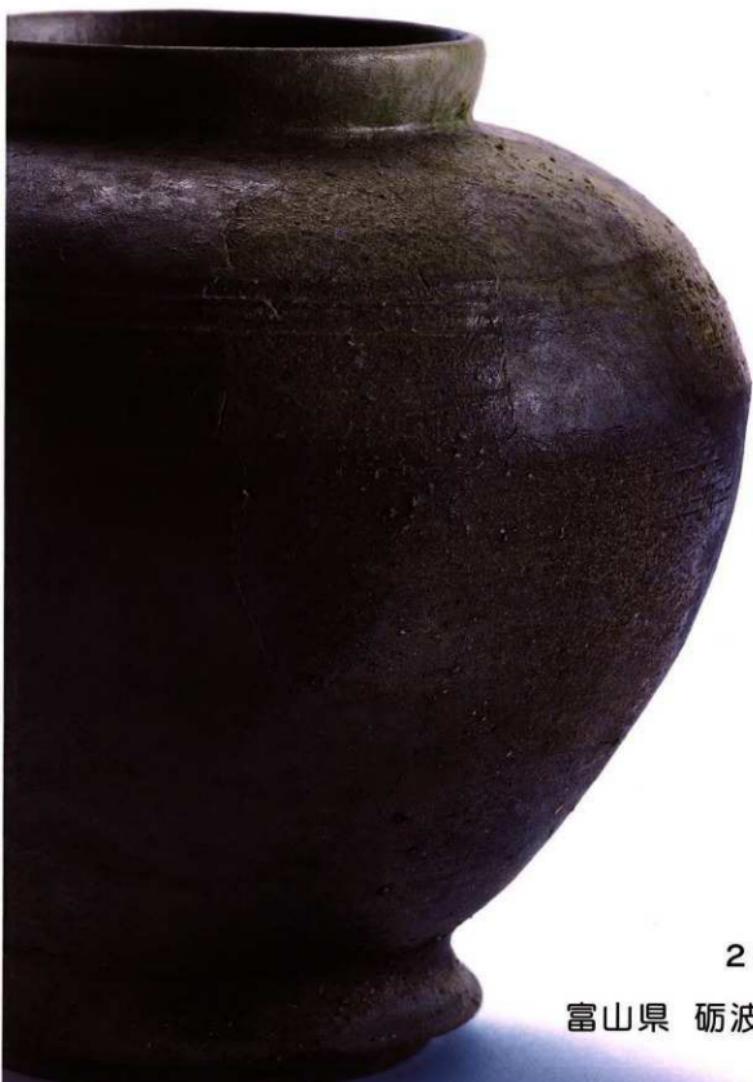


久泉遺跡発掘調査報告 Ⅲ

EXCAVATION REPORT OF THE HISAIKUMI SITE Ⅲ

平成17年度 一般国道359号砺波東バイパス建設工事に先立つ

埋蔵文化財調査報告書



2007年 3月

富山県 砧波市教育委員会

久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ 正誤表

頁	正	誤
目次	40行目…青梅市郷土博物館	40行目…青海市郷土博物館
365頁	図5…上が南)	図5…上が北)



柳瀬から太田、そして庄川の流れ



奈良・平安時代出土遺物

序

砺波市には、久泉遺跡という大切な遺跡があります。久泉遺跡は、庄川によって形成された扇状地の中央に位置している遺跡です。平成14年の試掘調査までは、古代・中世・近世の散布地として知られるに過ぎませんでした。平成15年度から国道359号バイパス建設に先立ち、本発掘調査を実施してきましたが、その過程で縄文時代中期から後期を中心とする打製石斧が出土したり、平野部で稀有な古代集落跡を検出したり、中世においては徳大寺家領般若野荘と関連する遺構が見つかっており、砺波市の歴史像を構築する上で欠くことのできない資料を供与してきました。

それら素晴らしい先人の足跡を考古学、歴史地理学、理化学など諸分野の手法で詳らかにし、報告書をまとめました。本書が砺波平野の歴史解明の一助となることを願ってやみません。

おわりに、調査の実施および報告書刊行にあたり、地元久泉地区、富山県埋蔵文化財センターをはじめ関係各位に多大なるご援助・ご協力をいただきました。衷心より感謝申し上げます。

平成19年3月

砺波市教育委員会

教育長 堀田良男

例　　言

1. 本書は平成17年度に実施した富山県砺波市祖保・久泉地内に所在する久泉道路の免振調査報告である。
2. 調査は、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所の委託を受けて、砺波市教育委員会が実施した。調査は、平成15年から平成17年までの3ヵ年で実施し、平成18年に整理作業を行った。
発振調査は、砺波市穴木から久泉にかけての一級国道359号砺波東バイパス建設工事に先立ち、砺波市教育委員会が主体となり、株式会社上智（富山県砺波市千代）に業務委託し実施した。整理作業は、株式会社アーキジョ（富山県高岡市西御平岸581）に業務を委託した。
3. 調査事務局は砺波市教育委員会内に置き、事務は学芸員野原大輔が担当し、教育次長小幡和日出が監修した。
4. 調査に関するすべての資料は砺波市教育委員会で保管している。なま、道跡の略記号は市名と道跡名の頭文字（Tonamisi Hisa Izumi）と、平成17年度の調査となることから「THI-17」とした。
5. 調査事務局および調査担当者は以下のとおりである。

調査事務局	砺波市教育委員会	教育次長	小幡 和日出
生涯学習課	課長 清澤 康夫		
同	主幹 鈴川 忠夫（平成18年4月1日から）		
同	係長 上野 勉（平成18年3月31日まで）		

本調査・整理作業担当者 同 学芸員 野原 大輔

6. 調査期間は、平成17年4月19日～平成17年12月14日、調査面積は4,631m²である。
7. 本書の図版は野原・阿部が行い、執筆および版面作成は野原・阿部が担当し執筆分担は各本文に記した。遺構写真は野原・阿部、遺物写真は野原が撮影した。
8. 本書の作成にあたり、金山雅裕氏、久保田正寿氏、酒井英男氏、岸田徹氏、久保浩一郎氏から玉筋を賜ることができた。いずれも本遺跡解明の上で大きくことのできない論考であり、衷心より謝意を表したい。
9. 遺物撮影では、高岡市教育委員会の撮影スタジオをお借りすることができた。撮影指導をして頂いた栗山雅夫氏に心から謝意を表したい。
10. 本書で使用している遺構の略記号は以下のとおりである。ただし、現地調査の遺構検出時点で略記号を付したため、本文中では略記号と遺構の性格がことなる場合があることを断っておく。
掘立柱建物-SP、溝-SD、土坑-SK、ピット-SP、塗刷木痕-FB
また、本書で使用している方位は真北で、標高は海拔高である。
11. 土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色誌』（2001年前期版）に準拠している。
12. 調査期間や監査作業期間を通じて、下記の方々から多くなるご教示・ご協力を得た。記して衷心より謝意を表する。
伊藤隆三（小矢都市教育委員会）、上野幸大（富山県歴史芸術館）、牛崎 茂（奈良文化財研究所）、
角張厚一（株式会社アルカ）、神崎利夫（小外水産株式会社）、狩野 雄（富山県埋蔵文化財センター）、岸田 徹（富山大学）、
金川章裕（京都大学）、久保田正寿（青梅市郷土博物館）、佐伯安（砺波市文化財保護審議会委員会）、
酒井東洋（富山県埋蔵文化財センター）、酒井英男（富山大学）、杉本和樹（西大寺フォト）、
鈴木博英（沿岸無線教育研究会）、栗山雅夫（高岡市教育委員会）、神田孝造（富山県文化振興財团）、
高梨清志（富山県埋蔵文化財センター）、外山秀一（皇學館大學）、白尾智行（大阪府文化財センター）、
西井龍儀（富山考古学会）、西木正憲（株式会社アルカ）、福沢伸典（富山大学）、藤井昭二（藤井環境地質研究所）、
麻柄一志（魚津市教育委員会）、三辻利一（大谷女子大学）、宮山雅一（富山県文化振興財团）、
宮本長二郎（東北芸術工科大学）、山中敏史（奈良文化財研究所）、山本正敏（富山県文化振興財团）、
横井 誠（石川県埋蔵文化財センター）

以上、五十音順・敬称略

目 次

序 文 例 言 目 次

序 章 調査と経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 既往の調査	5
第2章 地理と歴史	9
1 地理的環境	9
2 歴史的環境	12
第3章 調査の方法と成果	19
1 調査経過と調査方法	19
2 調査日誌抄	22
3 基本層序の解説	29
4 第1遺構面（中世－近世期）	33
5 第2遺構面（奈良・平安期）	39
(1) 抛立柱建物	
(2) 壓穴建物	
(3) 溝	
(4) 土坑	
(5) ピット	
6 第3遺構面（縄文中－後期）	103
(1) 上坑	
(2) ピット	
7 遺物包含層出土遺物	113
(1) 縄文時代（繩文土器・打製石斧・磨製石斧）	
(2) 奈良・平安時代（須恵器・土師器・土製品・鉄製品）	
(3) 中世・近世（土師器・陶磁器・石製品）	
第4章 理化学的分析	177
1 自然科学分析	パリノ・サーヴュイ株式会社 177
2 久泉遺構出土の種実遺体	中村亮仁（富山県文化振興財団） 214
3 研波市久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気による年代測定	酒井英男（富山大学）他 215
4 久泉遺跡の大溝を埋めた堆積物の磁化の研究	酒井英男（富山大学）他 224
5 久泉遺跡の大溝を対象とした地中レーダー探査研究	岸田 徹（富山大学）他 229
6 久泉遺跡出土鉄器類の調査	株式会社日鐵テクノリサーチ 237
7 梅根野窯群の須恵器の化学特性と久泉遺跡出土須恵器の产地問題	三辻利一（大谷女子大学） 251
8 打製石斧・磨製石斧資料の使用痕分析	株式会社アルカ 261
第5章 総 括	327
1 打製石斧の石材選択に関する一試論	久保浩一郎（富山市埋蔵文化財センター） 327
2 兩極敲打法の検証と成形意図について	久保田正寿（青森市郷土博物館） 347
3 久泉遺跡における大溝・建物遺構の性格	金田章裕（京都大学） 359

図 目 次

序 章 調査と経過

図1 高道向島遺跡遺構全体図	1
図2 国道359号砺波東バイパス開連の埋蔵文化財調査地	2
図3 久泉遺跡発掘調査地	4
図4 打製石斧	5
図5 下層遺構全体図（H15調査区）	5
図6 石組建物（SK166）	6
図7 方形土坑群	6
図8 下層遺構全体図（H16調査区）	7
図9 上層遺構全体図（H16調査区）	8

第2章 地理と歴史

図10 久泉遺跡の位置	9
図11 砧波平野周辺の地形	10
図12 芹谷野段丘の様式図	10
図13 庄川扇状地を中心とした地形分類図	11
図14 芹谷遺跡の石器	12
図15 福山大堤遺跡の石槍	12
図16 鶴照寺遺跡の堅穴住居跡と土器	12
図17 松原遺跡の04号堅穴建物	13
図18 松原遺跡出土の縄文土器	13
図19 松原遺跡出土の土製品	13
図20 宮森新北島I遺跡の据立柱建物	14
図21 高沢島II遺跡の壘石土器	14
図22 福山窯跡出土品	15
図23 砧波平野東部の遺跡分布図	17

第3章 調査の方法と成果

図24 調査区グリッド	20
図25 久泉遺跡 基本層序	32
図26 第1遺構面 SK159 165	34
図27 第1遺構面出土遺物実測図	34
図28 第1遺構面東側調査区 SD	35
図29 第1遺構面西側調査区 SD	37
図30 第2遺構面全体図	41
図31 須恵器・土師器の器種名と各部分名称	43
図32 第2遺構面 SB01	45
図33 第2遺構面 SB01土層図	46
図34 SB01出土遺物実測図	47
図35 第2遺構面 SB02	49

図36 SB出土遺物実測図	50
図37 第2造構面 SB02土層図	50
図38 第2造構面 SB03土層図	51
図39 第2造構面 SB03	52
図40 SB04出土遺物実測図	53
図41 第2造構面 SB04	54
図42 第2造構面 SB04土層図	55
図43 第2造構面 SB05土層図	56
図44 第2造構面 SB05	57
図45 SI97出土遺物実測図	58
図46 第2造構面 SI97	58
図47 第2造構面 SI166	60
図48 第2造構面 SI166土層図	61
図49 造構出土遺物実測図(2) 穴穴建物	62
図50 SI167出土遺物実測図	63
図51 第2造構面 SI167	63
図52 SI395出土遺物実測図	64
図53 第2造構面 SI395	64
図54 第2造構面 SI491・492・493・494・495平山図	65
図55 第2造構面 SI491	67
図56 SI491出土遺物実測図	68
図57 第2造構面 SI492・495	70
図58 第2造構面 SI492・495 土層図	71
図59 SI495出土遺物実測図	72
図60 造構山土遺物実測図(3) 穴穴建物	73
図61 SI493出土遺物実測図	74
図62 第2造構面 SI493	75
図63 第2造構面 SI494	77
図64 SI494出土遺物実測図	78
図65 SI550出土遺物実測図	79
図66 第2造構面 SI550	80
図67 SI600出土遺物実測図	81
図68 第2造構面 SI600	82
図69 第2造構面 SI620	83
図70 SI650出土遺物実測図	84
図71 第2造構面 SI650 SX649	85
図72 SI1220出土遺物実測図	86
図73 第2造構面 SI1220	87
図74 溝と土手の崩壊の様子	88
図75 第2造構面 SD09 SD430	89
図76 SD09出土遺物実測図	91
図77 第2造構面 SD09 土層図	92
図78 第2造構面 SD09 土層図(縦断)	93

図79 第2道横面 素掘小溝	95
図80 素掘小溝出土遺物実測図	97
図81 旧河道出土遺物実測図	98
図82 土坑出土遺物実測図	99
図83 第2道横面 SK66・67・241・260・402・424・488	100
図84 第2道横面 SK189・190	101
図85 ピット出土遺物実測図	102
図86 第2道横面 ピット	102
図87 第3道横面 土坑	103
図88 第3道横面 土坑 ピット	106
図89 遺物包含層出土遺物実測図(1) 織文土器	115
図90 遺物包含層出土遺物実測図(2) 織文土器	116
図91 遺物包含層出土遺物実測図(3) 織文土器	117
図92 打製石斧の各類型計測部位とその名称	119
図93 遺物包含層出土遺物実測図(4) 打製石斧(I類)	123
図94 遺物包含層出土遺物実測図(5) 打製石斧(I類)	124
図95 遺物包含層出土遺物実測図(6) 打製石斧(I類)	125
図96 遺物包含層出土遺物実測図(7) 打製石斧(I類)	126
図97 遺物包含層出土遺物実測図(8) 打製石斧(I類・IIa類)	127
図98 遺物包含層出土遺物実測図(9) 打製石斧(IIa類)	128
図99 遺物包含層出土遺物実測図(10) 打製石斧(IIa類)	129
図100 遺物包含層出土遺物実測図(11) 打製石斧(IIb類)	130
図101 遺物包含層出土遺物実測図(12) 打製石斧(IIb類)	131
図102 遺物包含層出土遺物実測図(13) 打製石斧(IIb類)	132
図103 遺物包含層出土遺物実測図(14) 打製石斧(IIb類)	133
図104 遺物包含層出土遺物実測図(15) 打製石斧(破片)	134
図105 遺物包含層出土遺物実測図(16) 打製石斧(破片)	135
図106 遺物包含層出土遺物実測図(17) 打製石斧(破片)	136
図107 遺物包含層出土遺物実測図(18) 打製石斧(破片) 磨製石斧 石錐 砥石	137
図108 石器・織文上器出土分布図(平成15・16・17)	139
図109 第3道横面標高 5層中疊出土状況図	141
図110 石材調査位置図	143
図111 土鍤製作想定図	149
図112 遺物包含層出土遺物実測図(19) 須恵器	153
図113 遺物包含層出土遺物実測図(20) 須恵器	154
図114 遺物包含層出土遺物実測図(21) 須恵器	155
図115 遺物包含層出土遺物実測図(22) 上師器	156
図116 遺物包含層出土遺物実測図(23) 上師器 珠洲 中世土師器 近世陶器 土鍤 鉄製品	157
第4章 理化学的分析	
1 自然科学分析	
図1 A地点模式柱状図及び試料採取位置図	177
図2 主要珪藻化石群集の層位分布	186

図3 基本土層の植物珪酸体含量の層位的変化	189
図4 SD09の植物珪酸体含量の層位的変化	189
図5 素掘小溝の植物珪酸体含量の層位的変化	189
図6 長方形土坑の植物珪酸体含量の層位的変化	189
図7 基本土層の粒度・土壤理化学組成	194
図8 素掘小溝の粒度・土壤理化学組成	195
図9 粒度分布加積曲線	197
 3 研波市久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気による年代推定	
図1 研波市久泉遺跡の位置と調査地域	215
図2 焼上と酸化鉄層の研究試料を採取した地点	216
図3 試料採取風景と超伝導磁力	216
図4 交流消磁実験の結果を解析するザイグーベルト図	217
図5 地磁気の3成分である偏角、伏角と地磁気強度 地磁気3成分の過去2000年間の変動 地磁気方向 (偏角と伏角)の変動	218
図6 交流消磁実験後の残留磁化と統計誤差	219
図7 各サイトの平均の磁化方向と、AD700-900年間における北陸地域の地磁気変動	220
図8 交流消磁実験の例	220
図9 2成分の磁化方向	221
図10 磁の変形と磁化獲得の様子	221
 4 久泉遺跡の大溝を埋めた堆積物の磁化の研究	
図1 交流消磁実験の例	224
図2 各サイトの消磁後の磁化方向	224
図3 久泉遺跡の大溝の位置と調査地点	225
図4 各サイトの磁化方向と北陸版の地磁気変動	226
図5 大溝内部での堆積物の堆積過程	227
 5 久泉遺跡の大溝を対象とした地中レーダー探査研究	
図1 久泉遺跡の位置	229
図2 久泉遺跡で見つかった大溝(SD09)	229
図3 地中レーダーによる探査の概図	230
図4 地中レーダー探査風景	230
図5 GRID1の位置と代表的なGPR	231
図6 発掘結果および、GRID1と2におけるTime slice図	232
図7 GRID7の位置	233
図8 Time slice図	234
図9 直交断面に投影したGPR	233
図10 GRID25-27の位置および代表的な測線(LINE-10)の位置	234
図11 GRID27で得られた大規模な溝を示す代表的なGPR	234
図12 GRID25-27のTime slice図	234
図13 採査結果から復元した大溝の流路	235

6 久泉遺跡出土鉄器類の調査	
図1 №1 四状遺物(SI492)の非金属介在物のEPMA定性分析結果	245
図2 №2 棒状鉄製品(旧河川跡)の非金属介在物のEPMA定性分析結果	246
図3 №3 小刀(SI492)の非金属介在物のEPMA定性分析結果	247
図4 №4 小刀(SI492)の非金属介在物のEPMA定性分析結果	248
図5 №5 小刀破片(SI492)の非金属介在物のEPMA定性分析結果	249
図6 №5 小刀破片(SI492)の非金属介在物のEPMA定性分析結果	250
7 梅楓野窯群の須恵器の化学特性と久泉遺跡出土須恵器の産地問題	
図1 増山団子地窯跡出土須恵器の両分布図	254
図2 増山外貝塚山釜跡出土須恵器の両分布図	254
図3 福山窯跡出土須恵器の両分布図	255
図4 福山大堀窯跡出土須恵器の両分布図	255
図5 安川天皇窯跡出土須恵器の両分布図	255
図6 増山群と福山群の相互識別(Ca Rb Sr因子使用)	256
図7 増山群と福山群の相互識別(Ca Fe Sr Na因子使用)	256
図8 小丸山11号窯跡出土須恵器の両分布図	257
図9 小丸山1号窯跡出土須恵器の化学特性(Ca Fe Sr Na因子使用)	257
図10 久泉遺跡出土須恵器(甕類)の両分布図	258
図11 久泉遺跡出土須恵器(壺類)の化学特性(Ca Fe Sr Na因子使用)	258
図12 久泉遺跡出土須恵器(杯蓋)の両分布図	259
図13 久泉遺跡出土須恵器(杯蓋)の化学特性(Ca Fe Sr Na因子使用)	259
図14 久泉遺跡出土須恵器(杯類)の両分布図	260
図15 久泉遺跡出土須恵器(杯類)の化学特性(Ca Fe Sr Na因子使用)	260
8 打製石斧・磨製石斧資料の使用痕分析	
図1 平成17年 打製石斧(I類) №86・166・87の使用痕	280
図2 平成17年 打製石斧(I類) №82・78・177の使用痕	281
図3 平成17年 打製石斧(I類) №81・105・171の使用痕	282
図4 平成17年 打製石斧(I類) №90・88・77の使用痕	283
図5 平成17年 打製石斧(I類) №83・96・80の使用痕	284
図6 平成17年 打製石斧(I類) №85・106・101の使用痕	285
図7 平成17年 打製石斧(IIa類) №114・113の使用痕	286
図8 平成17年 打製石斧(IIa類) №119・121の使用痕	287
図9 平成17年 打製石斧(IIa類) №94・100・115の使用痕	288
図10 平成17年 打製石斧(IIa類) №33・172の使用痕	289
図11 平成17年 打製石斧(IIb類) №140の使用痕	290
図12 平成17年 打製石斧(IIb類) №127の使用痕	291
図13 平成17年 打製石斧(IIb類) №138・125の使用痕	292
図14 平成17年 打製石斧(IIb類) №128・120・142の使用痕	293
図15 平成17年 打製石斧(IIb類) №136の使用痕	294
図16 平成17年 打製石斧(IIb類) №145・128・123の使用痕	295
図17 平成17年 打製石斧(IIb類) №167・146・109の使用痕	296

図18 平成17年 打製石斧(IIb類) №133・173・137の使用痕	297
図19 平成17年 打製石斧(1類) №102・174・79・97刃部磨耗なし	298
図20 平成17年 打製石斧(IIa類) №110・108・116・111・112刃部磨耗なし	299
図21 平成17年 打製石斧(IIb類) №132・143・139・134刃部磨耗なし	300
図22 平成17年 磨製石斧 №180・178の使用痕	301
図23 平成16年 打製石斧(1類) №48・57の使用痕	302
図24 平成16年 打製石斧(1類) №68の使用痕	303
図25 平成16年 打製石斧(1類) №49・50・53の使用痕	304
図26 平成16年 打製石斧(1類) №56・58・61の使用痕	305
図27 平成16年 打製石斧(IIa類) №71・73・75の使用痕	306
図28 平成16年 打製石斧(IIb類) №76・78の使用痕	307
図29 平成16年 打製石斧(IIb類) №81・82・83の使用痕	308
図30 平成16年 打製石斧(IIb類) №84・86・87の使用痕	309
図31 平成16年 打製石斧(IIb類) №92・109の使用痕	310
図32 平成16年 打製石斧(1類) №52・60・62・66刃部磨耗なし	311
図33 平成16年 打製石斧(IIa類) №69・70・74・77刃部磨耗なし	312
図34 平成16年 打製石斧(IIb類) №96・91・102刃部磨耗なし	313
図35 平成16年 打製石斧(未成品) №46・47	314
図36 平成15年 打製石斧(1類) №42・48・50の使用痕	315
図37 平成15年 打製石斧(1類) №52・43・53の使用痕	316
図38 平成15年 打製石斧(IIa類) №59・58・69の使用痕	317
図39 平成15年 打製石斧(IIb類) №(20)・68の使用痕	318
図40 平成15年 打製石斧(IIb類) №63・64の使用痕 打製石斧(1類) №44・47刃部磨耗なし	319
図41 平成15年 打製石斧(IIb類) №56・67の使用痕 打製石斧(1類) №67・69刃部磨耗なし	320
図42 石器の部位と刃部の偏り	321

第5章 総括

1 打製石斧の石材選択に関する一試論

図1 久泉遺跡における各種分析図	323
図2 久瀬下島遺跡遺跡における各種分析図	324
図3 東市瀬遺跡における各種分布図	326
図4 ナカモリ遺跡における各種分布図	328
図5 味鹿手島遺跡における各種分布図	340
図6 常安上神の森遺跡における各種分布図	341

2 両極敲打法の検証と成形意図について

図1 両極敲打法のしくさ	347
図2 非対称の基本パターン	348
図3 №84 両極敲打法の観察	349
図4 №91 両極敲打法の観察	350
図5 №92 両極敲打法の観察	350
図6 №98 両極敲打法の観察	351
図7 №109 両極敲打法の観察	351

図8 Na119 両極敲打技法の観察	352
図9 Na121 両極敲打技法の観察	353
図10 Na127 両極敲打技法の観察	353
図11 Na129 向極敲打技法の観察	354
図12 Na135 両極敲打技法の観察	355
図13 講座参加者が製作した紺彫形石斧	355

3 久泉遺跡における大溝・建物遺構の性格

図1 久泉遺跡(平成17年度東側調査区第2透構面)の大溝・建物遺構	359
図2 石栗村・伊加留岐村・井山村現地比定と久泉遺跡大溝の流路	360
図3 溝の横断面図	363
図4 石栗村・伊加留岐(伊加留岐村)・井山村各園の位置関係模式図	364
図5 越中国新波郡石栗村官施入田地図	365
図6 石栗村・伊加留岐村・井山村比定地付近の景観の概要	366
図7 井山村・伊加留岐村・石栗村の開拓状況	367
図8 越中西射水郡鹿田村整地図	371

表 目 次

第2章 地理と歴史

表1 梅津野流域一覧	14
------------	----

第3章 調査の方法と成果

表2 器種名一覧	43
表3 清(SD)一覧	107
表4 掘立柱建物(SB)一覧	107
表5 掘立柱建物開拓遺構一覧	107
表6 深穴建物(SI)一覧	109
表7 暗穴建物(SU)開連土坑・ピット一覧	110
表8 土坑・ピット(SK・SI')一覧	111
表9 不明遺構(SX)一覧	112
表10 打製石斧関連のデータ	138
表11 各地点の石材構成表	143
表12 枠蓋(杯B)の法量分布図	144
表13 無台杯(杯A)の法量分布図	145
表14 有台杯(杯B)の法量分布図	146
表15 上鍾長径・最大幅計測図	150
表16 主要遺跡の上鍾器口径・器高散布図	151
表17 遺物観察表(陶文土器)	158
表18 遺物観察表(打製石斧・磨製石斧・石錐・砾石)	161
表19 遺物観察表(土師器・須恵器・侏羅・弥生・小中世土器・近世陶器)	165
表20 遺物観察表(土錐)	176
表21 遺物観察表(鉄製品)	176

第4章 理化学的分析

1 自然科学分析

表1 放射性炭素年代測定結果	183
表2 年代校正結果	184
表3 IT透析分析結果 IT透析分析結果凡例	187
表4 花粉分析・寄生虫卵分析結果	188
表5 植物珪酸体含蓄	188
表6 樹種同定結果	191
表7 樹実同定結果	193
表8 土壤理化分析結果(1)	194
表9 土壤理化分析結果(2)	194
表10 粒度組成	196
表11 粒度組成解析結果	196

3 磯波市久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気による年代推定

表1 久泉遺跡の焼土遺構の交流消磁後の残留磁化	219
表2 久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気年代	219
表3 サイトHS61とHS75の14C料について分離された残留磁化	220

4 久泉遺跡の大溝を埋めた堆積物の磁化の研究

表1 大溝堆積物の各サイトの消磁後の磁化方向と磁化強度	226
表2 人溝堆積物の地磁気推定年代	226

6 久泉遺跡出土鉄器類の調査

表1 調査試料の 質表	239
表2 黒鉛中の微量元素	239
表3 非金属介在物の成分	239

8 打製石斧・磨製石斧資料の使用痕分析

表1 斧茎毎の磨耗の状態	321
表2 磨耗状況毎の刃部形態	321
表3 類型毎の磨耗状況による刃部形態	321
表4 平成15・16・17年久泉遺跡打製石斧・磨製石斧使用痕観察表	323

第5章 総括

3 久泉遺跡における大溝・建物遺構の性格

表1 「行基年譜」にみえる溝	362
表2 文書にみえる東大寺領莊園の溝と植	363

図版目次

第4章 理化学的分析

1 自然科学分析

図版1 芽藻化石	207
図版2 花粉分析・寄生虫卵分析プレパラート内の状況写真	208
図版3 植物珪酸体	209
図版4 炭化材(1)	210
図版5 炭化材(2)	211
図版6 炭化材(3)	212
図版7 炭化材(4)・種実遺体	213

2 久泉遺跡出土の種実遺体

図版1 ソモの核	214
----------	-----

6 久泉遺跡出土鉄器類の調査

図版1 №1 管状遺物 (SI492)	240
図版2 №2 棒状鉄製品 (旧河道)	241
図版3 №3 小刀 (SI492)	242
図版4 №4 小刀 (SI492)	243
図版5 №5 小刀破片 (SI494)	244

写真図版目次

図版1 空中写真 (昭和38年(1963)国土地理院撮影)	
図版2 空中写真 (平成13年(2001)国土地理院撮影)	
図版3 垂直写真(1) 第2造構面 第3造構面	
図版4 垂直写真(2) 第2造構面東側調査区西部分 第3造構面(礫出土状況)	
図版5 第1造構面 SD147・148・149・150・151・152 SK159	
図版6 第2造構面(1) 西側調査区 東側調査区(礫出土状況)	
図版7 第3造構面(1) 西側調査区 東側調査区	
図版8 市道・排水溝調査区(第2・3造構面)	
図版9 第2造構面(2) SB01 SK443・233 SP476・444・436・284・285・483	
図版10 第2造構面(3) SB02 SP228・428・239・477・237・229・427	
図版11 第2造構面(4) SB03 SP1218・1211・1208・1216・516・1217・1210・1219・1223・1222	
図版12 第2造構面(5) SB04 SP388・313・345・433・426・425・293・287	
図版13 第2造構面(6) SB05 SP560・572・571・599・573・574 SK556	
図版14 第2造構面(7) SI97	
図版15 第2造構面(8) SI166	
図版16 第2造構面(9) SI166 SK277	
図版17 第2造構面(10) SI166 SK2・P2・P3・P5・P1	
図版18 第2造構面(11) SI167 SI395	

- 図版19 第2遺構面(12) SI491・492・493・494・495
- 図版20 第2遺構面(13) SI491 カマド
- 図版21 第2遺構面(14) SI491
- 図版22 第2遺構面(15) SI492 燐土
- 図版23 第2遺構面(16) SI492 P5・P1 鉄製品出土状況
- 図版24 第2遺構面(17) SI493 SK490・489
- 図版25 第2遺構面(18) SI493 SK497
- 図版26 第2遺構面(19) SI494
- 図版27 第2遺構面(20) SI494 カマド
- 図版28 第2遺構面(21) SI494
- 図版29 第2遺構面(22) SI550 SP640・641
- 図版30 第2遺構面(23) SI600 P1 燐土
- 図版31 第2遺構面(24) SI620 SP561・583・579・577
- 図版32 第2遺構面(25) SI650 SX649
- 図版33 第2遺構面(26) SI1220 SP1221
- 図版34 第2遺構面(27) SK66・67・260・402・424・488
- 図版35 第2遺構面(28) SD09
- 図版36 第2遺構面(29) SD09
- 図版37 第2遺構面(30) 素掘小溝
- 図版38 第3遺構面(2) SK1021・1085・1022・1021・1085・1100 SP1048・1049・1050・1051
- 図版39 基本層序
- 図版40 作業風景
- 図版41 久泉遺跡出土遺物集合写真
- 図版42 遺構・遺物包含層出土遺物(1) 立面写真
- 図版43 遺構・遺物包含層出土遺物(2) 立面写真
- 図版44 遺構・遺物包含層出土遺物(3) 立面写真 第1遺構面
- 図版45 遺構出土遺物(2) 挖立柱建物 深穴建物
- 図版46 遺構出土遺物(3) 墓穴植物
- 図版47 遺構出土遺物(4) 深穴建物
- 図版48 遺構出土遺物(5) 墓穴植物
- 図版49 遺構出土遺物(6) 深穴建物 大溝(SD09) 素掘小溝
- 図版50 遺構出土遺物(7) 旧河道 土坑 ピット
- 図版51 遺物包含層出土遺物(1) 繩文土器
- 図版52 遺物包含層出土遺物(2) 繩文土器
- 図版53 遺物包含層出土遺物(3) 打製石斧(Ⅰ類)
- 図版54 遺物包含層出土遺物(4) 打製石斧(Ⅰ類)
- 図版55 遺物包含層出土遺物(5) 打製石斧(Ⅰ類)
- 図版56 遺物包含層出土遺物(6) 打製石斧(Ⅰ類)
- 図版57 遺物包含層出土遺物(7) 打製石斧(Ⅰ・Ⅱa類)
- 図版58 遺物包含層出土遺物(8) 打製石斧(Ⅰ・Ⅱa類)
- 図版59 遺物包含層出土遺物(9) 打製石斧(Ⅱa類)
- 図版60 遺物包含層出土遺物(10) 打製石斧(Ⅱa・Ⅱb類)
- 図版61 遺物包含層出土遺物(11) 打製石斧(Ⅱb類)

- 図版62 遺物包含層出土遺物(12) 打製石斧(II b類)
- 図版63 遺物包含層出土遺物(13) 打製石斧(II b類)
- 図版64 遺物包含層出土遺物(14) 打製石斧(II b類・破片)
- 図版65 遺物包含層出土遺物(15) 打製石斧(II b類・破片)
- 図版66 遺物包含層出土遺物(16) 打製石斧(破片)
- 図版67 遺物包含層出土遺物(17) 打製石斧(破片)
- 図版68 遺物包含層出土遺物(18) 打製石斧(破片) 磨製石斧 石錐 紙石 須恵器(蓋)
- 図版69 遺物包含層出土遺物(19) 須恵器(蓋・杯)
- 図版70 遺物包含層出土遺物(20) 須恵器(杯)
- 図版71 遺物包含層出土遺物(21) 須恵器(杯・瓶・蓋・盃)
- 図版72 遺物包含層出土遺物(22) 須恵器(甕) 土師器(碗・甕)
- 図版73 遺物包含層出土遺物(23) 土師器(甕・瓶) 土錐
- 図版74 遺物包含層出土遺物(24) 中世土師器(甕) 珠洲(甕・搖鉢) 近世陶器
- 図版75 遺構・遺物包含層出土遺物(4) 鉄製品

序 章 調査と経緯

1 調査に至る経緯

A 高道向島遺跡の調査

一般国道359号砺波東バイパス建設工事は、平成4年に都市計画が決定され、第1期工区・花園町～矢木区間の工事は平成10年に着手している。

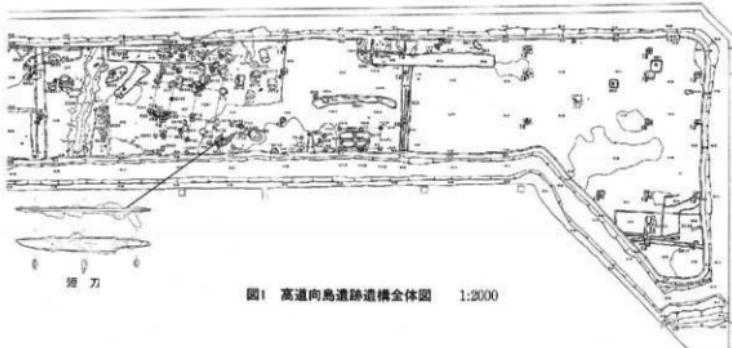
同じ路線内における埋蔵文化財調査としては、久泉遺跡の他に高道向島遺跡の本発掘調査が実施されている。事業実施に際して富山県高岡土木工事事務所および砺波市役所産業建設部土木課より照会を受け、富山県埋蔵文化財センター協力のもと平成8年6月に計画路線内の分布調査を実施、その結果埋蔵文化財包蔵地が確認され保護措置を講じる目的で平成9年3月に試掘調査を実施している。遺構・遺物が良好に検出された範囲を「花総合センター南遺跡」と仮称し、花総合センター南遺跡としている¹⁾。

高道向島遺跡の調査では、古代、中世、近世の3時期の遺構・遺物を検出している。遺構は中世が主体を占め、掘立柱建物、炭焼窯、墓、溝、柱穴、ピット等がある。遺物は、土師器、須恵器、珠洲、青磁、白磁、鉄製品等構成され、8世紀後半と13世紀前半の2時期に大別される。SK35からは土師器、珠洲等と共に刃部長19cmを測る短刀も出土している。古代の内容が貧弱 短刀であるため評価は難しいが柱穴を検出していることから、奈良時代における層状地開発に関連する集落の可能性が高く、それまで芹谷野段丘縦での宮森新北島Ⅰ遺跡の奈良時代後半の2×3間の掘立柱建物²⁾に次ぐ成果として注目された。中世においては、平賀家領油田条の南城に位置するが、文献史料の初現となる14世紀後半よりやや古く中世莊園の開発に先行する集落と推察される。

宮森新北島
Ⅰ遺跡

1) 砧波市教育委員会 1999『高道向島遺跡』

2) 富山県教育委員会 1978『富山県砺波市宮森新北島Ⅰ遺跡緊急発掘調査報告』



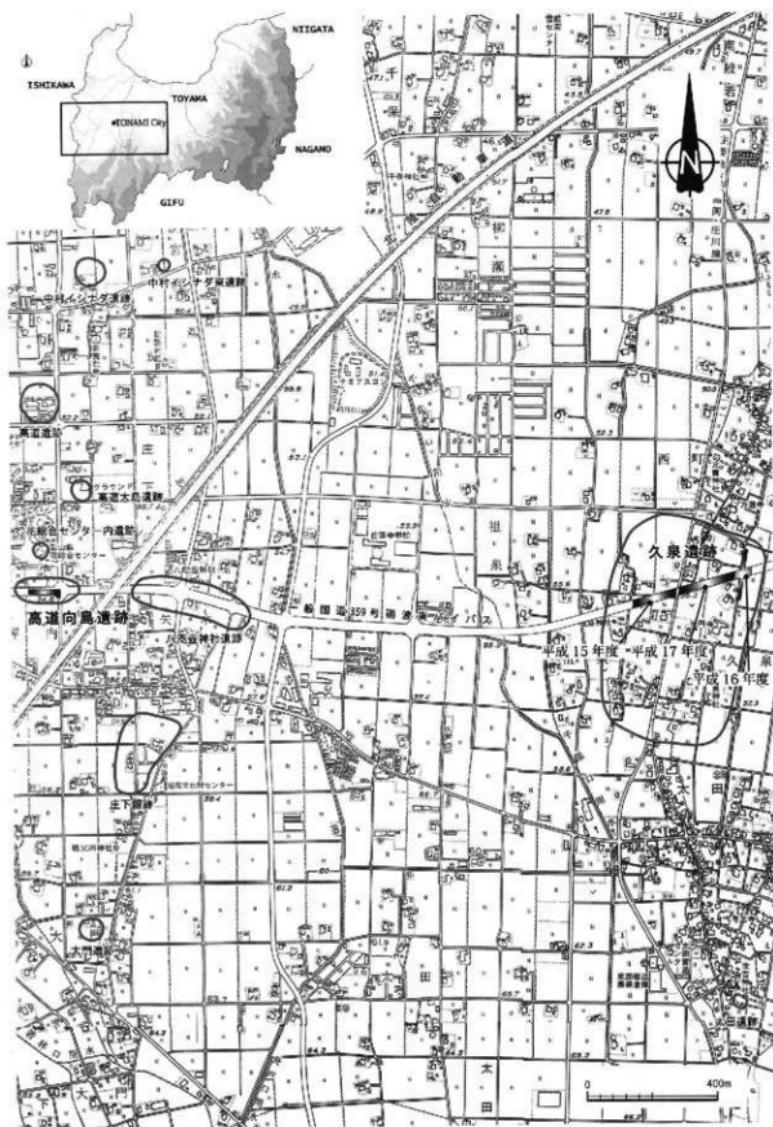


図2 国道359号砺波東バイパス間違の埋蔵文化財調査地 1:15,000

砺波市都市計画 (1:10,000) を基に作図

B 久泉遺跡の調査

今回発掘調査を実施した久泉遺跡は、矢木から柳瀬までの路線にあたり第2期工区の範囲にある。

(1) 事前協議

平成11年11月、砺波市管内における国道359号の埋蔵文化財対応について、砺波市土木課、砺波市教育委員会生涯学習課、建設省富山工事事務所調査第二課、富山県埋蔵文化財センターの四者で協議し、砺波市庄下・太田・柳瀬地内の分布調査を実施することで合意した。それを受けて同月、分布調査実施内容の詳細について確認している。

(2) 分布調査（平成11年度）

調査期間：平成12年（2000）3月21日

調査体制：砺波市教育委員会	生涯学習課	学芸員	利波 匡裕
富山県埋蔵文化財センター	企画調整課	係長	久々 忠義
		主任	岡本 淳一郎
		文化財保護主事	高梨 清志
		文化財保護主事	境 洋子

※役職名は当時のもの

事業予定地内における分布調査は、砺波市教育委員会が主体となり、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。調査対象面積は42,500m²である。調査の結果、久泉遺跡周辺において上師質土器、須恵器、青磁、近世陶磁器あわせて15点が採集された。遺物採集地点は2箇所において集中的に分布している状況であった。また周辺に「カンジャダ」¹⁾（鍛冶屋田か） カンジャダという旧地名も残っていることなどから、遺物集中域を含めるようにして遺跡範囲を拡大することとなった。

(3) 試掘調査（平成14年度）

平成14年6月、国土交通省北陸地方整備局富山工事事務所、富山県教育委員会文化財課、市土木課、市教委生涯学習課で四者協議を行い、分布調査で確認された遺跡範囲内における埋蔵文化財の対応について協議した。調査は試掘調査で対応することとし、砺波市教育委員会が主体となって調査することで合意した。平成14年7月、国土交通省と砺波市教育委員会は砺波東バイパス久泉遺跡発掘調査に係る委託契約を締結、同月30日より試掘調査を開始した。

試掘調査の結果、面積18,630m²のうち約13,000m²において遺構・遺物が良好に検出され、久泉遺跡の広がりを確認した。このことにより試掘対象記録保存等の保護措置が必要であるという結論に至った。

試掘調査結果を受けて再度四者協議をし、保護措置等が必要な範囲について次年度以降に本発掘調査にて対応することで合意した。7月の試掘調査の結果、周辺には舌状の微高地がいくつ

1) 砧波市老人クラブ連合会 1993 「砺波市の地名 - 郷土の字 - 由来調査報告書案報告書 - 」。

か存在することが判明し、西端の微高地は調査対象地の西側に続く状況が明らかとなった。そこで市教育委員会が主体となり、祖泉神社西側の施工予定地約4,500m²を対象として追加の試掘調査を実施することになった。調査の結果、埋蔵文化財が希薄な地帯であることが判明、保護措置の必要がないと判断した。

試掘調査によって久泉遺跡の範囲が明らかになったため、本発掘調査対象域を東西の端とし、
太田地区從前図 太田地区從前図に基づき南北の包蔵地の広がりを推定し、また新たに縄文時代遺物等を検出したことから包蔵地の範囲および内容変更の登録を行った。

(4) 本発掘調査

平成15年から平成17年度にかけて国土交通省北陸地方整備局富山河川国道工事事務所と砺波市は委託契約を締結し、本発掘調査を実施することになった。今回の一連の調査は、市内における初めての大規模発掘調査となった。

調査

調査年次	調査期間	調査面積	主な時代
平成15年度	2003.4.21～2003.9.30	4,100m ²	縄文時代、中世
平成16年度	2004.4.21～2004.9.30	2,932m ²	縄文時代、奈良・平安時代、中世
平成17年度	2005.4.19～2005.12.14	4,531m ²	縄文時代、奈良・平安時代、中世
計		11,563m ²	

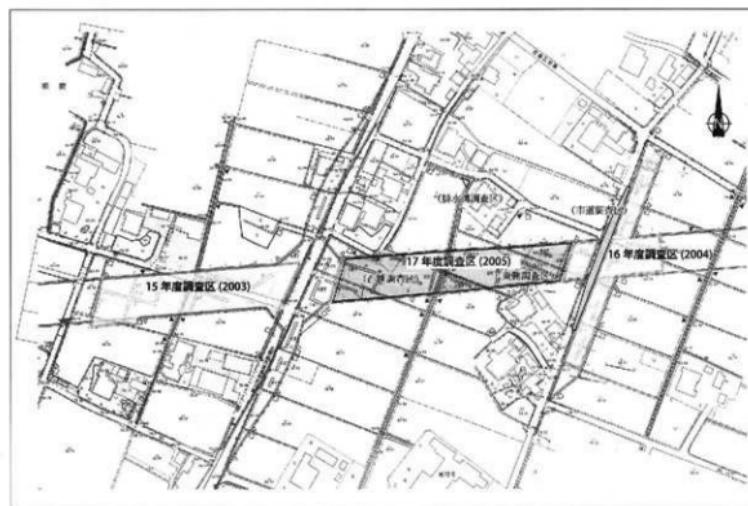


図3 久泉遺跡発掘調査地 1:3,000

2 既往の調査

A 平成15年度の調査

遺跡の西側に位置し、上下2つの遺構面を確認している。時期は縄文時代と中世の2時期あるが、本来上層遺構面で検出すべき中世遺構を下層で認識した場合もあるため、厳密に「上・下遺構面=時期差」と区別することは難しい。以下、各時期の成果についてまとめたい。

縄文時代 下層遺構面で確認できたが、実際に遺物を伴う遺構は少ない。遺構は、土坑・ピットのみで構成され、土坑には直徑60cm、内部径75cm、深さ45cmの袋状土坑(SK61)を袋状土坑はじめ、直徑約20~30cm、深さ20cm前後のピットを多数検出している。遺物は縄文土器、打製石斧の2種のみで遺構と同じく多様ではない。土器は細片に限られ、その量は整理箱1箱にも満たない。土器型式は、中期中葉から後葉の上山田式・天神山式・串田新I式・串田新II式、土器型式

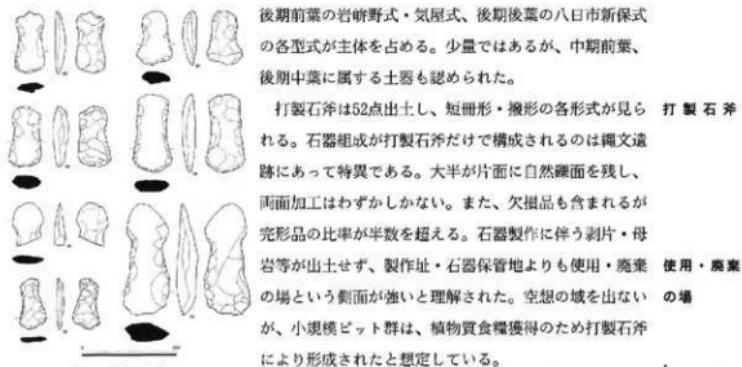


図4 打製石斧



図5 下層遺構全体図 (H 15調査区) S=1:800

中世 調査区全体で上下遺構面から確認できたが、西側は石組建物（土台建物）・掘立柱建物・土坑（井戸）が集中し、東側は墓と考えられる土坑が密集している状況にあった。

石組建物 石組建物（SK166）は、南北6.4m×東西5.4m、面積約34.5m²を測る。北西隅は破壊されていたが、他は遺存状態は良好である。検出面から約20cm掘り込み、川原石をコの字形に規則的に配置し、南に石列を構築し小石で接続している。床面からピットを検出したが関連するか判断となかった。機能は限定できず、石列に根太を据え上屋を構築する「土台建物」に似るが石列上面の高低差があるため確定できない。平面形状から建物と思われる。13世紀後半の青磁が出土しているが、周辺状況を勘案し14世紀の年代を与えた。

方形土坑群 方形土坑群は約20基あり、南北・東西に長軸を持つ。貨銭・中世土器が出土する

脂肪酸分析 ため土坑墓と脂肪酸分析を行ったが芳しい結果は得られなかった。炭素年代では11世紀後半～12世紀、遺物年代では12世紀後半から14世紀に帰属する。

平行する溝 また、約50mの間隔で幅1.5m前後の溝2本が平行して磁北から13～19度東に振った方向に直線的に走行している。12世紀後半から14世紀の遺物を含む。

遺物は土師器、珠洲、瀬戸、青磁、宋錢、八尾で構成される。中世土器はすべて非ロクロ成形の皿で、12世紀後半から13世紀前半、14世紀、15世紀の3時期ある。14世紀は底部内外面に強い指頭圧痕があるのが特徴であり、手づくね技法に近い方法で製作されたと考えられる。県内で類例が認め難く、衝波平野東部で生産された地域色の強い土器として注目される。

下地中分 中世は徳大寺家領般若野莊の時代であり、遺構・遺物とも15世紀を境に希薄化するのは、下地中分後に領主方が知行分を縮小し地頭方が勢力拡大する動きと時期的に符合するため、何らかの情勢が影響していると推察される。

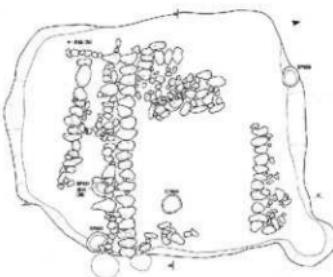


図6 石組建物（SK166） S=1:100

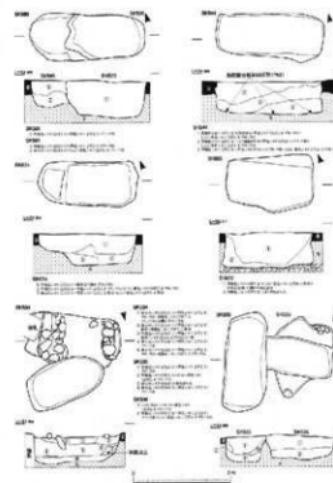


図7 方形土坑群 S=1:100

B 平成16年度の調査

検出された遺構は、掘立柱建物、土坑、溝、ピットと構成する種類は少ない。前年度調査と同じく上下2層の遺構面を認識でき、年代を特定する材料が少ないと上層は古代～中世に属すると考えられる。中央に2間×3間の掘立柱建物、そして調査区を北西方向に縦断して大規模な溝が走る。下層遺構は、縄文期の遺物包含層下面で確認されたが、打製石斧をはじめ遺物の大半が包含層中位レベルで検出され、地山との境界に漸移層の発達が認められるため、縄文期の旧地表面（生活面）は検出面より上位にあると推測できる。

縄文時代 前年度同様、打製石斧が散在し73点を数えた。新知見としては、打製石斧の遺構内出土、打製石斧未成品と思しき遺物の検出、磨製石斧の出土、土器が集中する範囲があったこと等が挙げられる。

SP265底から別個体の欠損打製石斧2点が検出された。2個体が重なるので意図的に埋納されたか、廃棄、混入のいずれの可能性もある。伴出土器はない。

遺物包含層中に礫（川原石）が集中する範囲があり、打製石斧と上器が検出された。気屋式土器がまとめて出土する範囲がある。疊破片が数点出土しており、SP417から被熱した破片がまとめて検出された。「打製石斧未成品」と報告した個体が出土したことから打製石斧製作址の可能性も考えられたが、母岩や粉砕跡、大型削片や未成品の大眾出土がないので断定できない。

土器量は前年より格段に増えたが、縄文遺跡としては少ない。土器型式は、古府式（中期中葉後半）、串田新II式（中期後葉）、気屋式（後期前葉）の諸型式がある。気屋式や串田新II式のまとまった破片、そして無紋の粗製土器の大型破片がある。

石器組成に磨製石斧が加わり、焼土や炭化物を多含する土坑も検出されたが、一般的な縄文集落とは異なり、墾穴住居等の居住施設はなく、打製石斧が主体的に出土するという傾向を認めた。



図8 下層遺構全体図 (H16調査区) S=1:800

古代・中世 検出された遺構は、据立柱建物、土坑、溝、ピットと構成する種類は少ない。遺物は遺構内出土のものに限られる。遺物包含層は削平された可能性が高く、旧地表面は検出面より上位に存在したため深度のある遺構のみ検出したものと考えられる。据立柱建物は1棟だけ検出しており、桁行3間・梁間2間の純柱建物で伴出遺物がないため年代特定は難しいが柱穴規模や平面プランから中世に属すると考えられる。古代・中世期の遺構で注目されるのは、調査区を北西方向に継続する大溝・SD09とその北側に平行するSD03である。SD09は最大幅12.5m、深さ1.75mを測る規模の溝であり、試掘調査段階では旧河道として扱っていた。しかし、遺跡内でも比較的高い場所を走っている点や数度の埋没と再堆削の痕跡が堆積状況から認定可能であったこと、地山である層状地形成砂礫層を掘り抜いている状況等を総合的に判断し、人工的に造成された溝と断定した。

覆土に遺物を含むが混入の可能性もあるため、遺構の開削年代を特定できない。遺物は8世紀後半の須恵器から14世紀前半の土師器の年代幅がある。最終堆積層から12世紀後半から13世紀初頭の同安窯産の青磁碗が出土している。

SD09は磁北から約45度東に振って配置されている。並走するSD03の存在からも計画性をもつことが推察できる。下流方向には東大寺領莊園やその莊村である伊加留伎村の比定地があることから、それら莊園と何らかの関係を持つものであれば古代における層状地開発史に一石を投じるものと評価できる。

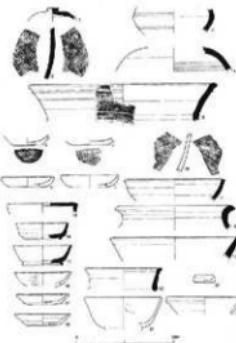


図9 上層遺構全体図 (H16調査区) S=1:800

第2章 地理と歴史

1 地理的環境

久泉遺跡の所在する砺波市は、富山県の西部中央にある。面積は126.96 km²、人口49,237人（平成19年2月末現在）であり、東経136度54分～137度04分、北緯36度33分～36度41分に位置している。

砺波市は、地形的に3つに大別できる。(1) 庄川の堆積作用によって形成された砺波平野さなへいの 地形三態じけいさんたい
（庄川扇状地）、(2) 平野と山地の間に南北に細長く存在する河岸段丘・芦谷野段丘と庄川左岸段丘、(3) 東部に射水丘陵から続く丘陵性の庄東山地で構成される。

砺波平野は、その大部分が東部を北流する庄川により形成された扇状地である。庄川扇状地は県内の三大扇状地（庄川・神通川・常願寺川）に數えられ、そのなかでも最大の規模を誇る。庄川扇状地の頂部である庄川町吉島から扇端部である高岡市南部の湧水帯までの距離は13～15km、面積は146 km²に及ぶ。源を岐阜県莊川村に発し、高岡市を経由して日本海に注ぐ。流域延長115 km、流域面積1180 km²、平均河床勾配1/120～1/800の規模をもつ。庄川扇状地の勢いに押されるようにして小矢部川は平野西端部を流れ、庄川の排水河川の役目を果たしている。庄川扇状地には、地理学上著名な散村（Dispersed Settlement）が広がっており、点在する孤立莊宅とそれを囲む耕地が調和し、長閑な田園空間を形成している。

庄川は現在扇状地東部を北流しているが、かつて西にあった流れが時代とともに東に移動してきたという、いわゆる「庄川の東遷」説がある。もっとも古い主張と考えられるのは野尻川で、中村川、新又川と移り、天正13年（1585）の大洪水で千保川・中田川（庄川）に移り、寛永7年（1630）の洪水で現在の流れとなったとみるのが定説化している。

庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成（河岸）段丘が存在して

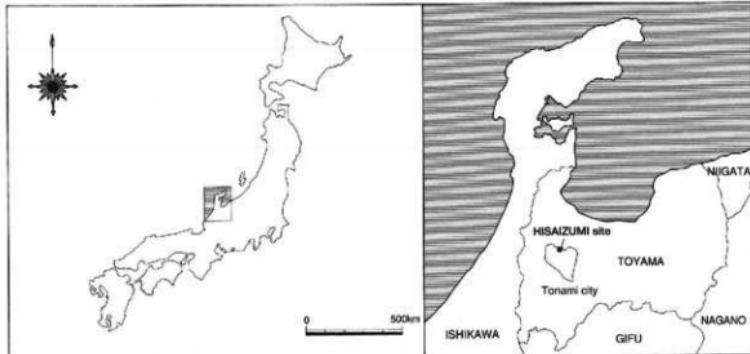


図10 久泉遺跡の位置

いる。それらは低位段丘、中位段丘、高位段丘として分類することができる。庄川町庄から宮森までには低位段丘が存在しており、隆起扇状地堆積物が形成されている。頼成・権正寺・東保では、庄川右岸に沿う帶状の自然堤防の微高地上に集落が発達している。

芹谷野段丘 高位段丘にあたる芹谷野段丘（福岡段丘）は、旧扇状地の右扇の一部が残存し段丘となったものである。南は安川付近から北は大門町串田付近まで約10kmに広がり、福岡周辺では海拔80m、段丘崖約30mを測る。段丘南部の福山の山麓丘陵地はこの段丘地形面と同時期もしくは前後に形成された扇状地性の堆積層である。寛文3年（1663）に庄川から芹谷野用水が引かれ、段丘上に集落が展開した。

和田川流域 芹谷野の旧扇状地の東側と庄東山地の縫合部の凹地に和田川が発達し、両岸を侵食して低い段丘帯を形成しており、和田川流域段丘帯と呼ばれる。和田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇行し、池原付近で坪野川が合流する。流域延長23.5km、庄川の支流である。

昭和43年、和田川総合開発事業により

和田川ダムが竣工、川が堰き止められて増山湖ができる。

庄東山地 牛嶺山麓以北の丘陵性の山々は、富山県を東西に分断する射水丘陵帶の一枝群を成し、一般に庄東山地と呼ばれる。概して谷内川・和田川の流域に含まれる地域をさす。この山地は起伏量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青井谷シルト質泥岩層が基盤となる。この山地の西北に位置する天狗山（標高192m）の北斜面、県民公園頼成の森の緩斜面丘陵は、南側山地からのかかっての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成る。

マッド(Mad) 扇状地上には微高地が島状に点在し、その間を繞うように旧河道が蛇行する。そこにはマッドという植土や壌土が分布し、黒土層の堆積がみられる。黒土層は、①黒ボク層で自然堤防・中州状微高地から縁辺部に分布するもの、②湿地帯で生成される有機質層、③埋没微高地から縁辺部で生成された黒土層で、畠地土壤化・水田土壤化したもの、の3種に分類される。（野原）

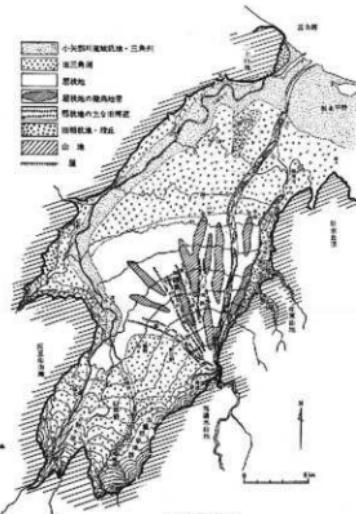


図11 磨波平野周辺の地形

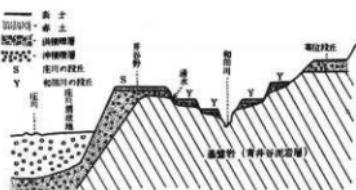


図12 芹谷野段丘の模式図

（砺波市史1994より抜粋）

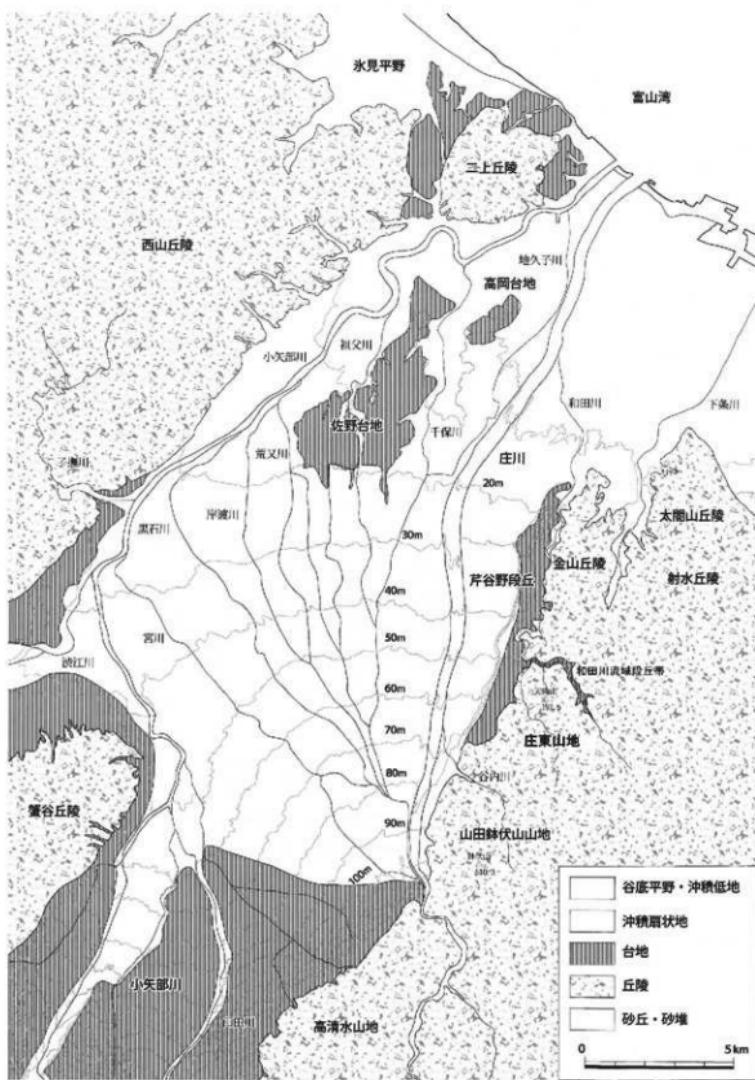


図13 庄川扇状地を中心とした地形分類図 1:150,000

2 歴史的環境

本遺跡を理解するために市内の歴史的環境について概観する。

- 旧石器時代** IH石器時代の遺跡は庄川右岸の庄東山地や芹谷野段丘に分布し、庄東山地の芹谷遺跡・^{主な遺跡} 池原遺跡・増山貝喰山遺跡・賴成D遺跡、芹谷野段丘の高沢島I・II遺跡などがある。旧石器が注意されたのは、昭和48年頃の芹谷遺跡が初めてであり、住職久雄氏の業績による。氏の発見以来、これまで100点以上の石器が表面採集された。それらは「立野ヶ原型ナイフ形石器」と呼ばれる鉄石英・玉髓でできた小形剥片と、濃飛流紋岩類・溶結凝灰岩によるナイフ形石器や彫器で構成され、AT降灰期に相当する。
- 縄文時代** 芹谷野段丘以東を中心として縄文遺跡が濃密に分布する。高位段丘である芹谷野段丘では、^{主な遺跡} 上和田遺跡、嚴照寺遺跡、宮森新天池遺跡、^{主な遺跡} 宮森新北島I遺跡、賴成新遺跡、三合遺跡があり、中位段丘の和田川流域段丘帯には、高沢島I・II遺跡、増山遺跡などがある。福山大堤遺跡で表採された石槍

- 草創期** は、濃飛流紋岩類の半月形石槍で草創期に属する。
- 前期** 前期は宮森新北島I遺跡、増山遺跡でわずかに出土
- 中期** 例があるが、県内の遺跡動態と同じく中期段階で遺跡数が増加する。芹谷野段丘縁辺の嚴照寺遺跡は、松原遺跡と並び市内の縄文遺跡として最も著名である。名越仁風氏ら地元研究家や富山考古学会の働きかけで周知されるようになり、梅禮野地区園場整備事業に先立ち昭和50・51年に試掘調査、昭和51年に富山県埋蔵文化財センターによって本調査が実施された。出土土器群は、「嚴照寺I式・II式・III式」として中期前葉の様式であったが、現在は新保・新続式に包括され扱われている。遺構

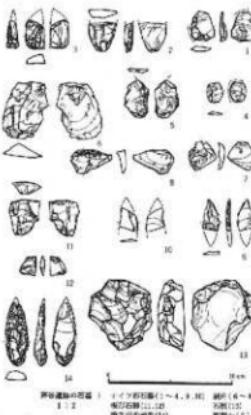


図14 芹谷遺跡の石器 S=1:4
(砺波市史1984より転載)

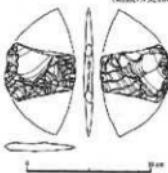


図15 福山大堤遺跡の石槍 S=1:4
(砺波市史1984より転載)

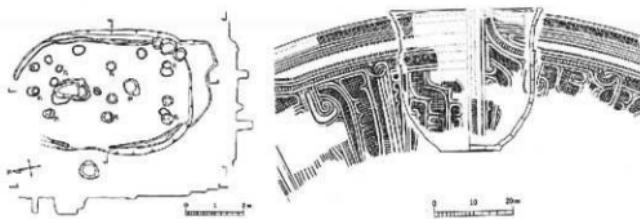


図16 嚩照寺遺跡の竪穴住居跡と土器 (左図) S=1:160. (右図) S=1:12

(砺波市史1984より転載)

では、竪穴建物跡11棟・埋甕1箇所・穴などが検出され、典型的な弧状集落であることが判明した¹⁾。近接する宮森新北島I遺跡では、鐵照寺I式土器群と中期の竪穴建物跡1棟を確認している²⁾。

低地では平野東部の低位段丘上に宮森遺跡、徳方遺跡、東保石坂遺跡、東保遺跡（東保高池遺跡）など芦谷段丘を抉る谷口付近に存在する。扇状地扇尖部で唯一発見された久泉遺跡は打製石斧を主体的に出土する遺跡である。低地における集落は未発見であり、縄文期の遺跡動態を把握できていない。

扇状地扇頂部には中期前葉から中葉の大規模集落、松原遺跡がある。庄川左岸の最下位段丘上にあり、遺物・構造の質・量ともに豊富である。竪穴建物は、方形石組炉を伴う建物や長軸11mを測る大型建物（04号）など10数棟が検出されている³⁾。04号竪穴建物からは、多くと土器とともに打製石斧、磨製石斧、石鏟、擦石、石錐が出土している。松原遺跡は土器が多く出土し、中期前葉から中葉（新崎式～上山田・天神山式）が主体を占める。庄川での漁労活動で生計をなしたこと、そして五箇山、飛騨に抜ける交通の要衝に位置したことが大集落を形成できた要因と考えられる。

大正13年頃、孫子の上原地内において県内でも稀少なバナナ形石器が出土している。中尾遺跡から出土した鶴物石器は、市指定文化財となり福岡の鐵照寺で保管されている。

弥生・古墳時代 弥生から古墳時代にかけては空白の時代である。社会基盤の稻作經營移行に連動し、生活圏が湧水帯（扇端部）に移動したのである。わずかな資料として福山大堤遺跡や安川野武士A遺跡B地点、増山城跡出土の弥生土器がある。婦負郡や射水郡に連なる丘陵地帯や低位段丘上、扇状地に点在するマッド上などに未発見の遺跡が存在する可能性がある。古墳時代資料としては、高沢島Ⅲ遺跡がある。古墳時代後半の土師器の甕や高杯の一部が出土している。増山城跡内の又兵衛清水付近から内面に刷毛目調整を施した土師器片が出土している。池原には“丸山古墳”やかつて県指定史跡であった“狐塚古墳”があるが、現在古墳を見る研究者は少ない。周辺では小矢部川左岸流域から扇端部、佐野台地に遺跡が分布する傾向にある。平野東部は閑地である。

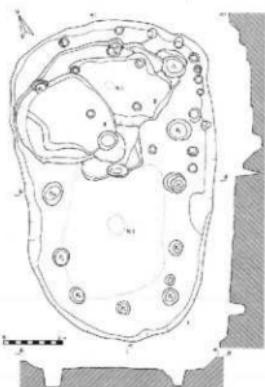


図17 松原遺跡の04号竪穴建物 S=1:100



図18 松原遺跡出土の縄文土器 S=1:10

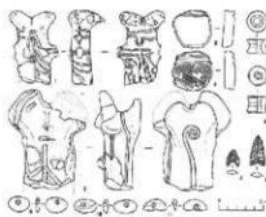
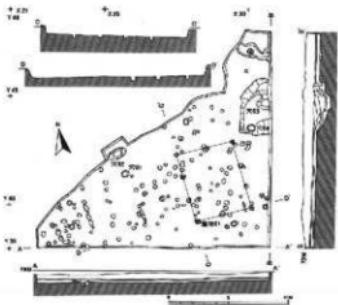
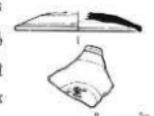
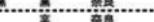
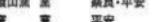


図19 松原遺跡出土の土製品 S=1:5

1) 富山県教育委員会 1977『富山県砺波市鐵照寺遺跡緊急発掘調査概要』

2) 富山県教育委員会 1978『富山県砺波市宮森新北島I遺跡緊急発掘調査概要』

3) 庄川町教育委員会 1975『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査報告書』

奈良・平安時代	考古学的な空白期間	
のち、市域では扇状地から段丘上にかけて古代の遺跡が出現しある。いずれの遺跡も8世紀後半以降であることから奈良時代末、庄川扇状地東部に展開した四荘の東大寺領莊園（石栗莊・伊加流伎莊・井山莊・伴名莊）の成立に連動したものと考えられる。		
芹谷野段丘縁辺の宮森新北島I遺跡では、		
掘立柱建物	桁行3間×梁間2間、面積32m ² の掘立柱建物が検出されている。周辺遺物から8世紀後半と見られる。須恵器窯跡群内には、	
堀稟野窯跡群	増山遺跡、高沢島II遺跡、高沢島III遺跡、宮新遺跡がある。平野部において久泉遺跡以外では建物遺構を伴う集落遺跡は未確認だが、高道向島遺跡、安川野武士遺跡、安川山下遺跡、薬勝寺遺跡、徳万遺跡、太田遺跡、秋元庭田島遺跡、宮村遺跡、千代遺跡、油田大坪遺跡、小杉遺跡がいずれも微高地のマド上に存在する。	
増山支群と福山支群	窯跡群は南北の2つの支群により成り、増山支群と福山支群で構成される。増山支群は、段丘縁辺に数基存在するが、大半が山地に立地し、射水丘陵窯跡群域にまで食い込むように存在する。福山支群には著名な福山窯跡をはじめ、福山小堤窯、福山大堤窯、安川天皇窯で構成される。増山支群に比べ発見された窯跡数は少ない。	
芹谷野段丘縁辺に立地している。良質の粘土と薪木の獲得が可能であることから、窯窓条件の良い芹谷野丘陵一帯に須恵器生産地が選定されたものと思われる。窯跡群内には炭焼窯も多数発見されており、燃料材となる山林資源の用役問題と密接な関係を指摘することができる。		
増山支群の宮森窯と福山支群の安川天皇窯		
		
		
		
		
		
		
		
		
		
		
		
		

1) 研究会編『砺波市史編纂委員会』1962『砺波市福山（徳万赤坂）須恵器窯発掘報告』

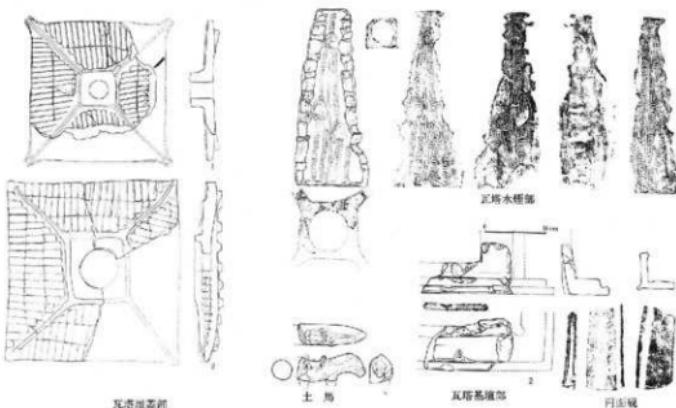


図22 福山窯跡出土品 S=18

がもっとも古く8世紀第2四半期に位置づけられ、8世紀第3四半期から第4四半期にかけて増山支群の増山龜田窯、増山團子地窯、増山妙覺寺坂窯が操業を始め、同時期には福山支群で福山窯、福山小堤窯、福山大堤窯が操業している。9世紀前半に入ると、小丸山1・2号窯が操業され、9世紀後半から10世紀にかけて正櫛後島窯、増山外貝喰山窯、増山篠山窯、東笠錦野窯が操業をし、以後櫛野窯跡群では須恵器生産が衰退する。

府種野窯跡群が成立した8世紀後半は、「一郡一窯的」体制ともいるべき神合的土器生産体制、つまり須恵器と土師器の一体生産が確立する時期にあたる。この窯業上の画期は、律令国家の経済政策と連動するものであり、古代前半期（7世紀初頭から9世紀初頭）の手工業生産政策は行政単位ごとの集約的な手工業センターを作ることを目指した。砺波郡では、小矢部川左岸の安居・岩木窯跡群において7世紀前半から須恵器生産を始めており、その後7世紀後半から窯場が増加し、8世紀代には小矢部川左岸や芹谷野段丘上に窯跡群が展開する。それまで小矢部川左岸に生産城が集中していたが、突如として砺波平野東部に窯場が作られる。

昭和37年7月に砺波市史編纂委員会を中心となり、福山窯跡の発掘調査を実施した。出土品には水煙・屋蓋・軸・基壇など瓦塔の一部や円面鏡、土馬など特記すべき遺物があり、市指定文化財となっている。

鎌倉時代 徳大寺家領般若野莊は平野東部に広く展開し、現庄川両岸に沿って南は三谷地区から北は中田地区に及ぶ広大な荘域であり、奈良時代に成立した東大寺領莊園（伊加流伎・石栗・井山莊）三莊を包括する。

徳大寺家は藤原北家の流れを継ぐ閑院流の出であるが、般若野莊がどのような機縁で家領となつたのか、またいつごろ成立したか確証となる史料はない。知行国制が一般化し、緣故関係や成功によって國守が選任され、私的人脈によって國政が普遍化していく了院政期にあって、徳大寺実能・公能父子が越中国の政務に深く関わっていることを考慮すれば、公能が越中国守となつた大治元年（1126）頃に般若野莊の成立をみるのが妥当であろう。

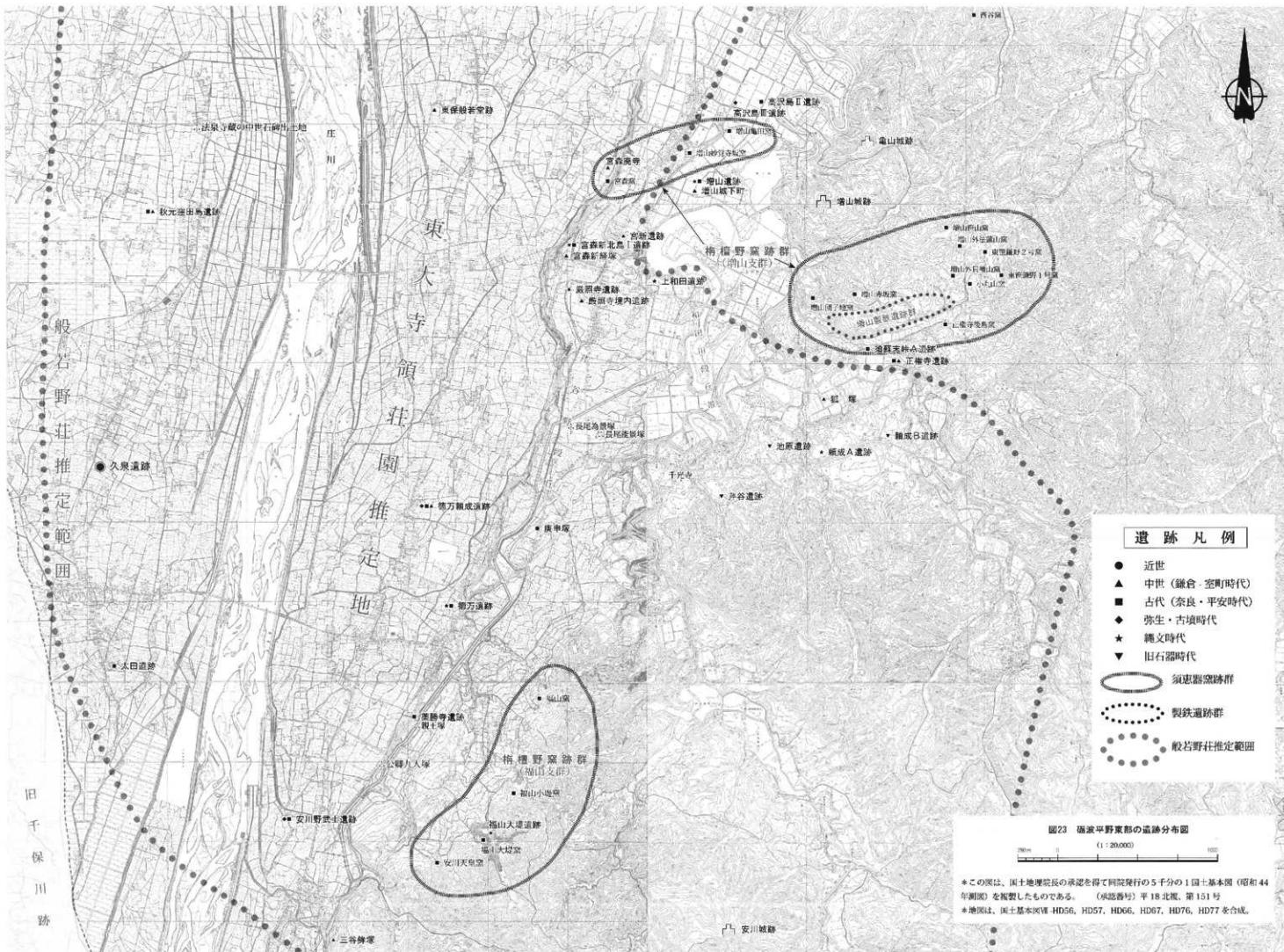
中世において般若野莊では幾度かの合戦が繰り広げられた。治承・寿永の源平争乱では、寿永2年（1183）、般若野莊に布陣していた平盛俊は源軍の今井兼平を迎え戦ったが敗れ、退き小矢部川原で戦ったが劣勢となり但梨伽羅峰を越えて加賀に引き上げている。後鳥羽上皇が執和田城 横北条義時と敵対したことに関連して端を発した承久の乱では、承久3年（1221）鎌倉方である名越増山城（北条）朝時らの北陸道軍が般若野莊まで侵攻し、京方（後鳥羽上皇方）との合戦となった。京方はこの合戦で敗れ、軍陣に陥っている。

嘉吉元年（1441）の「藤原記」によると徳大寺公有が越中の莊園經營の不振に陥っている。長尾能景 庚永元年（1342）に般若野莊の南にある二谷寺が鎌倉覚園寺塔頭連華院領となっていることや、武家方の地頭方により押領が起りやむなく領地を折半する（下地中分）という事態に起因する。明応3年（1494）にあっては越中守の徳大寺家頼莊園が不知行となっている。大文14年（1515）、越中に下向した徳大寺実通は、知行分にて殺害される。雄神莊の庄城（塙ノ城）に掲げる石黒氏や神保氏、在地莊民のいずれの手によるものか不明であるが、家頼莊園での混乱状況をうかがうことができる。安川の般若山薬勝寺の南にある公卿九人塚と呼ばれる五輪塔の墓地は、災厄に關係があるのかもしれない。

佐々成政 莊城にある遺跡としては、東保遺跡（東保高池遺跡）、久泉遺跡、秋元塙田島遺跡、正権寺遺跡、狐塙遺跡などが存在する。12世紀後半から13世紀前半の東保遺跡（東保高池遺跡）では十師器が多量に出土し、墓地もしくは祭祀跡と考えられる集石状造構が検出されている。秋元中川光重 塙田島遺跡、正権寺遺跡はともに15世紀に位置付けられる。

南北朝・室町時代 南北朝時代には、二宮円阿軍忠宗に「和田城」という城名がみえる。和田城は、増山城に先立ち構築された龜山城であるという説が有力である。現在の龜山城は、戦国時代前期に修築された可能性が高いが、郭が同心円状に配置していることや全体的な規模などから増山城より古い構造をもつ。室町時代に神保氏が附貢・射水郡の守護代となり、はじめ龜山城を使用していたが、本城である放生津城の支城として龜山城を修築したとされる。永正3年（1506）、一向一揆を攻めるために進軍した越後守護代長尾能景が増山城に近い芹谷の合戦で討死していることから、軍事的緊張が高まっていたことが考えられ、龜山城の整備が行われ、現在の姿に近い形になったようである。さらに天文年間頃、神保長職が富山城の支城として増山城が構築されたと考えられる。このうち増山城は、長職を追撃した上杉謙信の手に落ち、永禄年間後期に長職と上杉が結んで一向宗徒を攻撃したときには、長職の本拠となっている。また、長職没後、一時に反上杉方が堀を構えるが、天正4年（1576）に謙信に攻められ落城し、天正9年（1581）に織田方に焼き払われている。天正11年（1583）以降、越中統一を果たした佐々成政によって修築された増山城は、この時もっとも城城が広く構造的に完成したのではないか。成政のうち、増山城は前田方の手に渡り、城の守将となった中川光重が退老もしくは没した慶長年間まで存続したと考えられる。

(野原)



第3章 調査の方法と成果

1 調査経過と調査方法

調査の経過 現地調査は4月19日に着手し、12月15日に完了した。期間は約8ヶ月を要した。調査区は、4箇所に分かれる。4箇所の調査区は、総面積4,631m²を測る。

大部分が国道バイパス本線部分の東側調査区・西側調査区で占められるが、国土交通省側からの要請で市道久泉線の地下横断道路施工部分（市道調査区）と農業用排水路拡幅工事部分（排水溝調査区）の調査も実施した。地下横断道路工事の工期の都合で、市道調査区を先行し6月末で完掘、平行して東側調査区・西側調査区に着手し、調査は12月まで継続した。調査の進捗状況を勘案し、狭小な水路調査区を10月に実施している。現地調査完了後、本格的に遺物整理業務に入り、18年3月までに遺物実測まで完了した。18年度に報告書作成および理科学的分析等を実施した。

市道調査区（500m²） 平成16年度東側調査区の西側、市道地下横断道路の掘削法面にあたるため、急遽調査を実施した。遺構面は、第2遺構面、第3遺構面の2面である。

東側調査区・西側調査区（4,118m²） 現地調査時に調査区中央を走る農業用排水路を境として、東側・西側とした区分を踏襲する。バイパス本線部分のため、主要な面積を占める。第1～3遺構面の調査を実施した。

排水溝調査区（13m²） 他の調査区と同様、基本層序に沿って遺構面となる各層位を確認したが、遺構・遺物とも芳しい成果がなかったので報告は図面（遺構全体図）のみに留め、詳細な記述は割愛した。

調査方法 現地調査は、富山県埋蔵文化財本发掘調査積算基準にもとづき、発掘作業の工程（表土等掘削→遺物包含層の掘削→遺構確認面の積立・遺構検出→遺構掘削→図面作成・写真撮影→埋め戻し）で平成17年度に実施した。試掘調査結果にもとづき、調査員立会いのもと重機による表土・盛土を除去した。排出した土砂は、一時的に南側の借地に山積みし、一部は国土交通省の指示によって穂瀬地区のバイパス工事区间にダンプトラックで搬送し、残りは完掘後に埋め戻している。遺物包含層掘削後、遺構検出とともに概略図を作成する。概略図を基に遺構の構成等を確認後、單なる落ち込みでないかの確認および柱穴と思われるビットは柱根痕跡の検出のため、土坑、ビット等の小規模な遺構を段掘りした。その後、半剝、断面図作成、完掘、写真撮影の順で作業を進める。整理作業等の工程（記録類と出土品の整理―報告書作成）は大半を17年度に実施し、報告書作成および理科学的分析等を18年度に実施した。理科学的分析の各方法は、第4章（p.177～）に記述する。

遺構面の問題 合計3面の遺構面を確認した。層序順に上から第1遺構面（近世）、第2遺構面（奈良・平安期）、第3遺構面（绳文期）とした。15・16年度調査区とは、基本層序5層の上・下を遺構面と扱う点は共通するが、第1遺構面は遺跡内で新たに認識した。

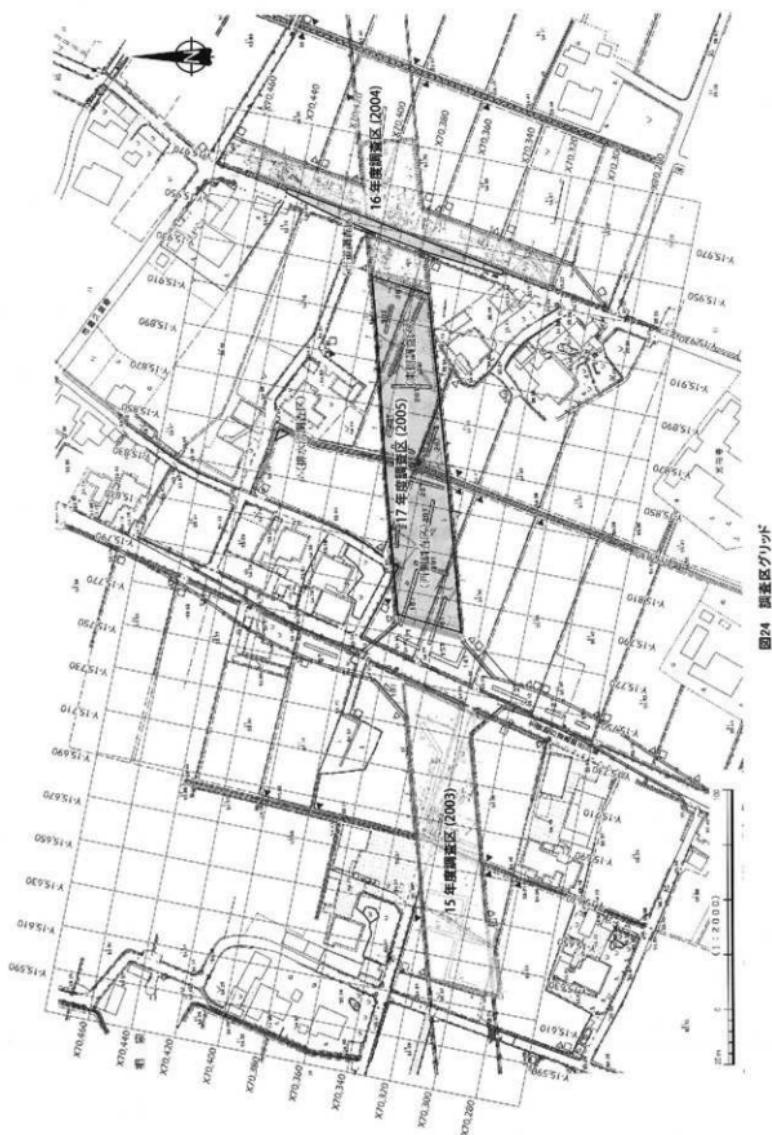


図24 調査区クリップ

調査参加者 発掘作業ならびに整理作業を通して下記の方々の参加を得ることができた。炎天下の中、ひたすら作業に従事してくださった作業員さん、ならびにすばらしい技術をもって整理に携わってくださった方々に衷心より謝意を表したい。

発掘作業

(砺波市シルバー人材センター)

安念一正、永森 堤、折橋 浩、川原義夫、島田一郎、仙道孝俊、田島 博、鶴巣ヨシエ、長森 勉、西村昌彦、野口静華、信田豊次、信田正明、林 清夫、東島耕三、松田利子、村上良雄、加藤福蔵、坂口茂男、古井勝嘉、宮脇重夫、室田清二、安ヶ川礼子

(株式会社 アーキジオ(旧中部日本鉱業研究所))

佐野睦美、野田幸二、定塚百合子、前田明子、石田哲雄、江口 實、大坪市雄、小川 勉、笠谷 晃、梶原哲郎、新保勝正、中原正人、広上正美、斎藤勝則、瀧口和弘、柳沢政勝、山田 力、林 恵彦、宝田紀代春、堀田 雄、西山祥子、鏡 武夫、西川 精

整理作業

(砺波市教育委員会生涯学習課)

千田友子、西木智子、横川美雪

(株式会社 アーキジオ(旧中部日本鉱業研究所))

佐野睦美、渡辺賀世子、宮口美香、浜本篤子、高橋英史子、梶原哲郎、角澤 黙、松沢秀雄

(株式会社 太陽測地社)

山口美子、岩池淳子、宮本洋子、徳川澄子、上山明代、加藤真紀

(株式会社 上智)

石黒 収、前田雅成

2 調査日誌抄

2005年4月21日～12月14日

- 5.13 先端調査作業員打ち合わせ。水路切り回し部分表土剥削。4層上面にて溝状造構・窓穴建物を確認。
- 5.16 水路切り回し部分表土剥削。市道調査区の壁切り終了後に5層剥削・造構検出。
- 5.17 市道調査区造構検出終了、検山写真撮影。SD09造構剥削開始。東側調査区東部分の表土剥削、造構検出。SD09検山。東側調査区水路切り回し部分の造構（窓穴建物など）検出作業終了、検出状況写真を撮影。電柱の矢板打ち込み（3本目）
- 5.18 東側調査区の表土剥削、造構検出。SD09全体を検出。水路切り回し部分の造構検出・剥削・撮影。市道調査区の造構剥削。SD09剥削。
- 5.19 東側調査区造構検出。土等器・須恵器出土。溝状造構検出。表土剥削。水路切り回し部分の造構剥削・撮影。
- 5.20 水路切り回し部分の造構剥削・撮影。SI97剥削開始。
- 5.23 水路切り回し部分の造構剥削・撮影。SI97剥削。貼り床上面にて焼上及び焼化物を確認。
- 5.26 西側調査区表土剥削・造構検出。上等器・須恵器出土。水路切り回し部分の造構剥削・掘削作成。
- 5.26 西側調査区の表土剥削終了。柱穴等を東側部分にて確認。全般的に5層は削平されており、黒色包含層は薄い。須恵器等出土。東側調査区水路切り回し部分の造構剥削作成・完成。市道調査区の全掘削写真撮影。南北でタワー全体写真撮影。終了後に5層の剥削を開始。ベルコン40台動入。
- 5.27 調査区水路切り回し部分の造構剥削作成・完成。
- 5.30 東側調査区のSD09検出状況の写真撮影の済捐。東側調査区水路切り回し部分の造構剥削作成・完成。
- 5.31 基本順序の意思統一。5層上面の造構検出の層を4層にして、包含層を2層とする。東側調査区水路切り回し部分の造構剥削作成・完成。4層上面造構完削、4層掘り下げ。5層上面の造構検出。ピット数基検出。老松岸雄島波郷土資料館長視察
6. 1 市道調査区の最終確認層の造構完削・写真。造構・造物量は少置。水路切り回し部分の5層上層造構検出終了、造構調査。終了後に5層の写真撮影後、剥削開始。東側調査区の2層剥削。須恵器・上等器の破片が多く出土。5層と2層の中間層の4層上面を基準に剥削。筋軸国道出張所にて工程・積土処理空室。

6. 2 市道調査区、タワー写真撮影（全般）。

東側調査区水路切り回し部の2層剥削・造構検出。素細小洞が複数基検出、切り合い関係の判別が困難。SD09を切る溝状造構の掘削。水路切り回し部の5層剥削。調査区内の雜草処理。

6. 3 東側調査区排水路東側の2層剥削及び4層造構造構検出。素細小洞の他、ピットを複数基検出。2層溝状造構剥削、TS平面偏移測量。水路切り回し部完削、壁面の基本層面標示。西側調査区の法面或形及び側溝剥削。

佐伯安一氏より岡場整備前の地形図及び水路古地図について意見を伺う。本調査区基本層序について取り決めを行なう。

6. 6 東側・西側調査区2層造構剥削・掘削、タワー写真撮影。TS細部測量。水路切り回し部の壁面作図作業。作図→水路切り回し部の調査終了。

6. 7 市道調査区TSによる造構平面細部測量。西側調査区の造構検出作業・撮影。

6. 8 西側調査区の2層上面造構の剥削。4・5層の造構検出。SD09剥削込後、断面作図。

6. 9 西側調査区の造構プラン切り合い部観測。2層上面検出造構剥削。各造構の土層断面摄影及び断面開作成。水路切り回し部の埋め戻し及び水路成形。水路敷設状況の写真管理を実施。

6. 10 東側調査区、西部分のSD09横断面の剥削。西側調査区の2層上面造構剥削・深掘。各造構の上層断面摄影及び断面開作成。水路成形及び防水シート敷設。水路切り替え作業終了。

6. 13 東側調査区の現況水路下部分の表土剥削開始。堅穴建物らしきものを確認。西側調査区の4・5層上層造構掘削、頸次検出写真撮影。西地区の2層造構光堀状況全般写真撮影を実施。



6.14 東側調査区全体の遺構検出写真撮影。西地区交差点部の現道切断及び埋削作業を開始。5層上換出面に旧市道跡及び付帯工事跡があり、複数層が広がる。遺構及び遺物は認められず。西側交差点部の掘削・成形。清澤課長視察。

6.15 東東・西側調査区溝状遺構の掘削開始。SD09最断面の写真撮影・図化。TSにて遺構復元図の平面実測開始。

6.16 東側調査区西4-5層の遺構削除・図化。SD09の床断面認定。豊穴建物SI166・167埋削開始。素掘小溝の掘削。

6.17 東側調査区遺構削除。豊穴建物・素掘小溝の埋削・写真・図化。豊穴建物にセクションを設け、トレンチで床面確認。TS平面図から柱穴並びの観察。白江秋吉課長・老松館長視察。排水管出作業開始。

6.18 東側調査区遺構削除。豊穴建物・素掘小溝の埋削及び写真撮影。西側調査区の層上遺構検出。排水土砂搬出作業。

6.20 西側調査区西端部分の遺構検出。中央農業排水路東脇の素掘小溝の切り合い部の半剖。SI166削削。覆土上断層から埴造器・土師器の他、甕を検出。

6.21 東側調査区、4層上の遺構削除・写真撮影・図化。SI166削削。掘込みにより床面をほぼ確認。直上面より土師器の破片を検出。出土遺物の回収のためTSにて回収点を範囲。SI167土層削除作成、遺物出土状況写真撮影。西側調査区・道路切断部の後土面積査及び旧市道跡復元層の除去、遺構検出。

6.22 東側調査区、中央部の豊穴建物跡の検出。素掘小溝の埋削を優先。SI166・167削削。SI167貼り床面まで完層。貼り床面検出部に地上的広がりを確認。

6.23 雨天中止。写真整理、遺構回収整理、工程計画協議。

6.24 東側調査区・素掘小溝の完層作業。旧水路から西側と東側で方向性が変化。SI167上層削除加後貼り床面を完層。SI166内の遺物出土状況作成、作業完了分につき適宜取り外し。床面削除により、5cm大の円盤が中央から東に延びる石列を確認。西側を南北に走る旧農業水路跡の底面と思われる砂礫及び微細鉄錆の削削除去。

6.27 東側調査区、SI166内遺物及び確認、データ作成編集。旧河岸付近の獨立建物の遺構検出。並びにもつ柱穴プランを1基を検出。SD09完層。

6.29 東側調査区、雨水の排水作業及び法面養生の直し。調査区南側斜面の砂礫剥離接地の表面法面補強。

6.30 雨天中止。東側調査区、夜中の豪雨で冠水。現場南壁捲



水溝が削除し裏場内に水が流入、再度壁面の復旧工事。

7. 2 雨天中止。排水作業。東側調査区SI166平面図作成ため、TS観測。西側に点在する隣及び柱部分の円錐群を観測完了。上層部から出土した土器に番号を付し、取り上げ。観測図の編集。

7. 5 東側調査区SI166・SD09の記録・掘削。SI166の完層写真撮影。遺構をTSにて細部観測。上下線の他、焼土範囲・貼り床範囲を観測して作図。遺構検出。

7. 6 東側調査区、SD09完層。SB01・02の検出状況写真撮影。素掘小溝及び周辺のピットの遺構プラン検出・記録・削削。小柱穴の完層、中央北側の豊穴建物の掘削。遺構削除図作成観測。

7. 7 東側調査区、雨天のため午前で作業終了。SD09の遺構削削。底部完層、豊面の複層部仕上げ。SD09西側5層上換出面積査。SB01・SB02削削。SI166柱穴の断面測量・写真撮影。

7. 8 東側調査区、SD09の完層。底部は複層部酸化鉄斑層を仕上げ、豊面の黒色土埋削。中央部北側の遺構新面写真、豊穴建物の調査。SI166の完層写真撮影。SB01西側柱穴の半剖。

7. 9 東側調査区、SD09の削削。SB01西側柱行柱穴の半剖・実測。SI166床面削削、南東角床面覆土内より土師器の破片4点、倒立している被熱融1点検出。TS観測。

7.11 東側調査区、豊穴建物完層。中央部へ東側の北側にかかるSP完層・写真撮影。フィールド型デジタルにてSD09のデジタル実測データを実施。データ終了後SD09はぼ完層。西側調査区東側4層遺構検出面を中心に遺構検出積査開始。東側調査区にみられた南北溝・東西溝の他に北東-南西溝を数次検出。

7.12 雨天中止。排水作業。

7.13 東側調査区中央部、かまどの検出付近の遺構検出。遺構の輪郭が不明瞭。SI166にセクションベルトを設け、貼り床面の掘込みを実施し上層面記録及び遺構撮影。下部から遺構が出土しているが、豊穴建物に関連するか不明。SB01西側柱行柱穴の記録。西側調査区東端部の遺構検出→浅掘。

第3章 調査の方法と成果

7.15 東側調査区中央部の堅土建物検出。SD09に付随するSD430完掘。SD09清掃。素掘小溝検出・削削。SI166貼り床面下に圓溝及び柱穴プランを検出・記録。西側調査区4・5層検出面の精査、造構プラン化。

7.16 東側調査区、SI166貼り床面下換山の圓溝状溝掘削・造構断面図作成。SB01柱穴半削、記録、削削。出土遺物採取のためTS観測。西側調査区4・5層検出面の精査、造構プランの検出。中央北側矢板前に中世土器が集中的に出土する範囲を検出、若干の土を確認。検出遺構概略図作成のため、TS測量。

7.19 東側調査区、SD09光面写真撮影。周辺の清掃作業→ベルコンの撤去。SI166柱穴調査、SB01・02柱穴調査。西側調査区中央堅2層の削削。既庭・作図した造構概略図校正。

7.20 東側調査区、TSによるSI166・SB01・02の平面構面観測を実施、作図。半削面に検出された柱穴と思われるプランについて観測し断面を作図。西側調査区、2層削削。

7.21 東側調査区、SI166・SBの部分写真撮影。方形4間に柱穴が確認できたものの、他の柱穴が見られるため、再度調査。西側調査区、4層上の造構削削・土層注記。造構の深さは東側が深く、西側が浅くなる。2層削削。

7.22 東側調査区、SI166完掘。TSによるSI166の観測、作図。西側調査区、素掘小溝の掘削開始。西側の2層削削。

7.25 東側調査区、SI166と周辺造構の完掘。ほぼ、東側の4・5層の造構は終了。西・北側の造構削削をおこなった後、基本層の開面作成を行なう。西側調査区、南東部に造構が集中。造構削削・調査。羽波市教育センター教員視察。市文化財審議会観察。

7.28 東側調査区、SI166床面下に検出されたピットの半削剥削後、TS観測、測量資料削面作成。西側調査区、新規に検出された造構についてTS観測、平面直角図作成。SX600遺物集中地をTS観測、プロット図作成。造構削削。

7.29 東側調査区、空中写真測量準備として調査区内清掃。西側調査区、造構削削・写真撮影。(財)文化振興財團の見学、猛暑のため作業員の志気低下。

8. 1 東側・西側調査区、空撮のため清掃。西側調査区、柱穴、造構の図化・写真・完掘。SI600の確認。

8. 2 西側調査区、空撮のため清掃。SI600の検出、サブトレンチを入れたが、西部分は土が広がる。付近



には遺物が集中、覆土が固くしまる。東側調査区、かまと付近の完掘、残土処理。

現地説明会準備の協議。上市町教育委員会、三浦知徳氏来館。

8. 3 空撮のため清掃。SI600の輪郭を出し、遺物の出土状況写真・図化・取り上げ。打製石斧2点(021、022)観測。

8. 4 4層面を中心にして造構面清掃を実行。12:10実験ヘリ撮影開始、12:30終了。現地記者発表。ケーブルテレビTST撮影。TSにて、SI166観測及び作図。現況用資材搬入。

8. 5 東側調査区に見学用の足場設置。

8. 6 現地説明会(1回目)110名参加。午後片付け。

8. 8 西側調査区、ベルトコンベアー設置、5層削削開始。純文土器・土師器・石斧出土。SI600造構削削を再開。祖泉・久泉地区子ども会25名見学。

8. 9 西側調査区、5層削削。純文土器片・打製石斧3点(023～025)出土。SI600削削。東側調査区、清掃。西側調査区、南北

東大寺領莊園の集落か



添付・久泉遺跡

掘っ立て柱建物など

平成後半 あす現地で説明会

この記事は、2018年8月5日付けの北日本新聞社記事をもとに作成されています。北日本新聞社は、北海道から東北地方まで幅広い地域をカバーする総合報道機関です。この記事では、東大寺領莊園の集落かについての説明会が開催されることが予想されることが述べられています。

東部の焼土群の遺構調査開始。焼上自体は單体で他の遺構に作っていない模様。

8.10 東側調査区、清掃。西側調査区、西部の5層削削。埴輪上器片・打製石斧10件(026~035)出土。SI600削削。範囲の広がりが確認できたため、さらに拡張する。遺物取り上げ。砺波コミュニティ放送「ふるさと砺波の文化財」収録。

8.11 東側調査区、油削。見学用足場の解体。SI166削削、タワー写真撮影。西側調査区、5層削削。

8.17 西側調査区、5層削削、内端の5層上面の遺構洗削。内側調査区SI600の削削。東側調査区、豊穴建物の確認のため、サブトレンチを設置し削削開始。

金田章裕教授、老松謙士資料館館長、佐伯安一氏が来訪。

8.19 西側調査区SI600草写真撮影。西端の6層上面遺構の洗削が終了、追削概略図作成。東側調査区、豊穴建物のサブトレンチ削削、遺構の範囲確認。東側調査区西端の5層の削削開始。

博物館実習生2名(古田、島田)体験発掘。

8.20 西側調査区、SI600充填→写真撮影。東側調査区、豊穴建物のサブトレンチ削削。SD09の埋葬の断面状況を知るために、東西にトレンチを設定し削削。東側調査区内端の5層削削。

8.22 東側調査区西端の4層削削。西側壁面より5m地点まで5層面の検出はほぼ完了。一部4層の残存する不定形プランを検出。中央焼土検出サブトレンチ拡張調査及び豊穴建物検出。

8.24 西側調査区西端の遺構確認と清掃。SI600削削・写真撮影・図化。内側調査区5層上遺構検出。4層削削終了。豊穴建物のサブトレンチ削削。遺構の鉢形瓦土層の確認。SD09西部分の確認の焼土などを確認のため、2箇所トレンチ削削。東側調査区、西端の4層削削。打製石斧5点を撮影・TS級剥落後取り上げ。

8.25 西側調査区南の5層削削。上面の遺構検出、写真撮影。SI600の削削、光撮写真・図化。東側調査区西端から5層上面の遺構の洗削開始。遺構は柱穴が少ない。東側調査区の豊穴建物のサブトレンチ削削を行い豊穴4~5基が確認できた。SD09南部のトレンチの削削、断面図化。

8.26 西側調査区、5層削削。遺構は柱穴を主に多数。西側調査区5層上面の遺構確認。東側調査区4層削削。SD09砂群の写真撮影と豊穴建物の検出写真撮影。午後雨天中止、写真整理。

8.29 西側調査区、5層削削。打製石斧・磨製石斧出土。遺構は柱穴を主に多数。SI600充填写真・図化作業終了。西側調査区の南東形分崩上付近の遺構検出。東側調査区のSI遺構調査を本格

的に開始。トレンチ設定後、土壌サンプルを採取しながら削削。

8.30 東側調査区、豊穴建物の削削。南側水路付近からは遺物が多く出土。土壌サンプル採取。西側調査区、5層削削。5层上面遺構検出、写真撮影。

8.31 東側調査区、豊穴建物の削削、須恵器・土師器などの遺物出土。西側調査区内端の焼土範囲のサブトレンチ調査。西側調査区の5層削削・候山作業。5層削削終了。

9. 1 東側調査区、豊穴建物の削削。仮水路付近の豊穴建物の削削、土師器・須恵器・磨製石斧出土。深度は30cm近く、かまとど確定される焼土が北部分に見られる。西側調査区、焼土検出付近の遺構確認のため、5層を残す削削。西側調査区、5層削削終了部分から、遺構確認、出土品の位置関係の確認のため、清掃。

9. 2 東側調査区、豊穴建物の削削。遺物の図化・写真撮影。西側調査区、焼土周辺の遺構調査。焼土4辺の遺構プランが不明なので、5層を少し下つづけ追削確認を行う。焼土の輪郭を記録して、今後調査する。西側調査区、5層削削・遺構洗削。

パリノ・サヴェイイ干賀氏、古環境分析サンプル提出実施。SD09北側セクションベルト部、SKの2カ所。

9. 5 土器洗浄。酒井英男教授(富山大学)来訪。古地磁気調査の概要説明及び当現場での実施計画打ち合わせ。

9. 6 現場の台風14号対策。

9. 7 遺構現場の見回り。台風14号接近のため発進中止。

9. 8 東側調査区、豊穴建物調査。追削削削、西側調査区、焼土群周辺の埋り下げ。5層削削・遺構検出・写真撮影。遺構確認の洗削。標示作業。土器洗浄。

9. 9 西側調査区の遺構検出。通構の確認作業後に範囲を設定し、浅削、微削。4回候山面上に検出された炭化材集中範囲については、各追削削削・記録作業終了後、表面にて状態確認。東側調査区の豊穴建物の遺構検出と写真撮影・測量。

9.12 東側調査区の豊穴建物の測量・図化。

金田章裕教授(京都大学)来訪。

9.13 東側調査区、SI49Zかまと周辺の検出開始、焼土頂の範囲はほぼ確定。平面プランは、東、北は確定、南側が不明。サブトレを1つ追加。西側調査区、6層上面遺構検出ほぼ完了。

9.14 東側調査区、豊穴建物の断面実測と清掃。西側調査区の遺構洗削作業開始。午後雨天中止。写真整理・図面整理。

9.15 東側調査区、豊穴建物調査・削削・写真撮影。西側調査区、追削半瓶作業。片桐小学校生徒代表見学。

第3章 調査の方法と成果

- 9.16 見学会準備。遺物の展示、見学コースの設定。東側調査区の豊穴建物跡、西側調査区の遺構掘削。
- 庄南小学校「庄南なかよしウォーク」250名見学。
- 9.20 西側調査区、5層掘削、遺構剥削。東側調整面に検出されたり段遺構跡・5基の掘削・発見を実施。東側調査区、豊穴建物の遺構剥削と清掃。東側調査区、遺構剥削。
- 9.21 西側調査区の西南部分の填土を伴う遺構検出および遺構周辺の5層掘削。東側調査区、豊穴建物の清掃→タワー写真撮影→あぜの掘削。サンプル採取。東側調査区、5層掘削。
- 9.22 東側調査区、豊穴建物の遺物出土状況の図面作成、壁の掘削→ほぼ床面まで掘削終了。11:00よりSI491タワー写真撮影。東側調査区、5層掘削。打設石斧・磨製石斧出土。(3点64~66の観測取り上げ) 西側調査区、焼土集中のSII完掘、周辺の5層掘削→西側調査区の5層掘削ほぼ終了。
- 9.26 見学会の打ち合わせ。東側調査区、豊穴建物の遺物取り上げ、遺物出土状況の測量。東側調査区、5層掘削。見学会準備。
- 9.27 午前、出町中学校遠足75名見学。
- 午後、東側調査区、豊穴建物の柱内の遺物測量・張り床・かまど周辺の清掃。東側調査区、西部分の5層掘削。打設石斧数点出土。西側調査区、東南部分の5層掘削、遺構検出。
- 9.28 東側調査区、豊穴建物の写真撮影のため、遺構剥削、タワー写真撮影。岡化等。東側調査区、西部分の5層掘削及び遺構検出。西側調査区の燒土遺構完掘、測量。周辺の調査終了。
砺波市教育委員会要覧。
- 9.29 東側調査区、豊穴建物の遺物取り上げ・床面剥離。柱穴の半成、写真撮影。東側調査区、西部分の遺構検出と残闇。西側調査区、焼土遺構付近の遺構確認、5層掘削。
- 9.30 東側調査区、豊穴建物の古地磁気のサンプル採取。柱の掘削・遺物取り上げ。東側調査区、内部の遺構検出・浅掘。中央部分の5層掘削。5層掘削6層面の遺構概略観測及び遺構回作成。富山大学理学部が古地磁気のサンプル採取。
- 10.3 東側調査区、豊穴建物の床面剥離、遺物の取り上げ、柱の掘削。SI494博士開セッション執込み及びP1掘込み作業。出土遺物状況撮影。遺物取り上げ地点観測記録及び遺構詳細回観測作図。西側調査区、礫出土状況のラジヘリ空撮に備え、清掃。
- 10.5 東側調査区、豊穴建物のかまでの測量を中心に岡化、削削。遺物取り上げ。削削。空撮の測量杭の設置。
- 10.6 正午に西側調査区ラジヘリによる空中撮影。西側調査区、全体の清掃、ベルコンの搬上等。空撮後、中央部の排水路にタワーを設置し、全体の写真撮影。東側調査区、豊穴建物の遺物取り上げ、測量。東側調査区、SD09西の2層掘削。西側調査区ラジヘリによる空撮。
- 10.7 東側調査区、豊穴建物床面上の遺物の取り上げ・測量、かまどの写真撮影。東側調査区、2・5層の掘削。遺構は柱穴が検出され、打設石斧も数点出土。
- 10.11 東側調査区、豊穴建物内柱穴等の遺構掘削開始。東側調査区、SD09西部を廻し、2・5層の掘削。石斧打設が数点出土。西側調査区、5層疊の出土状況の岡化、番号をつけて保管する様の調査。全体的には自然発生であるが、割れているものもあることから、数点番号をつけて保管。
- 10.12 西側調査区、5層中腰の取り外し。分割・新片等が見られる繩は投影、位置の測量。東側調査区、豊穴建物のかまでの遺物の測量、取り上げ等。豊穴建物内の柱穴の岡化、写真撮影。東側調査区、SD09内の5層を、肩部を残して掘削。
- 10.13 東側調査区、古地磁気サンプル採取準備。豊穴建物のかまでの機土の古地磁気サンプル採取のため、酒井教授来訪。かまどの焼上を4.3箇所採取。東側調査区、SD09西の5層掘削。西側調査区、繩の取り外し終了。繩の撤去と土柱の清掃。
- 10.14 東側調査区、豊穴建物のかまでの掘削。東側調査区、S D09西部分の5層掘削。挖孔、縫隙が5層中に多くあり、遺構もさほどない。西側調査区、6層上面の遺構の半段。遺構は柱穴が来て、規則性は見られない。東側調査区、豊穴建物のかまでの遺物出土状況写真、測量。遺構全体の写真撮影、清掃。東側調査区、S D09内の北部分の遺構検出。西側調査区、遺構の半段。断面の写真撮影開始。
- 10.18 西側調査区の基本羅序記録のため、床面清掃、岡化作業。西側調査区、遺構半段、写真撮影。東側調査区、豊穴建物のかまでの掘削。床面清掃、写真撮影。東側調査区、SD09西側北部分の遺構検出。5層中に縫隙が多く含まれており、遺構はほとんど見られない。(株)アーステクト、地下レーダー探査デモ。バリノ社、土壌サンプル採取。
- 10.19 西側調査区、遺構半段、写真撮影、岡化。壁面の基本羅序の岡化。東側調査区、豊穴建物完掘写真の撮影が終了。床面掘削。かまどの遺物の取り上げ。東側調査区、SD09西側北部分の遺構検出。富山県埋文センター山本正敏氏来訪。
- 10.20 東側調査区、豊穴建物の張り床の掘削、遺物取り上げ。

- 造構内から検出された柱穴 (SB04) の半裁→固化。東側調査区、
5層掘削。西側調査区、造構半裁、写真撮影、固化。西側から中央部分にかけて、柱穴の密度が高い。基本層序の固化。
- 10.21 東側調査区、堅穴建物の張り床の掘削。SBの造構周辺の清掃。東側調査区、SD09東側の5層掘削を本格的に開始。西側調査区、造構半裁、写真撮影、固化。基本層序の固化作業。石川県豊能文センター横山氏来場、団交古賀地監督員来訪。
- 10.24 東側調査区、堅穴建物張り床の掘削。SB04の掘削、固化、写真撮影。東側調査区、SD09東側部分の5層掘削。造構なし。西側調査区、造構半裁、写真撮影、固化。西地区全体の8割の半裁作業を終了。基本層序の固化。
- 10.25 東側調査区、堅穴建物の張り床の跡の固化。SD09東部分の5層掘削。西側調査区、造構半裁作業、写真撮影、固化。半裁作業はほぼ終了。
- 富山国際職業学院・上野幸夫教授が建物造構を中心に視察。
- 10.26 西側調査区は、SPの断面開拓化、十箇注記、調査終了、完掘作業。東側調査区、堅穴建物の張り床の固化終了→完掘作業。SI166・SD01写真撮影。東側調査区、SD09の東部分の5層掘削。SB04の造構詳細断面調査及び確認作業。
- 10.27 東側調査区、堅穴建物張り床除去の光触写真撮影。SD09東部分の5層掘削。SI491・492西側からクター写真撮影実施。SI494・492末下造構詳細断面調査。西側調査区、東部分の写真撮影。北側の壁面の基本層序を調査するため、壁面の清掃。ペリノ・サーゲイユイ葉氏、土壤採取。
- 10.28 東側調査区、堅穴建物張り床除去の写真撮影。SD09東側の5層掘削。造構、遺物とともにあまり見られない。東側調査区、北側壁面の基本層序の固化。SI493北側からタワー写真撮影実施。西側調査区、完掘作業、造構断面写真撮影。
11. 1 東側調査区、堅穴建物内穴の調査。SD08西側の5層掘削、造構後山。SR02掘削開始。造構企画写真未撮影のため塗剤を中止し、ドーナツ剥に変更検討を行う。水路切り回し壁北に石礫化、打製石2点107~109を観測。SB04柱穴の上端浮遊範囲及び編集図作成。西側調査区、造構完削、写真撮影。
11. 2 東側調査区、SD04光触写真撮影。東側調査区、SD09西の2層掘削・造構後山。西側調査区、造構完削、清掃、写真撮影。
11. 3 東側調査区、全体活潑。SD09西の5層掘削、造構後山。西側調査区、清掃、写真撮影。現地説明会の打ち合わせ、整理作業。
11. 4 東側調査区、全体清掃。午後タワー写真撮影。SD09調査の5層を残していた部分の掘削、造構検出。内側調査区、造構完掘、清掃、断面写真撮影。現地説明会準備。
11. 5 現地説明会準備。
11. 6 現地説明会（2回目）76名参加
11. 7 東側調査区、堅穴建物の平面図化の確認・修正。SD09の5層掘削・造構検出。SB04柱穴の造構詳細断面調査及び編集図作成。西側調査区、造構完掘、光触、清掃。
11. 8 空掘準備。SI491貼り床と先削面の造構詳細断面調査及び編集図作成。打製石削除110~118の位置報刻及び取り上げ。
11. 9 空掘のため、全体清掃。東側調査区のベルコンをユニットで移動し、壁面のブルーシートの撤去。撮影コース対空掘設置及び測量。砺波コミュニティ放送「ふるさと砺波の文化財」収録。
- 11.10 11:00~13:00、ラジオヒリ空掘。西側調査区の造構完掘の固化作業を先行して行うため、対空標を設置。空掘終了後、タワー全体写真撮影。
- 11.11 空掘の写真撮影結果が後日判明するため、水路調査区の表土剥削と造構後山、東側調査区の壁土状況の写真撮影。東側調査区の様の調査、測量対象の確認。地権者了解を得取に付き、水路調査区の掘削を開始。耕作及び園場整備便坐土を人力掘削し、2箇所で確認するが、キャビラ跡が見られ複数の痕跡が認められる。造構・遺物が確認できなかったので5羽上面まで掘削。5箇所にて2基の造構プランを確認。検出状況写真撮影。
- 11.14 東側調査区の様の除去作業、堅穴建物付近の5層掘削開始。水路調査区の清掃、5層掘削。
- 11.15 南大巾山。現場内の排水作業。
- 11.16 東側調査区のSD09付近の写真撮影のため、清掃。水路調査区、削削作業はほぼ終了、測量・固化。
- 11.17 東側調査区、SD09付近の出土状況の清掃。撮影終了後に付近の壁の張去、5層掘削。東側調査区、造構完削の写真撮影。中央堅穴建物部に拡がる疊化鉄層の分布状況観測及び作風。水路調査区は造構の上層断面固化後に平面測量、5層掘削。
- 11.18 東側調査区、壁の除去、造構検出。西側調査区、造構清掃、写真撮影。水路調査区は5層削除終了、上層断面固化。
- 11.20 東側調査区、5層削除終了、造構検出と浅削。
- 11.21 東側調査区、造構確認のための抜掘と、頭次造構半裁、写真撮影、固化。ほぼ半数近い造構の剥落終了。
- 11.23 東側調査区、造構削削、写真。造構調査終了。
- 11.24 西側調査区、空掘のため清掃。完削写真の撮影。

第3章 調査の方法と成果

11.25 西側調査区、全体の清掃作業、残った塗面写真撮影。
完結写真はほぼ終了。SD09土壌サンプル採取。

11.26 東側調査区、空挺のため清掃。

11.28 明日空港に向か、ブルーシートの撤去、土嚢袋の移動。
ベルコン移動、タワー設置。

11.30 調査区内排水作業、対空柵設置。正午前、実施空襲。

12. 1 調査区基本層序の写真撮影のため、壁面清掃、固化。
風削木板の塗装剤、中央部の排水路のSB03の確認剤。西地区東壁面内SB03上面検出のため壁面掘込みを開始、プラン検出
段階完了。



12. 6 現場物品の片付け。堅穴建物の土壌サンプルの土量数量と整理作業を数人の作業員で実施。

12. 7 東側調査区東端の塗装剤、5箇所は塗装終了。風削木板の剝離。SB03の確認剤、範囲が広いことが判明。SD09右岸側調査区東端部に盛り土材流出防止のため掘削していた5箇所跡の撤去。SH49南隅の剝離及び記録。新曲線作成後、TSにて平面細部測量。



12. 8 SB03の断面固化、剝離。個別に写真撮影→光沢。風削がひどくテントを張る。現場のベルコン、資材の撤去作業。

整理作業日程の打ち合わせ。

12. 9 假設テントを設置し、柱穴の造構調査。復縫の大きい柱穴で、素掘小溝も確認できた。

12.12 最後の風削木板剝離を行い作業を終了。SB03のかまどの造構剥離、測量。付近を少し拡張して測量。SI1220換土跡開を式張調査、支柱と思われる鋼管と複数の土器破片を検出。換土はカマド跡と考えられ、堅穴跡跡跡と判断されるが、農業排水路の影響により全景及び軸方向は不明。堅穴建物の土壌サンプルの土嚢袋約4000袋を、函南市埋立センターへ搬送。現場道具の撤収。



12.13 降雪中止。堅穴建物の土壌サンプルの土嚢袋約4000袋を、函南市埋立センターへ搬送。

12.14 現場作業が完全終了。作業員に対する挨拶を函南市教育委員会と、株式会社上習から行う。管理工程の測量を現場で行う。現地調査完了。



3 基本層序の解説

平成15年度調査区（4,200m²、東西延長150m）の東に隣接して今年度調査区が位置している。

平成14年度には本事業対象地全域の試掘調査を実施しており、断片的なトレンド調査ではあるが、ある程度は地形状況・堆積層序を推定することが可能である。本節では、これまで3カ年の本調査範囲の基本層序の連続性や、地形・堆積状況の相違を把握することを目的とし、試掘調査の基本層序を手がかりとして把握に努めたい。

鍵層 調査区は、河成堆積扇状地である庄川扇状地上の扇央部に位置しており、扇状地形に特有の堆積状況がみられる。この堆積状況を読み解く鍵層として、3カ年の調査対象地内において、普遍的に存在する5層（黒色有機質層・黒ボク土）・6層（地山シルト層）・7層 黒ボク土（地山砂礫層）がある。これら層位を鍵層と位置付け、平成15・16年度調査区において同名の番号を付与している。よって16年度調査区の基本層序は、地表に近い位置から順に層位番号を付さず、鍵層である5・6・7層以外は現地調査段階で認識した順序で層位番号を付した。5層は黒色有機質層であり、縄文期の遺物包含層でもある。6層・7層は地山であり、6層は褐 遺物包含層色シルト層、7層は砂礫層である。地表に近いところから5層→6層→7層の順で堆積している。

地山の変化 地山と認定した層位は、基本的に2層ある。地山シルト層である6層は、褐色～地山シルト黄褐色～明黄褐色を呈し、黒色の5層とは色調が明らかに異なる。15・16年度、試掘調査においてほぼ全域で存在していたが、所々で7層から漸移的に5層が堆積しており、間層の6層が堆積していない箇所があった。これは、地山砂礫層である7層の堆積状況を反映したものあり、埋 地山砂礫層没微地形の影響を受けたものと判断できる。庄川扇状地は河成堆積扇状地に分類され、その形成過程では、高水時ごとの疊の堆積、扇頂溝の形成、自然堤防の形成とその破堤、河川の転流、新しい流路ぞいの砂礫の堆積および自然堤防の形成、というサイクルが幾度となく繰り返されるという。疊層（7層）は河成堆積扇状地を形成する主要な構成物であり、扇状地疊層（fan 疊層）と呼ばれるものである。庄川扇状地上で砂礫採取工事を見受けことがあるが、観察すると表層堆積物が地表から1～1.5m程度の深度まで堆積しており、その下は7層のような扇状地疊層が累々と10数m下まで続く状況である。河川の形成營力によって掃流運搬された疊の堆積の結果、扇状地を構成する7層が形成された。この段階では、地表は起伏に富み、無数の自然堤防（natural levee）や後背湿地（back lowland）が形成され、それらを鍵うよう 自然堤防に河流（stream）の通る細長い溝状の凹所である大小の河道（channel）が走っていたことであつろう。現在では平坦な水田景観が広がる庄川扇状地もかなりの起伏があったと考えられる。その7層により形成された微起伏の凹部に、河道から溢れ出た越流（overflow）・溢流によつて細粒の泥や砂（6層）が堆積した結果、先述したように7→6→5層、7→5層と場所によって2種の堆積状況を生むことになったと理解したい。理解の一助として、試掘調査結果から埋没微地形の復元を試みている。久泉遺跡の所在地は、かつて旧中田川と旧千保川に挟まれた微高地だったところであり、圃場整備以前までは河岸段丘が良好に確認できる状態であった。埋没微地形は複雑に入り組むが良好に遺構・遺物が検出された範囲（H15～17調査区）は、周辺よりややレベルが高い微高地状の地形であり、南北に幾筋か小河道が走ることが判明した。いわ

小字「中島」は島状の中洲もしくは川中島といった印象である。この微高地の範囲には、「中島」という小字が残っていることも興味深い。

黒ボク土 黒色有機質層 5層は黒色シルト（黒ボク土）で、調査区全体にわたって遺物包含層化しており、上面で遺構を確認できたことから上層遺構面として扱っている。15年度調査区A-4区で厚く堆積している5層は上部層の影響をほとんど受けでおらず、いわゆる純粹に近い“黒ボク上”であった。黒ボク上とは、外山秀一氏によると大きく次の3つに区分されるという。

まず、(1)いわゆる黒ボク層とよばれるもので、自然堤防状や中州状の微高地からその縁辺部にかけて分布する。次に、(2)低湿地や湿地で生成される有機質層で埋没した旧河道底でみられ、ヨシ属の高出現に代表される。さらに、(3)埋没した微高地からその縁辺部で生成された黒土層で、これはaとbとに細分される。aは(1)の生成後に島地土壤化したもので、ウシクサ族とイネに代表され、旧河道底が水田として利用されている。

3種ある黒ボク土のうち、庄川流域で特徴的にみられるのは(1)と(3)aであるという。すなわち、微高地からその縁辺部に分布する黒ボクと埋没した微高地からその縁辺部に分布する黒ボクが土壤化したものである。地山層（6・7層）は周辺より高い微高地地形を示していることは先に触れたおりであり、5層の堆積もそうした地形状況に整合する。

“黒ボク土”という呼称からも想像できるように、手で触れるとフカフカで空気を多く含み、粘性はほどどなく、水の浸透率も高い。掘削・検出を伴う埋蔵文化財調査に適している土壤である。調査員・作業員にやさしい土質である。

6・7層から漸移的に5層が堆積しており、長い時間を経て堆積していったことを物語る。佐瀬隆氏と細野衛氏は、黒ボク土層の生成について必要な主要自然条件を「テフラ」「温暖湿润気候」「草原植生」とし、森林破壊などの「人為」の関わりを指摘している。「母材の緩慢な堆積と腐殖の集積」という過程で生成される黒ボク土が黒いのは、「テフラ」の風化により生じる「活性アルミニウム」の役割によるものであり、森林植生では発達しないという。5層は、外山氏が指摘したようにテフラに起因しないタイプの黒ボク土であるため、単純に比較できないが草原植生により生成されるという構造は同じではないか。調査区にはいくつもの巨大な風倒木痕を確認しているが、縄文期という時間軸を考慮した場合、森林と呼ぶほどの植生であったかは疑問である。外山氏のプラント・オバール分析により「微高地から後背湿地にかけての緩傾斜地にススキやチガヤなどのウシクサ類が繁茂する草原」であったことが証明されて

草原植生 いる。久泉遺跡では、「草原植生」が黒ボク土生成の主要条件であるということが可能である。

調査区（H15～17調査区）全体を通して、5層は縄文期の遺物包含層化している。遺物は、漸移層の上縁から出土し始め、5層中位から上部に集中する。縄文土器年代では、中期中葉（上山田・天神山式）から後期後葉（八日市新保式）にあたる。縄文期遺物包含層を証明すべく、5層の土壤サンプルによる放射性炭素年代測定（ β 線計数法＝液体シンチレーション法）を実施した。結果、15年度調査区で約2,100年～3,300年前、16年度調査区で約3,300年前（第4章第1節、p182）という年代値を示した。これは、出土遺物年代ともよく整合する。

また、調査区（H15・16）全体では一定した堆積状況ではなく微地形により堆積厚が大きく変化していたが、H16調査区では層厚30～50cmと安定している。

5層の上面・下面で遺構を確認したため、それぞれ第2遺構面、第3遺構面として扱っている。次節でも詳細に触れるが、各遺構面はあくまでも遺構を認識した面であり、各期の旧地表面としての認識はない。第2遺構面は、遺構深度が浅く、さらに上層からの掘り込みにより形成された可能性が高い。古代・中世の遺構を検出したが、それらの遺物包含層にある層位を確認できていない。基盤整備により削平されたことも考えられる。第3遺構面は、5層と6層の層界にあたり漸移的変化を示しているので生活面とは考えにくい。5層中に旧地表面が存在するものと考えられる。

洪水堆積層 調査区内全域で検出したわけではないが、スポット的に洪水堆積層と思われる層位が見受けられる。II15調査区東端A-4区で確認した旧河道はもちろんのこと、5層-2層の間に厚く堆積する1層がそれにあたる。褐色～黒褐色、試掘調査ではにぶい黄褐色を呈し、粒子の細かなシルト層である。5層との層界は平坦な面であり、急激な堆積環境の変化を読み取ることができる。河道からの越流・溢流による運搬物と考えられ、周囲より高い微高地にもかかわらず洪水を受けていたことを物語る。所々、ラミナ状堆積が観察できる箇所があったが基本的には4層を細分することはできず、短期間のうちに堆積したと考えられる。調査区南側は地山が緩やかに傾斜しており、地形的に低いところでは1層が70cm近く堆積している。反対に地山レベルが高い箇所では、層厚は薄い。これは、低いところに厚く堆積する洪水堆積層の特性をよく示すものと考えられる。4層の洪水層が堆積した後、再び黒色有機質層(2層)が堆積する。地形の安定性を取り戻し腐植・集積を繰り返し黒色土が堆積したもので、5層形成時と堆積環境はさほど変化がみられないようである。この黒色土は、II16・17調査区においてのみ見られるもので、H15調査区にはない。間にある旧河道により地形的な変化から堆積しなかったとも考えられるが、本来存在したものが基盤整備で削平された可能性が高い。SD2120の断面では、4層を掘り込んで形成され、2層により埋まったのちに再び2層上層から掘り込む状況が確認できる。調査区全体を通して、2層から表七層までの層位が少ない。表土は水田耕上であり、その直下は基盤整備の盛土である。表土下各層の層厚も薄く、表土に古代・中世遺物を含むことから、かつて存在した層位が何らかの要因で削平された可能性もある。
(野原)

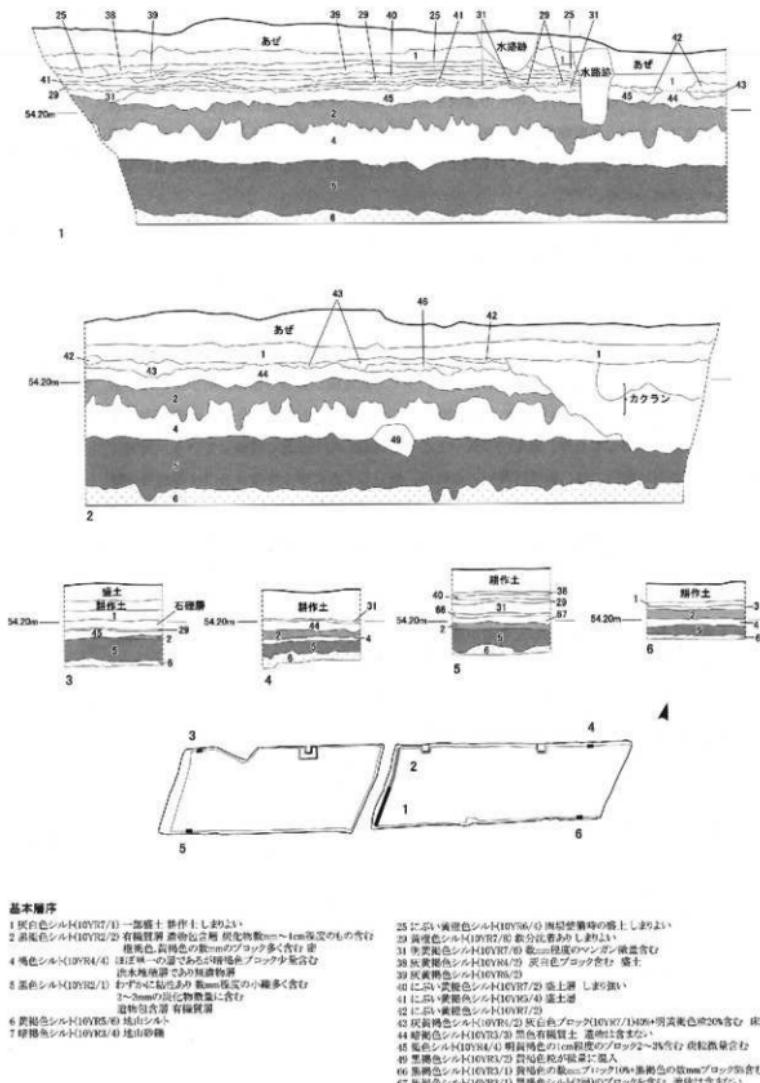


図25 久樂遺跡 基本層序 (S=1:100 垂直方向S=1:50)

4 第1遺構面 (中世・近世期)

概要 第1遺構面は、2層上面において確認した。試掘調査で確認できず、表土から5層上面まで掘り下している中で、溝遺構らしき縁郭を見つけたので掘削を止め、精査した。溝遺構とところ面に広がりが認められたので遺構面として扱うこととした。

遺構の配置 基本的に溝遺構が土体を占めるが、調査区西側にやや規模の大きな土坑が2基（SK158、SK165）あった。土坑は遺物が検出されず土相も他の遺構と異なることから、近代の可能性が高い。溝遺構は調査区東側、西側で数点確認した。東側の溝は、SD147-148とSD149-152の2条が交差している。それぞれ単独で存在した可能性もあるが、切り合い関係が確認できなかったので近い時期に埋没したことも考えられる。西側の溝は、SD158とSD161が平行するように北西方向に走り、SD158と交差する位置にSD157があるが擾乱により新旧は不明である。

いくつか走行する溝の中で、近代絵図と重なるものがある。北西方向に走るSD150～152とSD158は、明治10年の『石川縣下第五大區小四區越中國磯波郡久坂村用水見取繪圖』¹⁾に「今久坂村用水」とあるものと位置的にほぼ整合する。近世用水史の規模や形状を知る上で検討すべき資料である。

第1遺構面の遺構内からは古代、中世、近世の遺物が出上するが、第2遺構面の年代と絵図等の関係から、遺構の帰属年代は中世もしくは近世と考えられる。中世後期から漸移的に展開したと考えられる砺波平野特有の散村形態は近世期に入り、発達した。遺構面から溝、土坑以外の遺構が全くないことは少なくとも奈良・平安期以降、調査区が居住空間として土地の利用がなされなかったことを示し、散村という集落形態の形成過程を考える上で示唆的である。

溝（SD55.145-149, 151, 152, 156-158, 161, 162, 168）（図26・27・28・29 図版5・43・44）

概要 位置関係は上記のとおりである。SD151・152は埋没後のSD09を切って造成されたが、南東方向に地形的に高くなるので途中で消えている。地形的に南が高く北が低い扇状地地形なので、流路方向は自ずと明らかである。遺物は古代が主体だが、古代包含層である2層を掘り込み造成されているため混入したと考えられる。SD146・147・149は堅穴建物が集中する場所の上層に位置するので、遺構内覆土からの混入品かもしれない。

遺物 古代、中世、近世期の遺物がある。須恵器は杯、杯蓋、壺、壺蓋がある。1～3は須恵器杯である。4は杯蓋で、口縁端部を小さく折り返す。5は上蓋である。6は小型有台杯で高台が内端接地となる。7は珠洲の蓋部である。8は須恵器の短颈壺に伴う蓋と考えられる。外側が削ぎし、口縁端部を三角形に折り返している。9は須恵器壺の体部である。10は珠洲の壺鉢である。内面に使用のため摩耗した刮し月が残る。底部のみ遺存のため詳細年代は不明である。11は越中瀬戸の皿で、内外面に鉄錆の漬け掛け、削り出し高台である。12は鉄津である。須恵器はIV・V期に相当し、8世紀後半から9世紀前半の年代を与える。中世・近世においては遺物が細片のため、詳細年代は与えられない。

1) 佐伯安一氏のご教示により図面を検討した結果、近世溝であることが判明したものである。

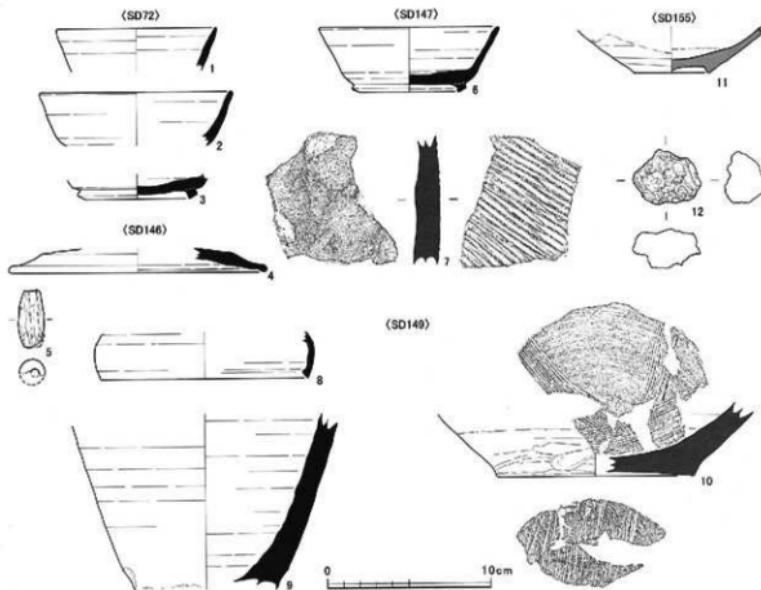
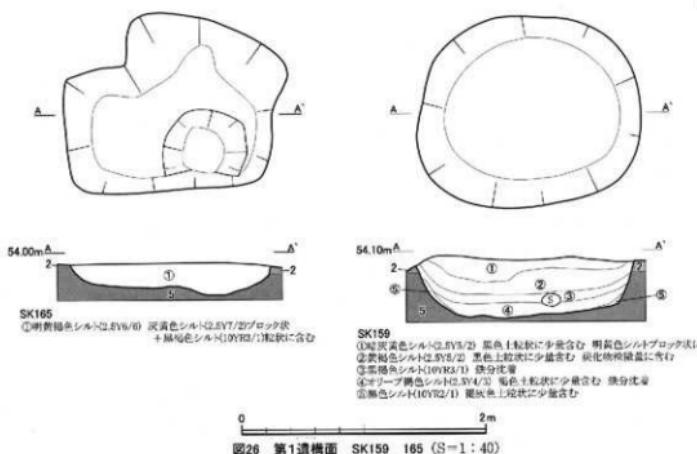


図27 第1遺構面出土遺物実測図 (S=1:3)

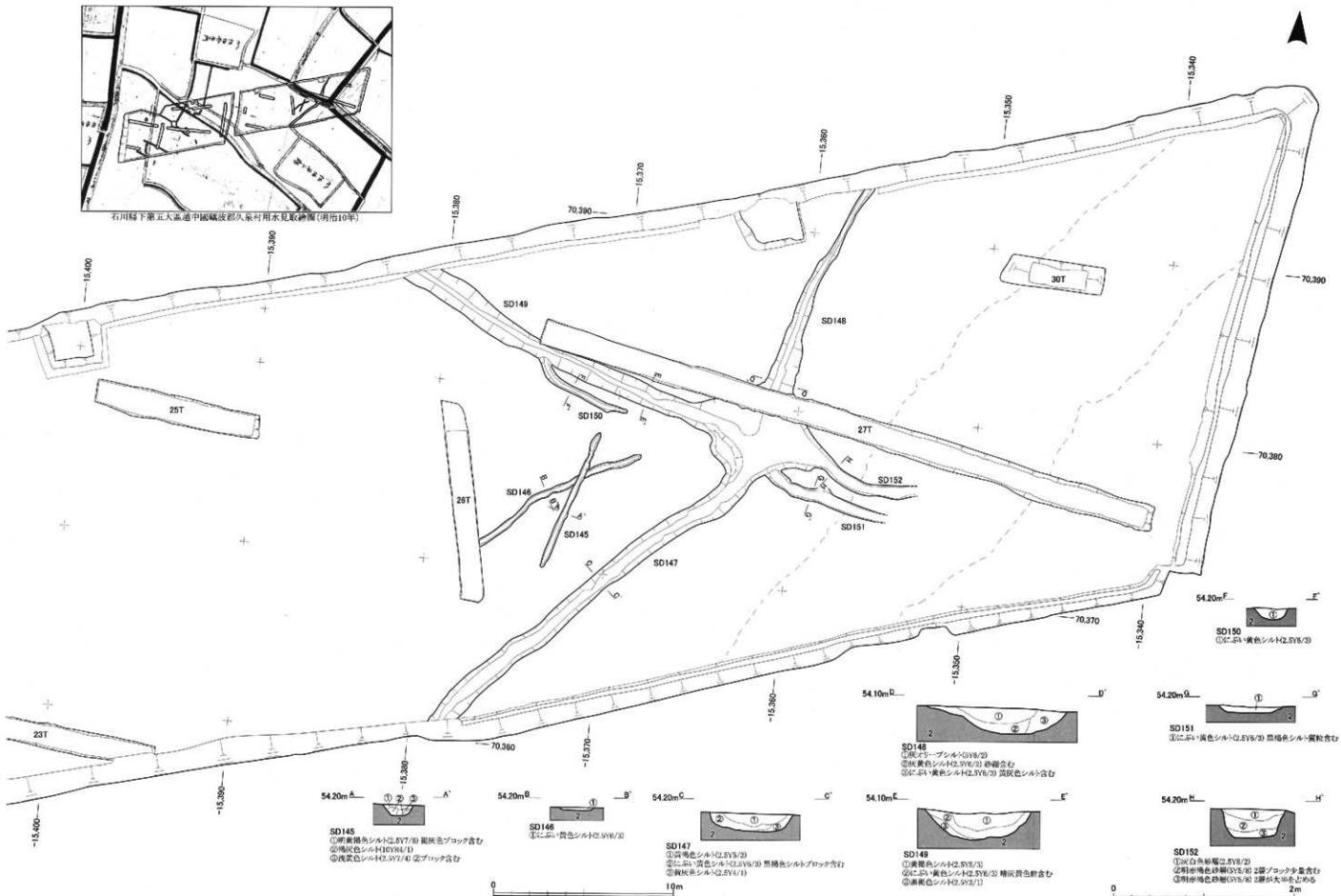


図28 第1橋横面東側調査SD (平面図S=1:200 断面図S=1:40)

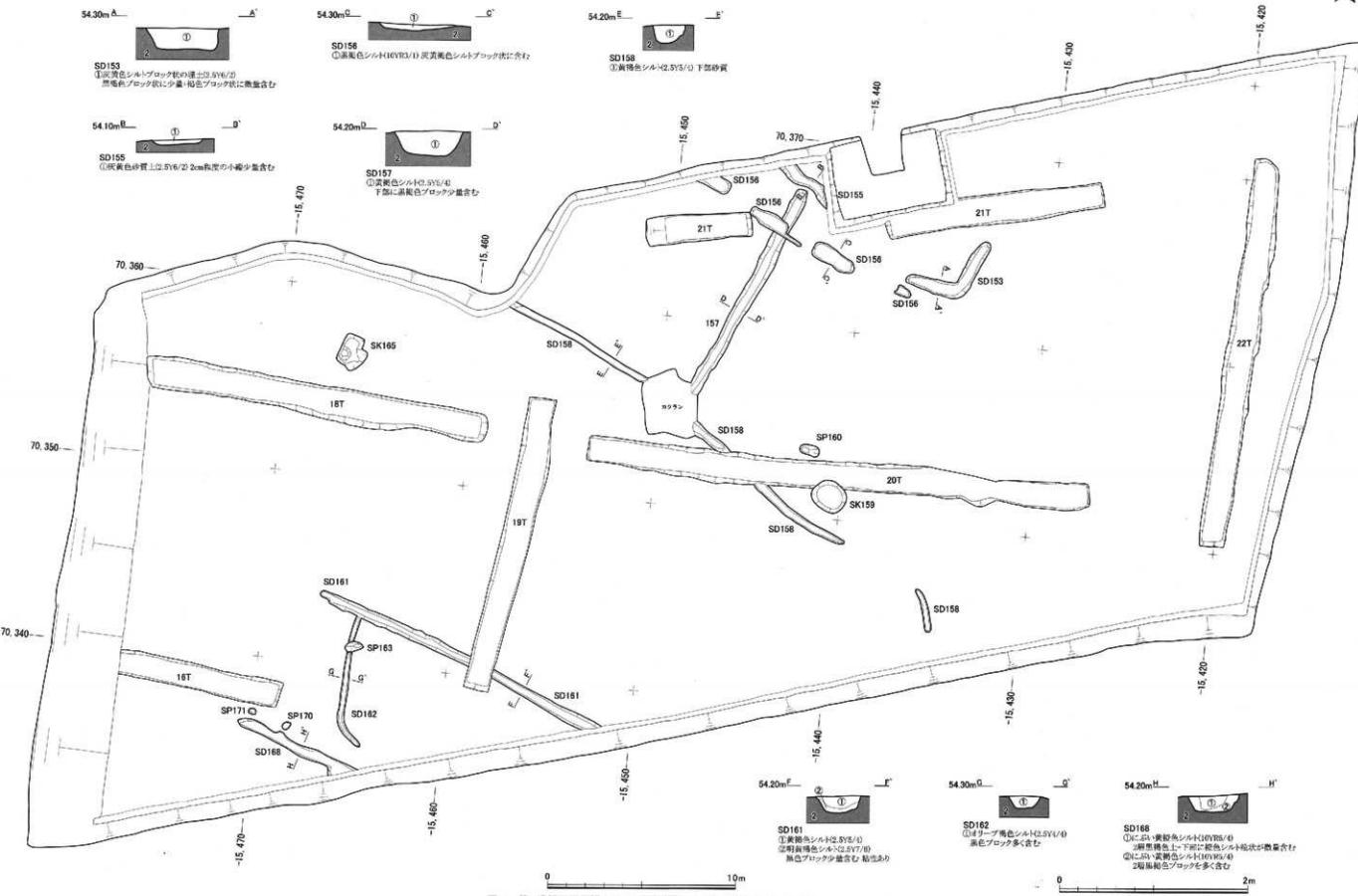


図29 第1進横面西側調査区SD (平面図S=1:200 断面図S=1:40)

5 第2遺構面 (奈良・平安期)

概要 第2遺構面は、古代遺物包含層である2層下面・4層上面および5層上面で確認している。4層は洪水起源の砂質シルト層であるため、地形的に低い部分（調査区中央付近）にしか堆積しておらず、大半の遺構を5層上面で検出している。もっとも遺構内容が充実しており、掘立柱建物、堅穴建物、大溝、溝、土坑、ピットを検出している。中世期の遺物が多少散見されるが、帰属時期は概ね奈良時代後半から平安時代初頭（8世紀後半～9世紀前半）と捉えたい。

遺構の配置 東側調査区に北東方向に流れる大溝SD09が本遺跡の主要遺構である。これは16年度調査区で確認したSD09の上流部分にあたる。長大で規模が大きいため、試掘段階では自然河道と思われたが、遺跡内でも地形的に高い場所を縦断しており、埋没と再掘削を繰り返している覆土状況等から人工的な構造物と認定した。開削年代は明らかでないが、帰属時期は古代～中世期と考えられる。大溝の役割が本遺跡の性格を知る鍵となる。また、今年度調査では集落遺跡として必要条件である居住施設が多数検出され、掘立柱建物5棟、堅穴建物13棟を数えた。建物遺構は、東側調査区に集中する。これまで市内における奈良・平安期の建築遺構は、宮森新北島I遺跡¹⁾の掘立柱建物1棟と堀山城跡（法花坊跡遺構）²⁾の堅穴建物3棟しか検出されておらず、1遺跡の遺構数では他を圧倒する。掘立柱建物4棟（SB01・02・03・04）は側柱建物で東側に集中在し、SB02のみ東西方向であるが他の3棟は南北方向に主軸をとる。規模や柱間距離、構造に統一性がない。中世期と思われるSB05は総柱建物で、西側調査区にある。堅穴建物（SI97・166・167・395・491・492・493・494・495・550・620・620・650・1220）は規模や構造の型式が数種ある。SI166は、平面積が大きな堅穴建物でSB01に併設する。柱を9本備え、柱間に小溝を巡らす構造で特異な存在である。南に小規模で無柱穴の建物SI97・167が並ぶ。SI166とSD09の間にSI491・492・493・494・495が密集している。SI493はSI495に切られ、それらの埋没後にSI492が造られる。SI491・492・494は南北に整然と並び、計画的配置を思わせる。西側調査区には検出例の少ない堅穴外柱穴をもつ堅穴建物SI620、SI550がある。堅穴建物廃棄後、程なくして素掘小溝が縦横に造成される。性格は不確証だが、格子目状に配置される状況や一定の間隔をもつことなどから、なんらかの造成意図があつて造られたと考えられる。自然科學分析の結果から、島跡とは認められない。

時期 建物遺構出土遺物はSI494埋土の蛇紋岩製磨製石斧（図107、181）やSD09・SK556出土の中世遺物を除いては、大部分が奈良・平安期に属するもので、年代は8世紀後半から9世紀前半に帰属と考えられる。カマド焼土の古地磁気測定（p.218～）および出土炭化物の放射性炭素年代測定（p.182）で導かれた年代とも齟齬がない。翻れば掘立柱建物・堅穴建物等の各遺構は時期差があまりなく、短期間のうちに建設・廃棄されたと理解できる。素掘小溝は建物遺構群と近似した覆土で、出土遺物にも新しい要素がないので建物廃棄と時期差がほとんどないと考える。遺跡内で継続的に使用された遺構は、SD09だけとなる。

SB02からは本遺跡で初めて弥生土器（法仏期）を検出している。

弥生土器

1) 岐阜県教育委員会 1978『吉山原宿岐阜市喜森新北島I遺跡緊急発掘調査報告』

2) 岐阜市教育委員会 2002『吉山原宿岐阜市堀山城跡発掘調査報告』（林道堀山城跡整備工事に伴う緊急発掘調査報告書）

掘立柱建物の調査手順 素掘小溝以外は切り合う遺構が少なく、周間にピットが密集する状況ではなかったので建物の抽出は比較的容易だった。遺構認定の手順を説明する。まず、遺構検出段階に平板測量で作成した概略図(1/100)を基に、平面的に柱の並びを検討する。見段 据り 当がくと、すべての柱穴を約5cm段据りする。単なる小さな落ち込みでないか確認をして、柱根痕跡 次に切り合いや柱根痕跡をみる。その情報を基に柱の並びを決め、基本的に衍行方向に半割用の糸を張り、半掘する。断面観察をするには断ち割りが最良の方法だが、第3遺構面の影響を考え、一般的な半掘とした。次に断面を観察、図化(1/20)する。基本的には柱根痕跡の有無、柱のあたり、底面形態を確認し、柱穴であることを追認し、掘立柱建物と認定する。平面による確認→断面による追認、の流れで柱据り方を把握する。ピットが大量に検出される遺跡とは違い、本遺跡は遺構密度が希薄であり、掘立柱建物を構成する柱穴の抽出作業に時間を要しなかった。唯一現場で認識しえなかったのは、SB05である。整理時、南北主軸の掘立柱建物が多いので注意しながら平面図を眺めていたところ、等間隔に配列するピット群を見つけた。それぞれの断面図を確認したところ、柱根痕跡がないものの、底面形態が平底であり、掘立柱建物と認定した。

竪穴建物の調査手順 竪穴建物はある程度の深さをもつ遺構であり、多くの遺物が出土するので、認識するのは困難を伴わない。当該期の平面形態は方形が基本だが、大きさに多様性がある。範囲確認のため、検出後十字にサブトレンドを入れる。壁面や床面、深度を確認したのち、各辺の中点を結び、土層観察用の十字畦を残し、四分法で4区画を掘り下げる。遺物は残し、全点記録する。カマドを検出し、断ち割り調査。床面まで掘り下げ、断面図(1/20)作成のち十字畦を外し、遺物出土状況図(1/10)作成、写真撮影。床面の硬化、焼土の広がり、粘土等を確認する。遺物取り上げ後、柱穴を検出・掘削し、床面完掘写真を撮影する。再び十字畦を残し、貼り床および下層を掘り下げる。遺物は適宜図化・記録し、完掘となる。

SI492を中心とする竪穴建物集中域は、遺物包含層と覆土が錯綜し検出に困難を極め、結果縦横に無数のサブトレンドを入れ、切り合い関係把握に努めた。

遺物の器種分類と編年指標 須恵器、土師器に関しては基本的に吉岡康暢¹⁾、田嶋明人²⁾、北野博司³⁾、望月精司⁴⁾の各研究成果を参考とした。編年指標は古代北陸における共

田嶋編年 通鑑年輪として位置付けられる田嶋編年を使用し、曆年代観は望月の南加賀地域における年代觀に拠った。以前市内の安川天皇窯を察理した際に高松・押水窯跡群中の正友やチヤマ窯との共通点を指摘したことがある⁵⁾。のことから土器編

	縄文土器
	打製石斧
	須恵器
	弥生土器・土師器
	珠洲焼
	中世土師器
	中近世陶磁器
遺物断面凡例	

1) 吉岡康暢 1983 「第2章 素良平安時代の土器層年」『飛騨古墳編江正跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会

2) 田嶋明人 1987 「第3章 古代土器の層年地図設定」『輪島遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

3) 同 1988 「古代土器層年層の設定」『北陸古代土器研究の現況と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

3) 北野博司 1986 「北陸における須恵器生産」(1) 墓年の概要「北陸の古代手工業生産」北陸古代手工業生産研究会

同 1999 「須恵器と其の器種分類」『北陸古代土器研究第8号 須恵器の器種を考える! つばとかわ』

4) 望月精司 2006 「第V章 A地区とD地区で出土した古代遺物」『輪島町地誌I』小松市教育委員会

5) 松任市教育委員会 2005 「安川天皇窯跡発掘調査報告書」

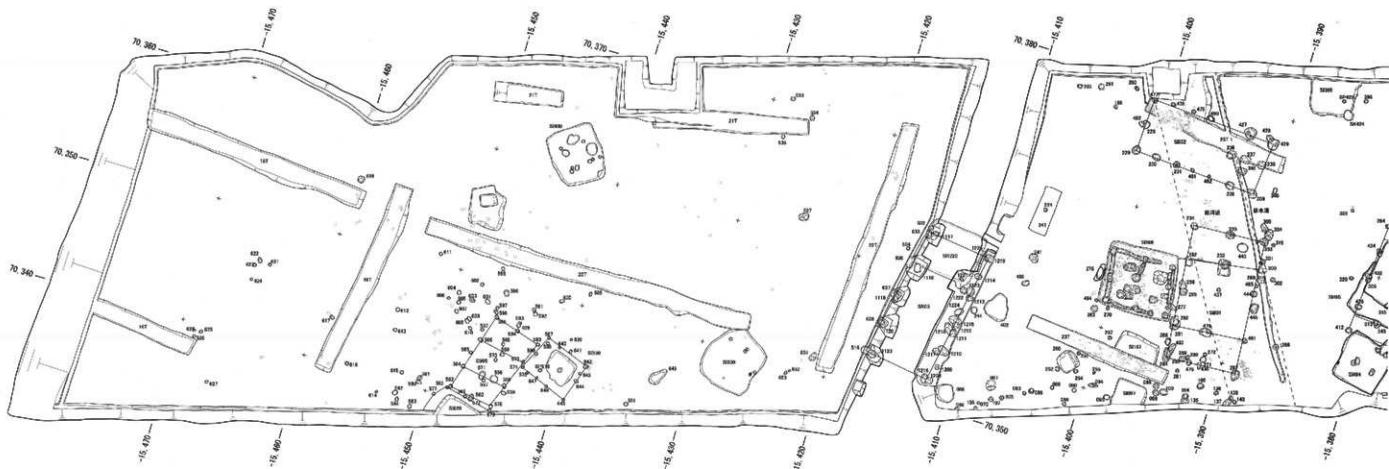
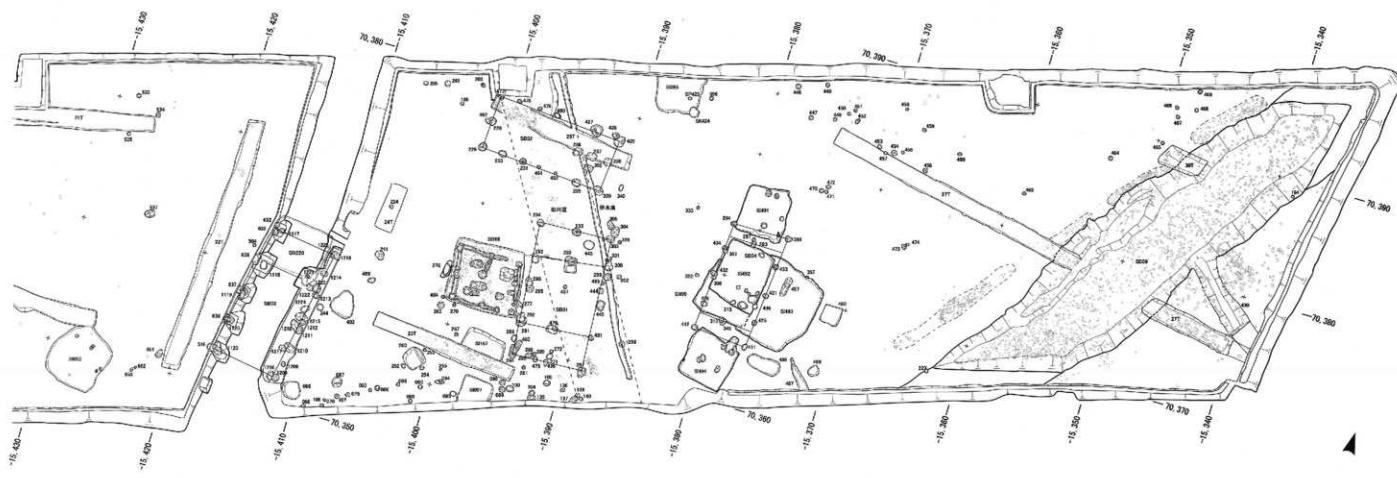


图30 第2通横面全体图(平面图S=1:300)

年上でも同窓跡群の研究成果を参考にした部分がある¹⁾。須恵器の器種名は、右表（表2）のとおり。貯蔵具は北野の分類に従うが、煮炊具については、宇野隆夫が用語混亂の回避を目的として「深い煮炊具を釜、浅い煮炊具を鍋」と提案した姿勢に賛同し、長胴甕=長胴釜、短胴甕=短胴釜と分類する²⁾。各部名称は、主に中村浩の呼称³⁾を基本とするが、通俗的に使用している用語も含んでいる。法量という用語は本来仏像の寸法を表すもので土器への適用は馴染まないが、代替の用語も見当たらないため、これまでの学史を尊重し使用する。

表2 器種名一覧

本書の名称	田島分類
無台杯	杯A
有台杯	杯B
楕	楕A
鍋	鍋A
長胴釜	釜A
短胴釜	釜B
短颈甕	甕A
長頸甕	甕B
横瓶	台付長頸甕（甕D）
甕	備底甕

1) 吉岡義典 1991 「第2章 須恵器の質質」『日本古墳の土器・陶器』(古代編) 六曜出版

2) 斎戸精一・川畠 誠 1994 「高松・押水窓跡群の8世紀中葉の面相」『北陸古代土器研究第4号』北陸古代土器研究会

2) 宇野隆夫 1962 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告第4集』国立歴史民俗博物館

3) 中村 浩 2001 「参考資料」『和泉陶邑出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版

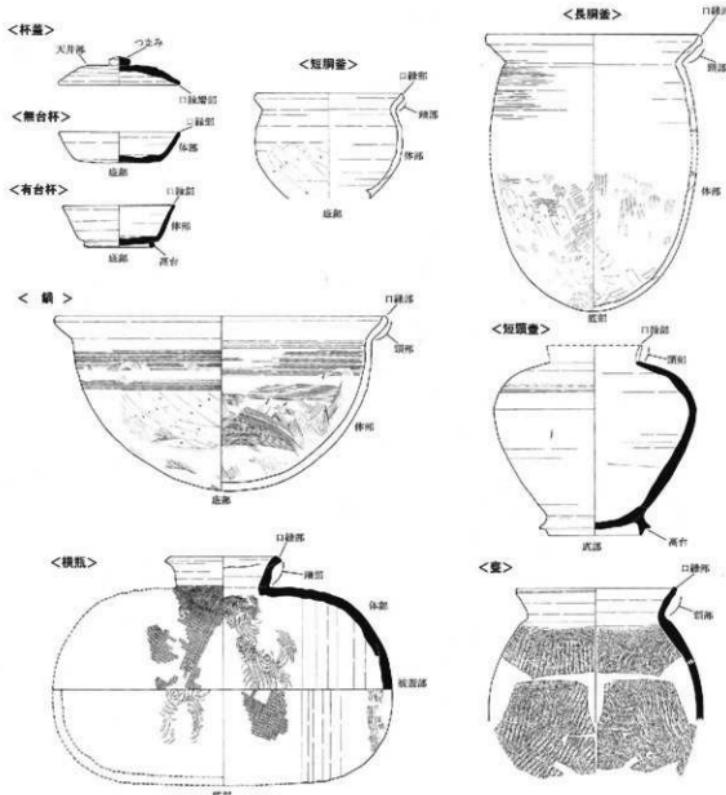


図31 須恵器・土師器の器種名と各部分名称

(1) 挖立柱建物 [Embedded-pillar building; Posthole-type building]

掘立柱建物 (S B 0 1) (図32・33・34 図版9・42・43・45)

位 置 調査区中央東側、建物遺構が密集する位置にあり、SI166・SI167に接する。同じ掘立柱建物であるSB03とは平面的に平行し、長軸を南北に取る。SB02とは長軸が90度異なり、L字形の平面位置にある。洪水堆積層4層上面で確認されたが、古代遺物包含層2層からの掘り込みと考えられる。

重複関係 上部が後世の河道跡に削られるが、重複関係にある遺構はない。排水溝工事によりSP299・300・301が掘削される。

規模と構造 平面は矩形（長方形）を呈する。建物規模は桁行4間の総長10.6～10.9m、

側柱建物 枠行2間の総長5.7～5.8mであり、平面積63.2m²を測る。南北方向に長軸をもつ側柱建物（身寄建物）である¹⁾。妻側から内1間の位置に2基の遺構（SK233・SK476）を検出、当初は別遺構として扱っていたが平側・妻側柱穴からの距離がほぼ1間に相当することから、掘立柱建物を構成する遺構として扱うこととした。SP445とSP295・296の間に柱がないので総柱とは考え難く、SK233・476の掘り方の規模が大きいことや内1間にあることから、上屋構造（棟持柱木）を支える棟持柱と考えたい。

平入・妻入の別は、確認できなかった。

柱 穴 柱穴は調査区内で完結しており、総数14基である（切り合い関係にあるものを除く）。柱穴は、ほとんどが明瞭な柱根痕跡が確認できない柱抜取り穴である。図版に柱痕跡とあるのは柱自身の痕跡でなく抜き取られ柱痕跡が推定できるという表現である。柱振り方の平面形態は、円形・稍円形・やや方形に近いものなど統一性がない。西桁行の柱（SP295・296、SI291・292、SP284・285・483）に切り合いがみられることから、柱の据え替えもしくは建て替えが行われた可能性がある。東桁行の柱穴は、柱筋の通りが悪い。柱間距離がばらつき、柱列が外にやや膨れるように湾曲する。これは、国衙・都衙等の官衙遺跡ではあまりみられず、地方の集落遺跡に類例が認められるといふ²⁾。集落における造営精度の低さを物語るものと考えられる。

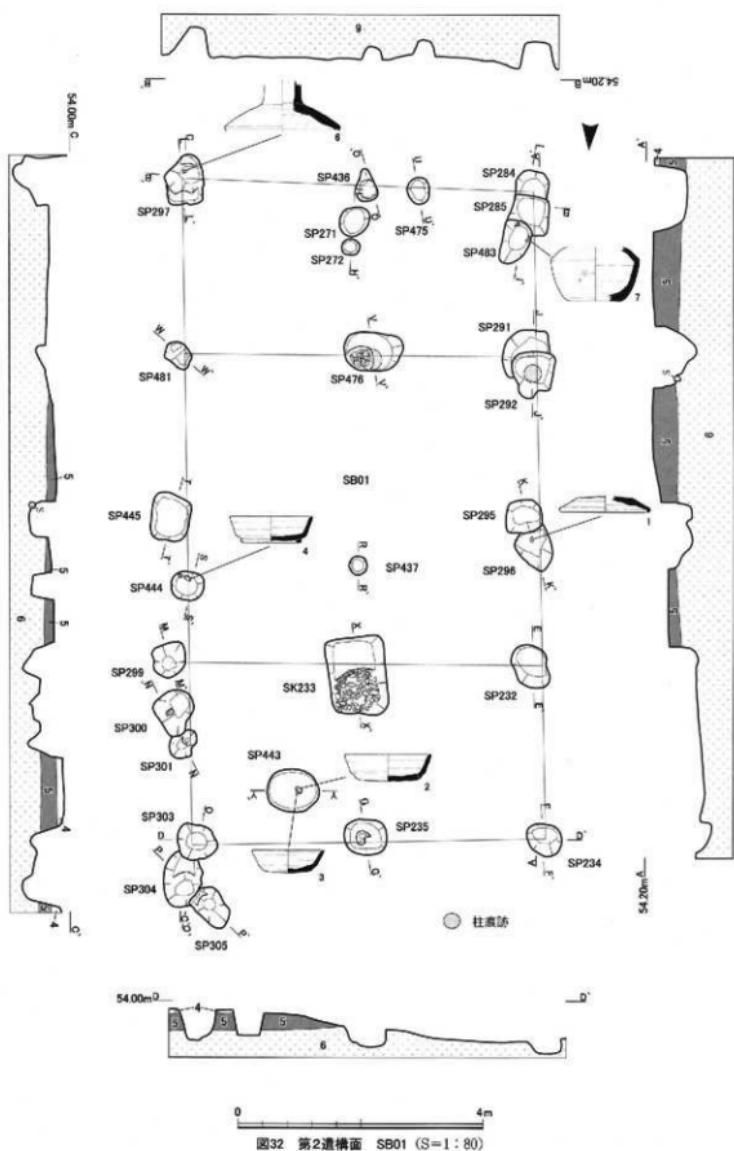
また、切り合い関係にはないが西桁行が竪穴建物SI166東辺と一部共有する位置にあり、SP同時期併設 481・292・232・299を結ぶ平面（24m²）がSI166（30m²）の平面積に近い規模にある。出土遺物の時期差が明確でないことから、新旧関係を明らかにしないがSB01・SI166の同時期併設もしくはSI166がソノ屋の施設となる同一建物である可能性を指摘しておきたい³⁾。

SP436は覆土上面に扁平な円環がのっており、あたかも一旦埋めた後に礎石として使用したかのような印象をもつ。SP443は本遺構との関連が特定できないが、SB01周辺には他に遺構が皆無、そして覆土から焼成不良の須恵器杯が2枚重なった状態で出土したことから、建物の地鎮祭祀 建設もしくは廃棄に伴う地鎮祭祀の可能性も考えられる。

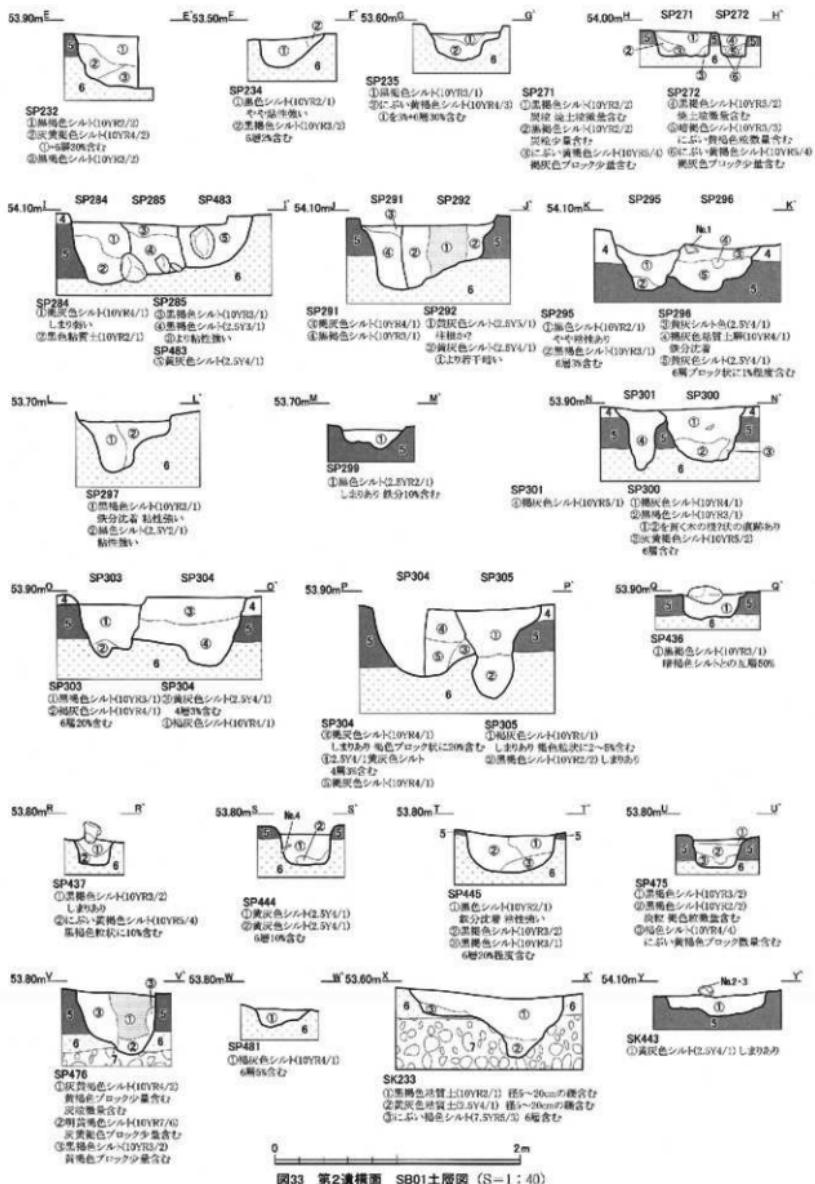
1) 山中敏史 2003「II-5 遺物遺構の区分」『古代の宮衙遺跡 I 遺構編』奈良文化財研究所

2) 首木辰二郎氏のご教示による。

3) 上野幸太氏のご教示による。



第8章 調査の方法と成果



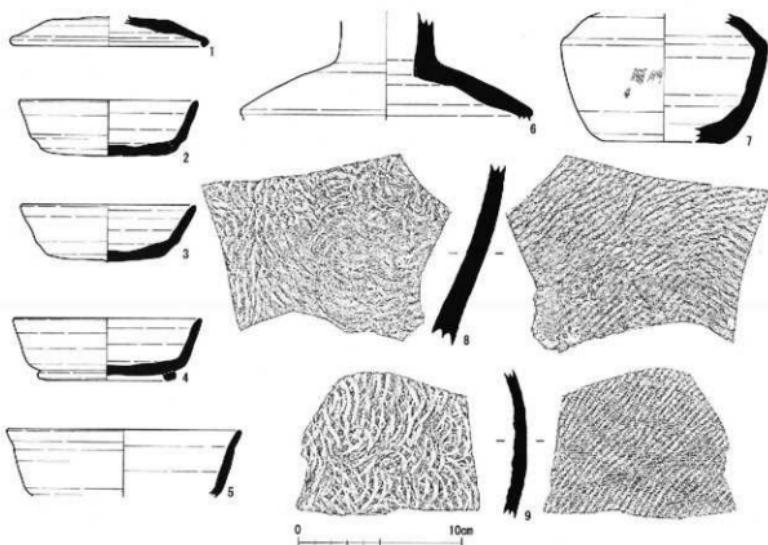


図34 SB01出土遺物実測図 (S=1:3)

遺物 1はSP296出土の須恵器杯蓋であり、つまみが欠損している。天井部は厚く、口縁端部は丸く返す。2・3はSK443中央中位から出土した生焼け状態の須恵器で、身が褐色を生焼け須恵器呈する。埋土は単層のため短期間の埋没が推定でき、埋納行為の所産とも考えられる。2は無台杯(杯A)で、体部が直線的に立ち上がるが底部との境で強い撫でにより段をなす。外傾度・杯Aは 65° 、径高指数は31.9を測る。3は2と同型・同窯と考えられる無台杯で、体部が直線的に立ち上がるが、底部は丸底状となる。外傾度は 68° 、径高指数は29.2を測る。2・3とも口縁部外間に重ね焼き痕があり、正位の身に正位の蓋を乗せる北野博司分類I類¹⁾より正位の身を連続して重ねるIII類(春日真実C類²⁾)が妥当である。4は有台杯(杯B IV)で貼付高台は内端接地・杯B IVとなる。外傾度は 68° 、径高指数は33.9を測る。5は口径15cmの大型の有台杯(杯B II)で、体部が直線的に立ち上がり口縁部で外反する。杯頸は絶じて法量が小さく、III期から続く食膳・杯B II具法量の平均的小型化傾向が看守される。

6は長頸瓶の胴頂部から頸部まで遺存するもので、胴頂部の器壁が厚く、外面に濃緑色の自然釉が厚くかかる。7は小型の無台瓶頸で、胴頂部・頸部・口縁部が欠損する体部片である。小型無台瓶胴頂部の器壁が薄く、胴頂部から体部にかけて薄く降伏する。8・9は釜体部片である。ともに外面に平行叩き、内面に同心円文当て具痕を残す。9は器壁が薄く、外面に平行叩き後、刷毛状工具で整形を施す。

遺物年代は、IV2期(8世紀第3四半期)に帰属すると考えられる。

1) 北野博司 1998「重ね焼きの復元」『辰口西部遺跡群』石川県埋蔵文化財センター

2) 春日真実 1989「3 室詰めの方法」『越中上末窯』(富山大学考古学研究報告第3回) 富山大学人文学部考古学研究室

掘立柱建物 (SB02)

[図35・36・37 図版10]

位 置 調査区中央東側、建物遺構が密集する位置にある。SB01とは平面的にL字の位置関係にあり、掘立柱建物の中でもっとも北に位置する。洪水堆積層4層上面で確認されたが、古代遺物包含層2層からの掘り込みと考えられる。

重複関係 遺構中央が後世の河道跡に削られるが、重複関係にある遺構はない。SP429とSP428、SP228とSP482はそれぞれ切り合い関係にあるが、柱の据え替え等の結果と考えられ、純粹に他遺構との重複はない。SP238は平成14年の試掘調査で掘削された。排水溝工事によりSP309の一部が掘削された。

規模と構造 平面は矩形（長方形）を呈する。建物規模は桁行6間の総長9.9m、梁行2間の総長4.3mであり、平面積42.6m²を測る。他の掘立柱建物が総じて南北に長軸をもつに對し、唯一東西方向に長軸をもつ。桁行・梁行とともに掘立柱建物の中でもっとも柱筋の通りが良い。

側柱建物 側柱建物（身合建物）だが、SP237・256・392が身合にあり、SB02に關係する可能性がある。SP237は棟持柱としての機能をもつ可能性もあるが、西側に対応する柱がない。河道により流失したとも考えられないで、SB01と同様に部分的な柱の据え替えや建て替えの可能性も考えられる。梁行の柱間は桁行のそれに比して大きいが、遺跡内の掘立柱建物において桁行の柱間はもっとも小さい。

柱 穴 柱穴は調査区内で完結しており、総数で16基を数える（後世の削平による未検出1基を含む）。妻側東の柱穴は規模が大きく、西は小さく不揃いである。柱抜き方の平面形態は不正円形であり、不揃いである。柱穴は、SB01と同じく柱抜取り穴である。

沈み込み防止 遺構中央付近の柱穴数基は、旧河道跡で削られ柱のあたり部分がわずかに残るが、底の断面形態がV字底・丸底でないため柱穴と断定できる。SP229のみ柱抜き方が地山埋層（6層）まで到達しているが、これは柱の沈み込み防止によるものと考えられる。SP231・239・427底部柱のあたりには柱のあたり（柱型）と思われる痕跡がある。SP461・462・479・478も柱抜き方ではなく、柱のあたり部分を検出したのである。

SP462に対応する柱穴は未検出だが、旧河道の深度を考えると流失したと認めた。旧河道跡と重なる各柱穴の平面形態のはらつきも上部流失によるものと考えられる。

遺 物 遺物出土は2点と少ない。1は南西隅の柱穴SP229出土の弥生土器である。
法仏式土器 弥生時代後期・法仏式期¹⁾の高杯杯部で、棒状脚部がつく形式と思われる。杯部中央位で粘土帶を貼付し、段を施す。内面は摩耗でみえないが外側は刷毛状工具による整形後施状工具による。
短 脊 瓶 磨き調整を施す。3世紀後半に帰属する。2はSP228出土の上師器の短脊瓶である。外反する口縁端部を上方につまみ上げ、外側を面取り整形する。口縁部内面に炭化物が厚く付着、体部外側にも煤が付着し、煮炊具としての使用が確認できる。IV期（8世紀後半）に相当すると考えられる。

1は遺跡内で唯一出土の弥生土器があるが、遺構形成層位や周辺の包含層出土遺物を総合的に判断すると、土師器瓶を本遺構の年代と捉えたい。

1) 谷内尾吉司 1983『北加賀における古墳出現期の土器について』『北陸の考古学 石川考古学研究会刊』石川考古学研究会

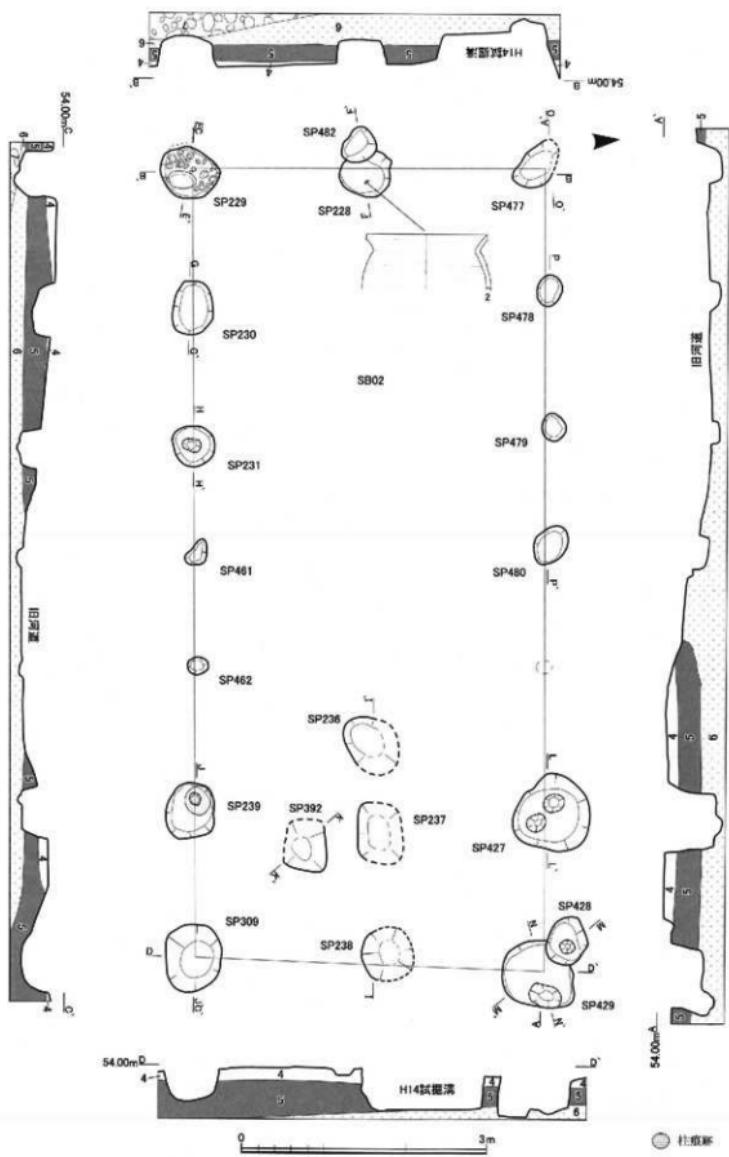


図35 第2造構面 SB02 (S=1:60)

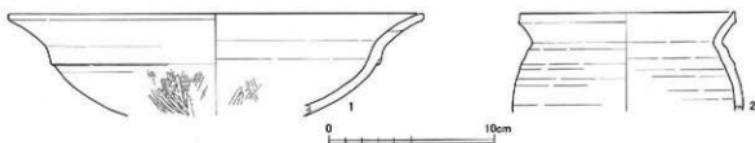
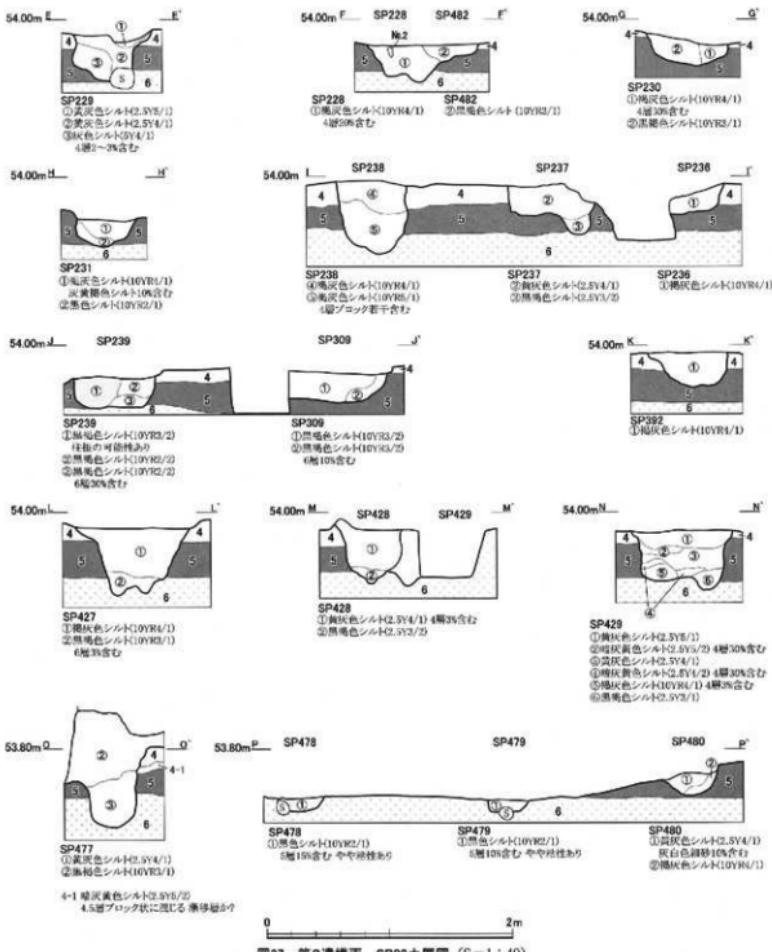


図36 SB02出土遺物実測図 (S=1:3)



掘立柱建物(SB03)

[図38・39 国版11]

位 置 調査区中央、建物遺構が密集する西端に位置する。

重複関係 上部が後世の河跡に削られるが、重複関係にある遺構はない。

規模と構造 平面は矩形(長方形)を呈する。建物規模は桁行4間の総長11.1m、梁行2間(推定)の総長5.2~5.7mであり、平面積63.3m²を測る。

この遺構は、通常の発掘調査手順で検出したものではない。調査区中央を南北に排水溝が走っており、調査対象外としていた。排水溝は、安全勾配を保って法面を造った。下層遺構面調査において排水溝を残した調査区中央部の断面図作成時、柱穴らしき落ち込みを確認、柱穴が西側柱の可能性があるという認識のもと、排水溝を挟んで東側を限界まで掘り進むと同規模の柱穴群が姿を現した。このため西側柱は遺構と認識した段階で西半分は調査用排水溝で破壊され、排水溝により桁行の柱数が未確定であるが、桁行が5mを超えるため2間と推定する。

柱 穴 柱穴は10基である(梁行未確認2基を除く)。柱穴が單独1基で存在せず、それぞれ同規模の柱掘り方が併設する。これは建て替えの結果による可能性が考えられる。

遺 物 遺構内から出土した遺物はない。

建て替え

の可能性

- SP616
①黒褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に10%炭化物質量含むわずかにしまりあり
②黒褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に10%炭化物質量含む若干しまりあり
SP638
①黒褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に10%含むしまりなし
②黒褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に10%含むしまりなし
③黒褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に10%含むしまりなし
SP639
①灰褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に10%黒褐色の数mm程度のブロック含むしまりなし
②黒褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に10%含むしまる黒褐色の炭化物含む
③灰褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に10%含むしまりあり
SP638
①灰褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に10%黒褐色シルトブロック含むしまりなし
②灰褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に20%黒褐色シルトブロック含むしまりなし
③黒褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に20%含むしまる黒褐色の炭化物含む
④灰褐色シルト(10YR2/2)6層ブロック状に10%含むしまりあり
SP639
①灰褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に10%炭化物質量含むしまりあり
②灰褐色シルト(10YR2/2)4層ブロック状に10%炭化物質量含むしまりあり

- SP638
①灰褐色シルト(10YR2/3)灰白色・黒褐色ブロック3m含む
②炭化物量含むわざかにしまりあり
③黒褐色シルト(10YR2/3)4層ブロック状に20%炭化物量含む
④とんじき子形がくびき形に10%含む
⑤黒褐色シルト(10YR2/3)4層ブロック状に30%炭化物量含む
SP1208
①黒褐色シルト(10YR2/3)しまりあり 炭化物量含む
SP1209
①黒褐色シルト(10YR2/1)4層ブロック状に10%含むしまりあり
SP1212
①黒褐色シルト(10YR2/1)しまりあり
SP1213
①黒褐色シルト(10YR2/1)しまりあり
SP1214
①黒褐色シルト(10YR2/1)4層松竹に20%含むしまりあり
SP1216
①黒褐色シルト(10YR2/1)しまりあり 4層ブロック状に30%含む

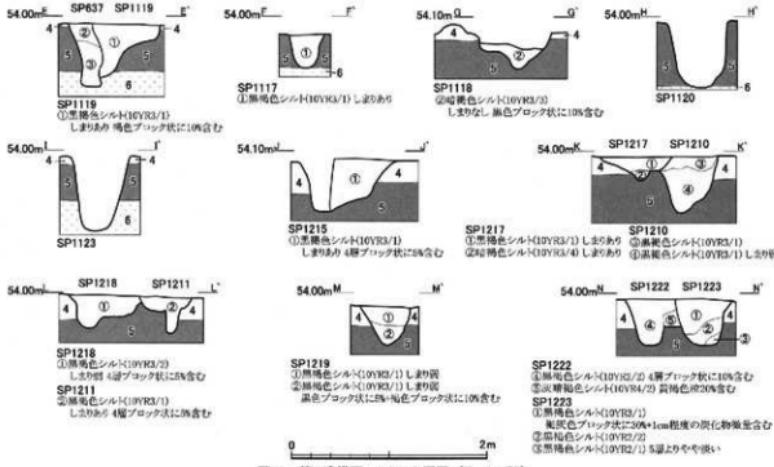
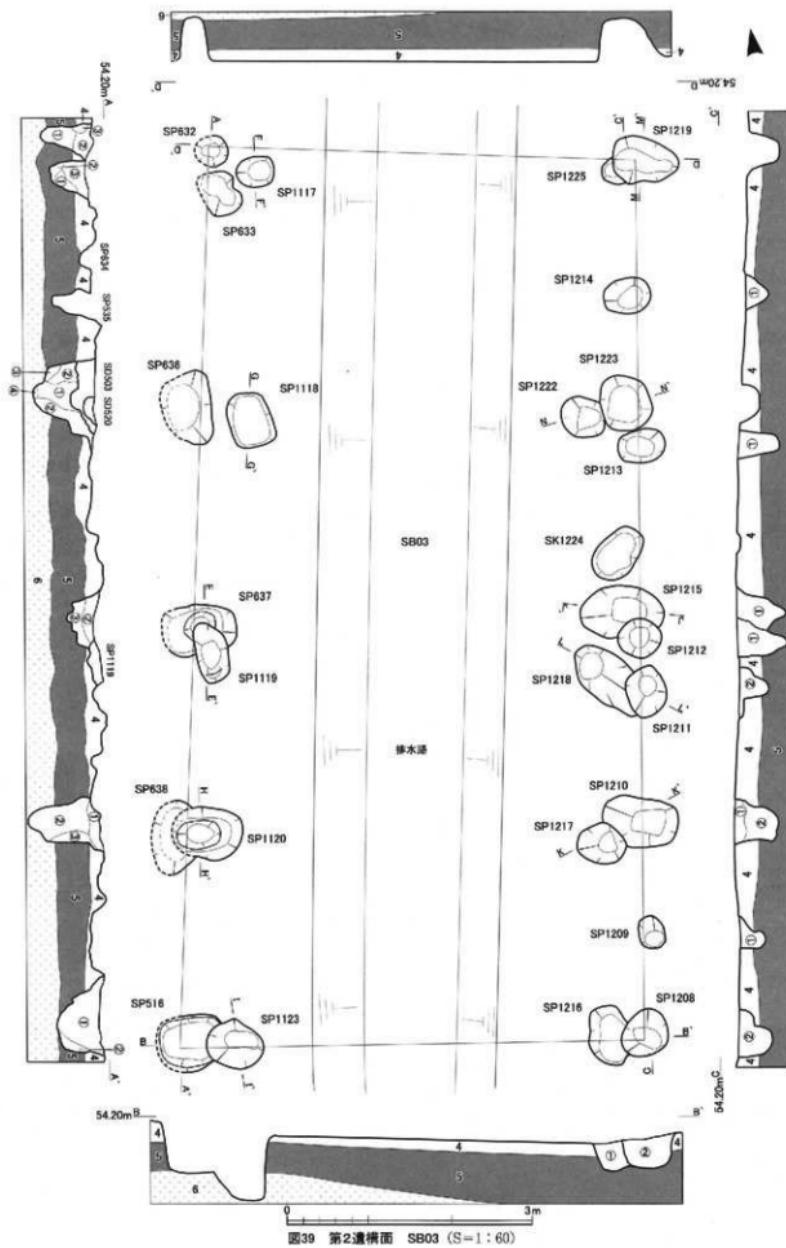


図38 第2遺構面 SB03土層図 (S=1:100)



掘立柱建物(SB04) (図40・41・42 図版12)

位置 調査区中央東側、建物遺構が密集する位置にあり、なかでも堅穴建物が複数切り合う場所にある。調査区中央にある洪水堆積層4層が堆積しない地点にあるため、5層上位で確認されたが、古代遺物包含層2層もしくは上位層からの掘り込みと考えられる。

重複関係 堅穴建物SI491・492・493・494・495に跨って存在するため、それら遺構と重複関係にある。柱穴覆土が堅穴建物の覆土と近似し見分けが困難であり、堅穴建物調査中にSB04の柱筋を認識した。SI492・493・495の覆土を切り込むことから、新旧関係はSI495>SI493>SI492>SB04となる。

規模と構造 平面は矩形(長方形)を呈する。建物規模は桁行4間の総長9.0~9.2m、梁行1間の総長4.4mであり、平面積40.5m²を測る。南北方向に長軸をもつ側柱建物(身合建物)側柱建物である。妻側から内に約半間の位置に2基の遺構(SP293・313)を検出、柱掘り方の複数と他に付随する遺構がSB04以外に考え難いことから、掘立柱建物を構成する遺構と判断した。SB01と同様、上屋構造(椽木)を支える椽持柱と考えられる。半間のズレが跡に落ちないが、棟発茶沢(1)遺跡特柱であれば棟から外れた位置にあっても問題ない。

堅穴建物との共存の可能性について触れておきたい。SB04の平面は、SI492全体およびSI495大部分の範囲を包括する。SI495西辺がSB04の西平側柱筋から若干外にあるので、関係性を認め難い。SI492は1棟全てSB04平面内にあるだけでなく、東西辺が桁行に平行し、西平側は共有する。SI492に上屋構造を支える柱掘り方がない。SP432(306)・SP367はSI492覆土を切って造成されるが、重複面積はわずかである。以上のことから、SI492は堅穴建物ではなく、SB04内にある半地下式施設の可能性を考える。羽生直彦は次城・東京・山梨の諸遺跡を取り上げ堅穴外柱をもつ堅穴建物の集中関係を検討しているが¹⁾、堅穴外柱穴に焦点を当てる本遺構のように柱穴が整然と掘立柱建物を構成しえる位置にあるものはないようである。また、掘立柱建物+堅穴建物は青森県発茶沢(1)遺跡に類例が求められるが、両者が連接する形をとる。SI492の詳細については別項(p.69)を参照されたい。半入・妻入の別は、確認できなかった。SP431からSP426を結ぶ線の西側に基2層上に古代遺物を含む暗褐色土の広がりを確認した。土がかなり締まっており、SB04に伴う整地層とも考えられる。

柱穴 柱穴は調査区内で完結しており、総数12基である(切り合ひ関係にあるものを除く)。柱穴は、柱根痕残るものがある。SP313は単層覆土の柱根痕跡で、埋土⁽¹⁾がない。平面形態は、不正円形であり他の掘立柱建物と比較して小規模であるが柱筋の通りが良い。

遺構 遺構内出土遺物は1点だけで、SP426出土の須恵器の有台杯(杯B IV)である。底部が欠損している。口径13.6cm、外傾度64°、体部が直線的に立ち上がる。焼成時の被熱により外面が赤変している。帰属時期の詳細は明らかでないが、V1期(8世紀第3四半期)に相当すると考えられる。

1) 羽生直彦 2003 「Ⅳ.堅穴外柱をもつ堅穴建物の集中関係」『歴史をもつ堅穴建物の研究』

六書房

2) 柱の周りを埋め詰めた土のこと。中山敏史 2003 「Ⅲ-1 柱穴」『古代の宮衙遺跡』(遺構編)

奈良文化財研究所

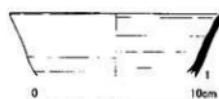


図40 SB04出土遺物実測図 (S=1:8)

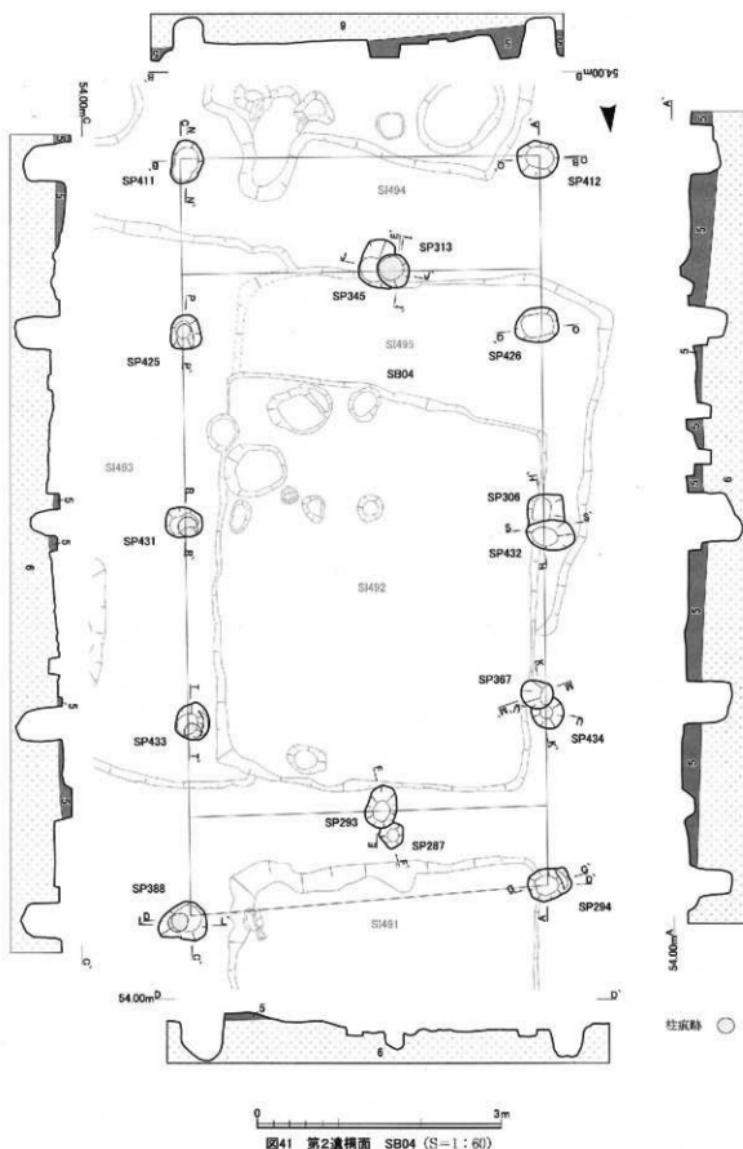
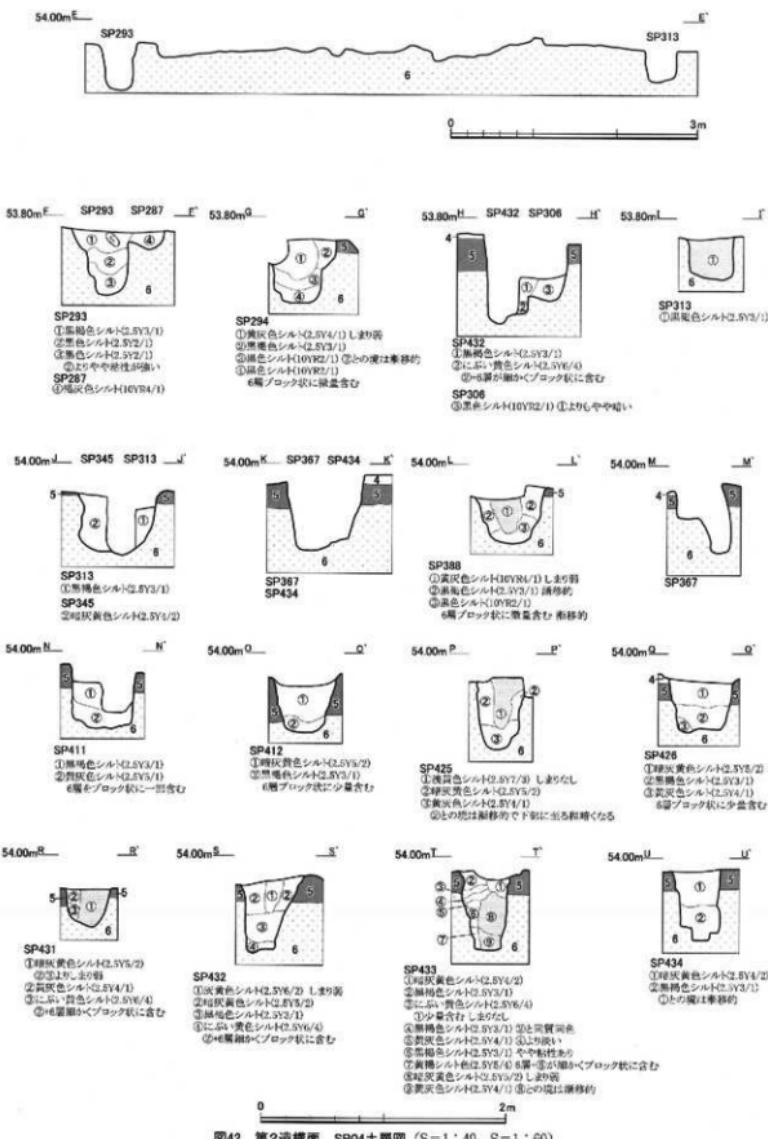


図41 第2発掘面 SB04 (S=1:60)



掘立柱建物 (SB05)

[図43・44 図版13]

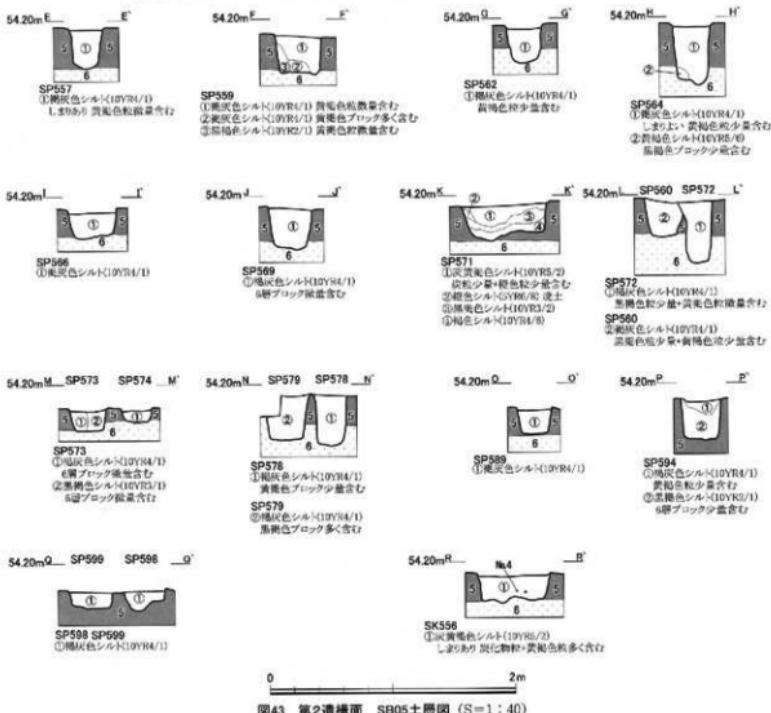
位 置 西側調査区中央のビットが集中する範囲にある。

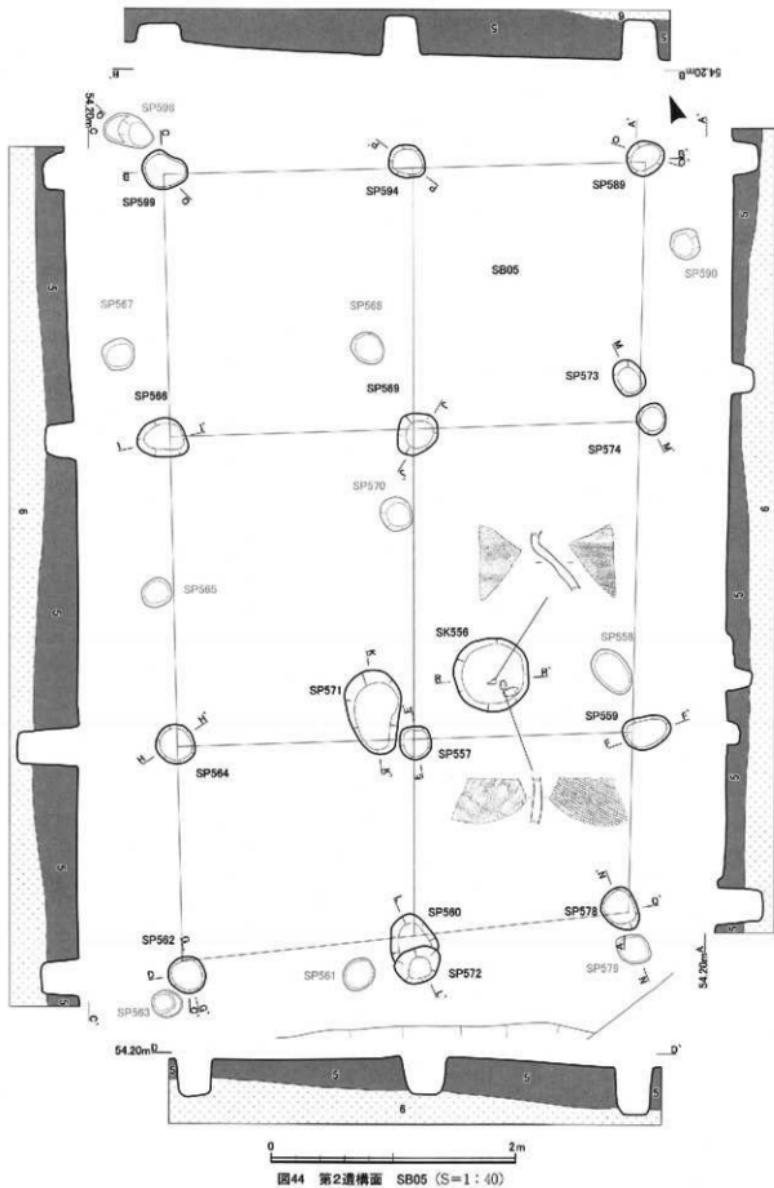
重複関係 重複関係にある遺構はないが、SI550・SI620と接する。

総柱建物 規模と構造 唯一の総柱建物である。平面は矩形（長方形）を呈する。建物規模は桁行3間の総長6.6m、梁行2間の総長3.9mであり、平面積25.7m²を測る。桁行が東西で長さが違うが、建物と見なすには支障のない範囲と考えられる。柱穴規模が小さいこと、中世以降に一般化する総柱建物であること、他の掘立柱建物と平面的規模が異なることを考慮し、帰属時期を中世に位置付けたい。現地調査時には確認できなかった遺構であり、整理段階で測量図と断面図を照合したところ、掘立柱建物と認識するに至る。

柱 穴 柱穴は総数で12基を数えるが、総じて規模が小さい。掘り方は直径30cm前後、検出面からの深さは30~50cmである。柱根痕跡はないが、すべて底面の断面形態がV字・U字でなく、柱穴と認められる。

珠 瑰 出 土 遺 物 柱穴からの出土遺物はないが、身舎内にあるSK556から珠瑰が2点出土している。鑿の体部であるため、時期の特定は難しいが中世に属すると考えられる。





(2) 穂穴建物 [Pit dwelling]

穂穴建物 (S197) [図版45・46 図版14・45]

位 置 調査区中央南側、建物遺構が密集する位置にあり、SI167に近接する。

重複関係 重複関係にある遺構はない。

規模と構造 南北辺2.5m、東西辺2.5m（復元値）、平面積は5.94m²（復元値）を測る。平面正方形面形態は、四辺がほぼ同様模で正方形に近い。掘り方は底が一部地山疊層7層まで到達するが、地山シルト6層までである。検出面からの深さは平均30cm弱である。古代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物はほぼ正方形をとる。床面は硬化していなかった。

柱 穴 柱穴と考えられるピットや周囲に穂穴外柱は検出されなかった。

カ マ ド 明確にカマドを検出することができなかつたが、中央床面に燒土が集中し、
燃焼施設 周囲が炭化物広がっていた。カマドか地床炉か判然としないが、燃焼施設の痕跡と理解したい。
の 痕 跡 遺 物 遺物は極めて少ない。1は須恵器の無台杯（杯A）である。外傾度は60°、
 口径は11.9cm、Ⅲ期に比べ小型化が進行する。2は土師器の短胴釜である。3は須恵器有台杯
 （杯B V）である。4は土師器短胴釜の底部で作り丸底だが、平底状となる。外面は鋸削り、内
 面は横撫で施す。時期は、IV 1期（8世紀第3四半期）に帰属する。

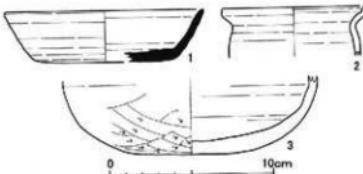


図45 SI97出土遺物実測図 (S=1:3)

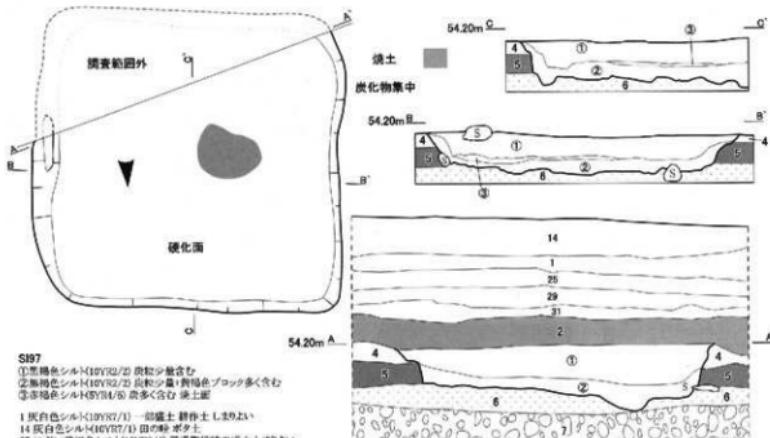


図46 第2遺構面 SI97 (S=1:40)

豊穴建物(SI166) (図47・48・49 図版15・16・17・44・47)

位 置 調査区中央東側、掘立柱建物3棟(SB01・02・03)とSI167に囲まれる。建物廃棄後、周辺には素掘小溝が造られるがSI166は影響を受けていない。

重複関係 重複関係にある遺構はない。

規模と構造 南北延5.3m、東西延5.7m、平面積は29.90m²を測る。平面形態は、四辺がほぼ同規模で正方形に近い。掘り方は底が地山礫層7層まで到達しており、検出面からの深さは50cm弱である。豊穴建物で唯一掘り方が礫層まで到達する。占代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物方位はほぼ磁北をとる。

床面のほぼ全域が硬化していた。北壁と小溝の間に幅70cmの空間が設けられている。部分的に硬化しているため、使用されたと思われるが特に出土遺物もなく棚状施設のような痕跡もない。人間が横たわる広さはあるので寝床とも推測できるが、根拠が乏しいのでこの空間の機能的役割は不明と言わざると得ない。

柱 穴 床面でP1・P2・P3・P4の柱掘り方を確認した。柱間約2mの方1間の柱位置である。P1・P2の規模が大きい。この4基は覆土削削中には認識できなかったが、SI166埋没後に掘削された可能性がある。床面からさらに掘り下げるとき礫面で大きく9基の柱掘り方を検出した(P5・P6・P7・P8・P9・P10・P11・P12・P15)。平面位置は、9基の柱穴が方2間の純柱建物のようである。各柱穴は礫面から50~60cmの深さがあり、底の断面形態は平坦である。加えて各柱穴を結ぶように幅30cm・深さ15cmの小溝が掘られている。豊穴建物にある壁周溝というより、柱間の壁を設置するための施設のようである。小溝は、P5とP9の間、P13・P14の間で切れる。深さ15cmの浅い溝なので慎重に検出したが確認できなかったため、削削されていなかったようである。この空間は、建物の入口を示すものかもしれない。

カマド 明確にカマドを検出することができなかった。覆土中に大型の礫を検出、芯材を破壊した痕跡の可能性がある。中央と南東隅の床面から焼土が部分的に検出された。南東隅の覆土からは、煮炊具である土師器鍋、長胴釜が出土している。この焼土と遺物範囲から東方向の壁にSP277とした溝状の掘り込みがある。以上の状況からSP277をカマドの煙道とし、焼土の範囲をカマドの焚口および燃焼部と考えたい。

遺 物 遺物は焼上範囲を中心に礫とともに南東隅に集中していた。1は須恵器杯蓋の小片である。2は須恵器の横瓶で、SI492出土片と接合した。口縁部は外反し端部を厚くし面横取りを施す。体部外面は格子目印き、内面に同心円文当て具痕を残す。体部被蓋部の観察から、閉塞円板貼付技法で製作されたと考えられが片側・両側の別は不明である。3は上師器鍋で、内面は撫でによる成形後に螺旋状にハケ調整、最後に頸部に搔き目を残す。外面も同様の調整を施すが、煮炊による被熱で不明瞭である。4・5ともに長胴釜である。SI166出土遺物は破片数が多いが、個体数が少ない。供膳具は杯蓋1、貯蔵具は横瓶1、煮炊具が鍋1、長胴釜2である。器種組成が本遺構の性格を示す可能性がある。時期は、IV1~IV2期(8世紀第3四半期~第4四半期)と考えたい。

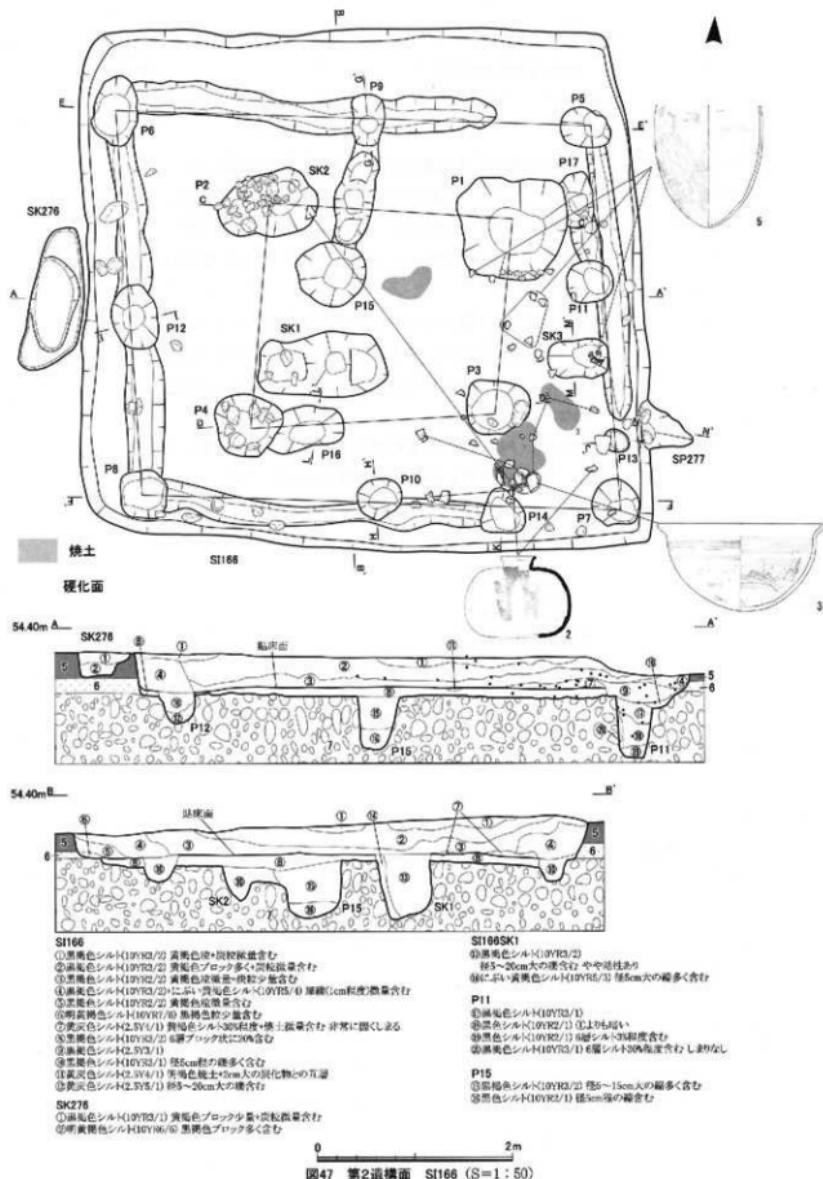
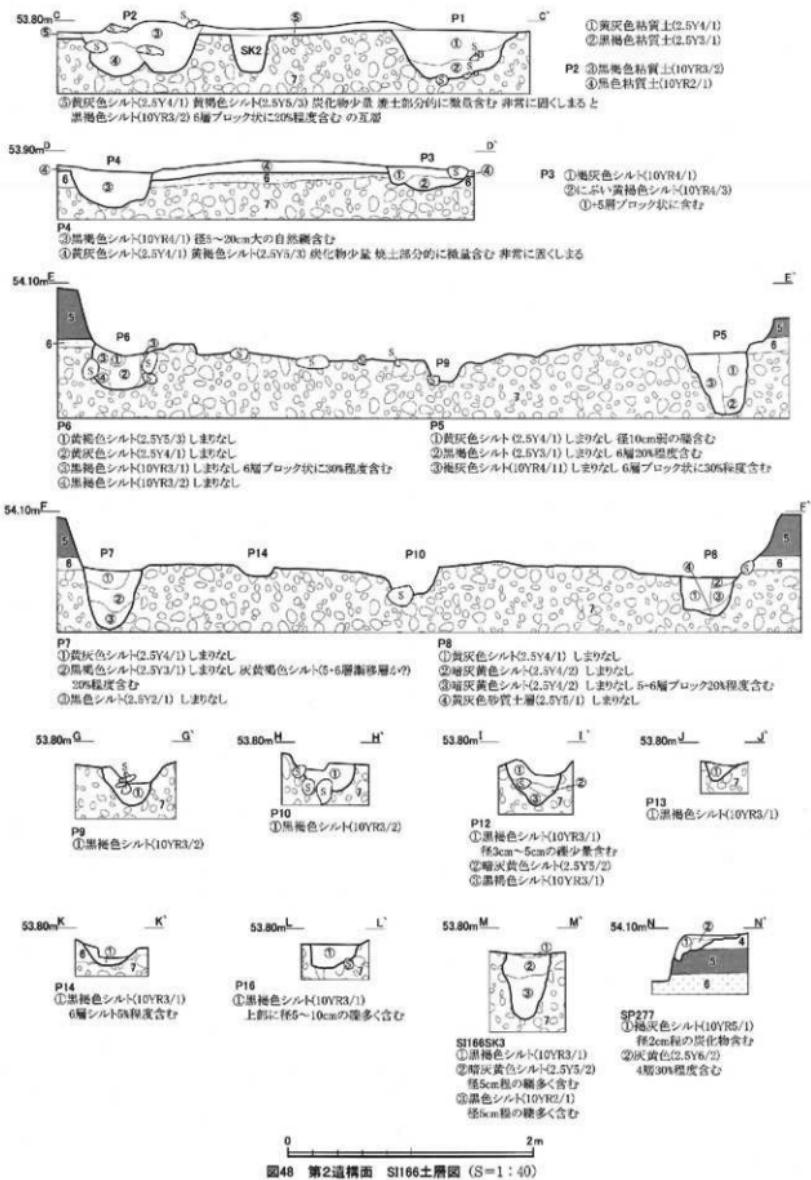


図47 第2道構面 SI166 (S=1:50)



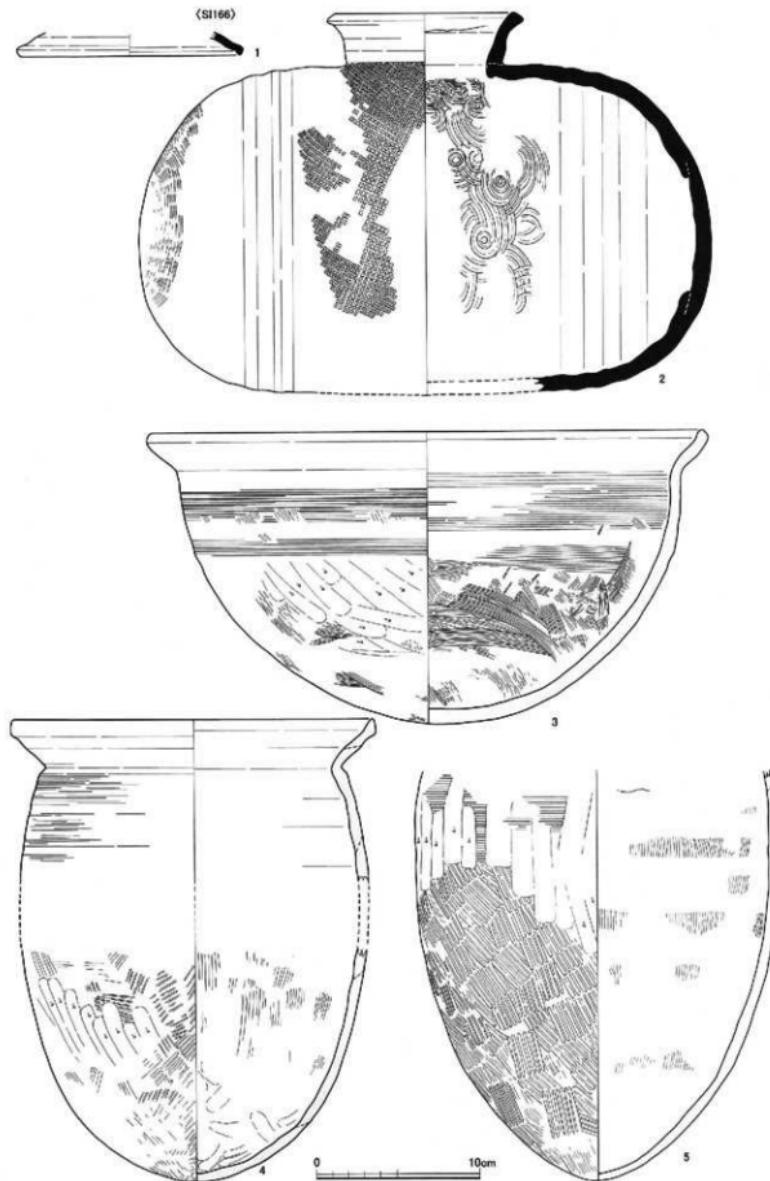


図49 遺構出土遺物実測図(2) 積穴建物 ($S=1:3$)
SI166: 4・5

豊穴建物(SI167)

[図50・51 図版18・45]

位 置 調査区中央東側、建物遺構が密集する位置にあり、掘立柱建物3棟(SB01・02・03)とSI97・166に囲まれる。

重複関係 重複関係にある遺構はないが、平成14年試掘トレンチにより南半が掘削された。試掘段階では豊穴建物を認識することができなかった。

規模と構造 東西辺3.5m、南北辺は試掘トレンチにより規模推定できない。長軸は正方位をとる。カマド、柱穴、貼り床などの諸施設は検出されなかった。掘り方が検出面から10~30cm程度と浅い。本来は深度が相当程度あったと思われ、諸施設は遺物包含層削除段階で破壊してしまった可能性もある。本遺跡内の豊穴建物の中では、規模の小さい部類に入る。遺物 小規模
豊穴建物

柱 穴 柱穴と考えられるピットや周囲に豊穴外柱は検出されなかった。

カ マ ド カマドおよび焼土範囲を検出しなかった。

遺 物 遺構中央床面から須恵器杯蓋が1点出土している。内面を上に向かた状態で出土した。外面全体に厚く降灰している。天井部に回転削りを施し、扁平なつまみを付ける。口縁端部はやや外反するよう接地し、内面に自然釉が付着する。時期は、IV1~IV2期(8世紀第3四半期~第4四半期)と考えたい。

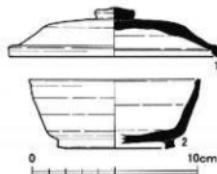


図50 SI167出土物実測図 (S=1:3)

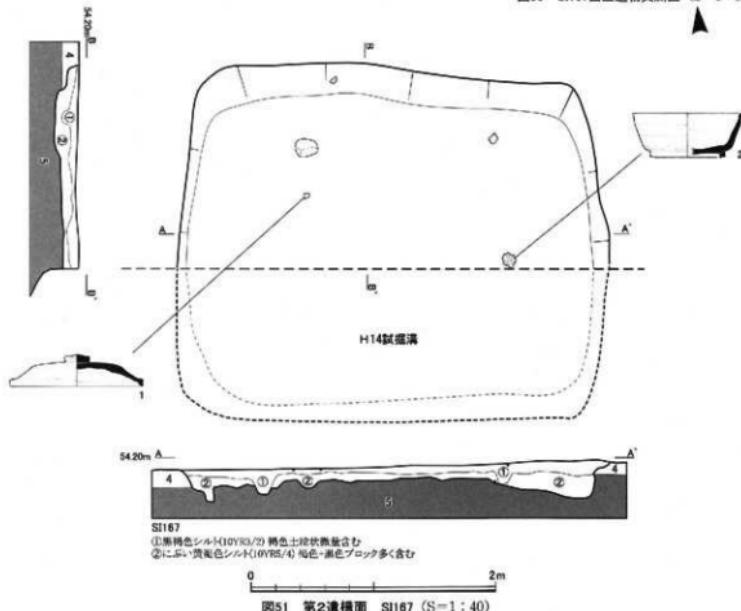


図51 第2造構面 SI167 (S=1:40)

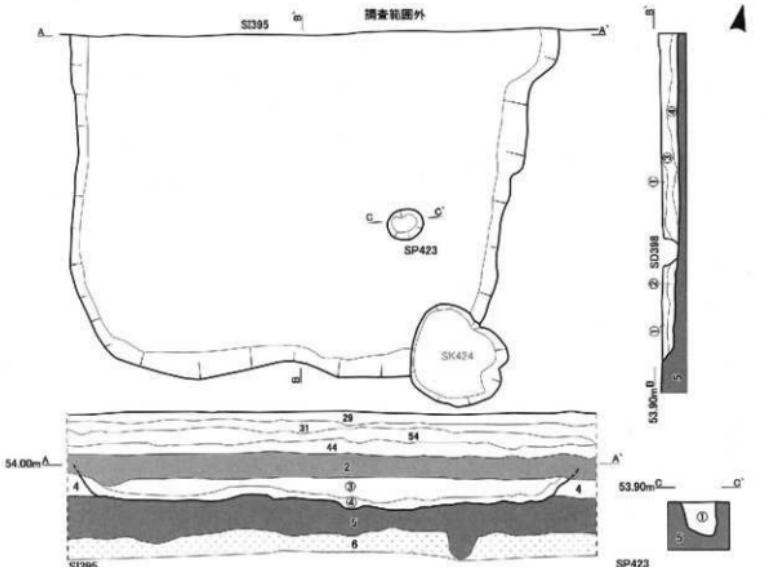
堅穴建物 (S I 3 9 5)

〔図52・53 図版18・45〕

- 位 置** 調査区中央東側、建物遺構が密集する位置の北側にある。
- 重複関係** 埋没後、素掘小溝SD398、土坑SK424に切られる。
- 規模と構造** 東西辺3.9m、北半が調査区外にあり、南北規模が推定できない。残存の平諸施設なし 面積は9.70m²を測る。カマド、柱穴、貼り床などの諸施設は検出されなかった。覆土は検出面から15~20cm堆積し、調査区断面観察では2層中の掘り方が認識できない。
- 柱穴なし** 柱 穴 柱穴と考えられる構造や周囲に堅穴外柱は検出されなかった。SP423は掘り方、規模ともに柱穴の可能性がある。位置的にも4本柱の南東柱に該当する位置にある。
- カマド** 焼土やカマドに類する施設はない。
- 須恵器杯蓋** 遺 物 造構覆土から須恵器の杯蓋が1点出土している。焼成不良であり、土師質に近い。かえりが屈曲し、天井部も肉厚であり、時期はIV1期（8世紀後半）と考えたい。



図52 SI395出土遺物実測図 (S=1:3)



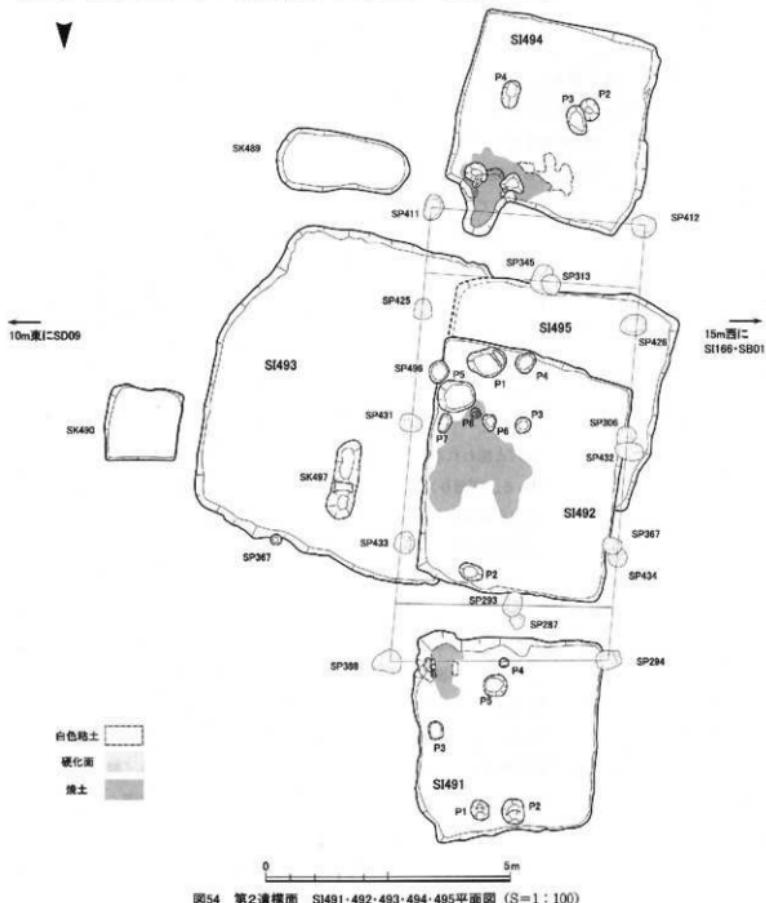
SI395
 ① 黄褐色シルト(0YR2/1) しまわり 噴出物 ブロック状に20~30%含む
 ② 黒褐色シルト(0YR2/2) しまわり 噴出物 ブロック状に40~50%含む
 ③ 黄褐色シルト(0YR2/3) しまわり 黄褐色 ブロック状に10%含む
 ④ 黄褐色シルト(10YR2/3) しまわり 黄褐色 黑褐色ブロック状に10%+混入 黑褐色
 ⑤ 黄褐色シルト(0YR2/4) 数分分布のしまわり
 ⑥ 黄褐色シルト(0YR2/5) 数分分布のしまわり
 ⑦ 黑褐色シルト(10YR2/5) 黄白色+明黄褐色の1cm未満のブロック5割程度含む
 層の上部には疊分化層がみられる 疊層の底層を含む

0 2m
図53 第2遺構面 SI395 (S=1:40)

堅穴建物群(SI491・492・493・494・495)

[図54 図版19 卷頭カラー3]

調査区東側の中央周辺で掘立柱建物と堅穴建物が密集して検出された。堅穴建物5棟、掘立柱建物1棟、土坑2基で構成される。堅穴建物3棟(SI492・493・495)は切り合い関係にあり、SI492を包括する範囲にSB04が建設される。SI492とSB04の新旧・併存関係は把握できていない。本遺跡内で建物の密集度が高く、特異な在り方である。大溝SD09からもっとも近い建物で15~20mの距離である。出土遺物の時期差は小さく、8世紀後半から9世紀前半に収まる。カマド焼土の古地磁気測定を実施したが、堅穴建物間には年代の隔たりがほとんどない 古地磁気測定(p.219)。本遺跡の集落としての要素を考慮すると、注視すべき造構群である。



豊穴建物 (S 1 4 9 1) (図版20・21・42・43・45)

位 置 東側調査区東側、豊穴建物・掘立柱建物が複数切り合う場所にある。

重複関係 他の豊穴建物と切り合い関係にはないが、埋没後、素掘小溝が数条掘削される。南西隅がSP294に切られるような表現となっているが判断が難しく、掘立柱建物SB04との重複関係は確認できなかった。

規模と構造 南北軸4.0m、東西軸3.6m、平面積は14.60m²を測る。平面形態は、南北が長い長方形を呈する。カマドが1基、南東隅に付設される。掘り方は地山シルト層6層まで到達しており、検山面からの深さは30~40cm程度である。古代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物方位はほぼ磁北をとる。

貼り床が施され、床面の中央部分が硬化していた。P2からP5までの部分が硬化しており、範囲は比較的狭い。カマドに近い部分は煮炊のため、頻繁に人が立ち入りそうだが、硬化していない。貼り床造成工に遺物は含まない。

地山の凸凹 貼り床を除去すると地山の凹凸を検出した。東壁沿いに幅70cmの溝状の溝（SX7）がある。貼り床の前段階なので排水溝としての機能ではなく、建物造成当初の掘削痕と考えられる。東壁側だけ存在するので、建物の一辺を決めて深く掘り、周囲との深度を見ながらやや浅めに掘削し、のちに貼り床で水平化する造成法を推測できる。SX7は豊穴建物の造成方法を知る手がかりとなる可能性がある。建物の入口は特定できなかった。



貼り床下の凸凹状況

柱 穴 柱穴と思われるビットは、北

壁付近のP1・P2である。柱掘り方の底断面がV字・U字であり、打ち込み柱のような形状で柱配置ある。柱穴としたのは、ある程度の深度・規模をもつこと、底が外方向に掘削され柱を据えた場合に求心構造となるからである。

ただし、南北に対応する柱穴がないので全体的な柱配置の復元は難しい。試掘トレンチで追構覆土および床面を掘削したため、柱穴を削平した可能性もある。P4・P5は規模・掘り方ともほぼ同規模であり、いずれも底面が壁面方向に抉りこむように掘られる。新旧の判別は不明である。P4・P5がP1・P2と同規模の柱穴であれば求心構造となる柱配置と推定可能だが、掘削深度が浅く規模も小さいため、柱穴と認定できず入口施設に付属する可能性がある。上部構造の推定は困難である。

また、掘立柱建物SB04と連接する可能性も指摘しておきたい。いわゆる「掘立+豊穴」の構造である。SB04との切り合い関係が判然としないので、関係性について深く言及すること豊穴+豊穴はできないが、「掘立+豊穴」構造であれば、柱配置がP1・P2だけで構成される理由も理解できる¹⁾。

1) 上野幸夫氏のご教示による。

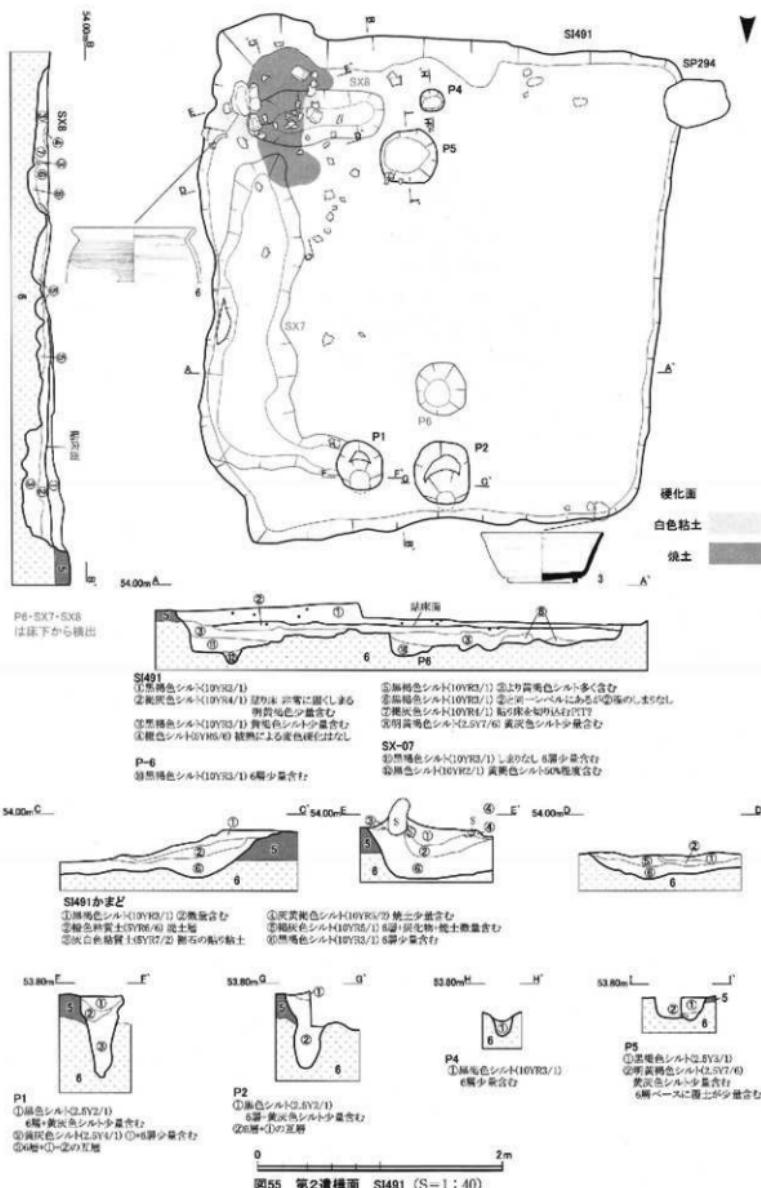


図55 第2縫構面 SI491 (S=1:40)

- カマド** 南東隅でカマドを検出した。遺存状態は比較的良好である。東壁に平行して両袖石があり、煙出しが壁面から南方向に延びる。そもそも煙出しの深度が浅いのか、検出時に破壊してしまったのか不明だが、煙出しは壁外20cmで閉塞する。
- 焼土および炭化物は、カマドの焚口から煙出しにかけて集中していた。
- カマド構築材** 石は被熱のため、赤変している。東袖石と東壁の間、西袖石の周辺にカマド構築材と思われる白色粘土が残っていた。粘土残留箇所が袖石周辺に限られるため、石を固定する目的で粘土を貼り付けたと考えられる。焚口や燃焼部に焼土、炭化物が集積しており、煮炊具の長胴釜片が散乱していた。状況から判断すると、カマド廃棄時に破却行為を行った可能性が考えられる。
- カマド覆土、床上、覆土から炭化米が出土している（第4章1, p213）。カマド6粒、床上炭化米7粒、覆土8粒を検出した。炭化米出土の堅穴建物は、他にSI492、SI493、SI494がある。
- 遺物** 遺物はカマド内部および周辺を中心に出した。カマドには長胴釜の破片が多く出土したが、図化し得る個体は少なかった。1は須恵器杯蓋でつまみは欠損している。口縁端部外面に蛇鱗が入る。天井部までの器高は高く山笠状となる。体部外面、天井部に近いと重ね焼きB2類ころに粘土の剥離痕がある。重ね焼き時に付いたもので、径から推定すると蓋を正位に連続して重ねるC類1ではなく、下から正位の身・逆位の蓋・正位の身・逆位の蓋の順に重ねるB1類、もしくは下から正位の身・逆位の蓋・正位の蓋・逆位の身の順に重ねるB2類と考えられ
- 杯 A** る¹¹⁾。2は須恵器の無台杯（杯A）で、体部は開き気味で外傾度は50度を測る。口径は12cmである。
- 杯 B II** IV期の法量と変わらないが、器厚の均質化や薄化が認められる。3は大型の有台杯（杯B II）であるが口径が15cmと小型化する。数少ないカマド以外の出土遺物で、北西隅の検出面に近い壁面から出土した。床面直上ではなく、覆土①層からの出土である。体部に焼き膨れや歪みがみられる。高台は低く内面接地となる。IV期の大型有台杯と比べ、口径に対し底径が小さい。
- 6は土師器の長胴釜で、口縁部から体部上半が残存する。口径部は横撫で仕上げ、端部を上方につまみ上げる。体部外面は強い搔き目が残る。須恵器横瓶片がSI166出土遺物（図49, 2）と接合している。

時期は、IV期（8世紀後半）が多少あるものの、無台杯、有台杯の特徴から、概ねV2期（9世紀第2四半期）に帰属すると考えられる。

1) 春日真実1980「3 窯詰めの方法」『鏡上木窯』（富山大学考古学研究報告第3冊）富山大学人文学部考古学研究室

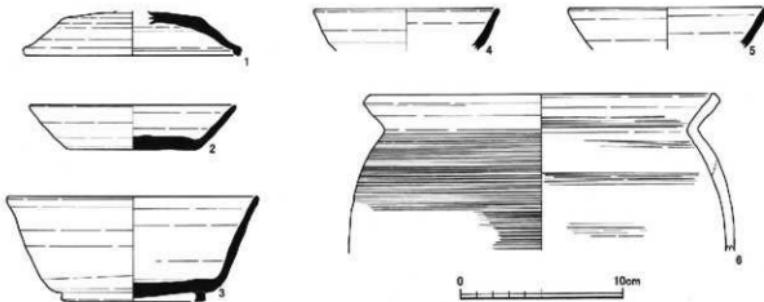


図56 SI491出土遺物実測図 (S=1:3)

豎穴建物 (S I 4 9 2 • 4 9 5) [図57・58・59・60 図版22・23・42・46・48・75]

位 置 調査区東側、豎穴建物・掘立柱建物が複数切り合う場所にある。SI491~496は、調査区東側で5棟が密集する豎穴建物群を構成する。建物の東西幅を同じくして南からSI494→SI492→SI491の順で整然と並ぶ。

重複関係 覆土が近似し見分けが困難であったため、豎穴建物調査中にSB04の柱筋を認識した。SB04は、SI492・493・495の覆土を切り込むことから、切り合いによる新旧関係はSI495<SI493<SI492<SB04となる。埋没後、東西方向の素掘小溝が6条掘削される。

規模と構造 [S I 4 9 2] 本遺構は、①平面が掘立柱建物SB04に包括される、②明確なカマドを検出できなかったものの焼土が広範囲に検出された、③鉄製品が出土、④土甕がまとまって出土、という点で他の豎穴建物と様相が異なる。決して例外的な豎穴建物ではないと思われるが、本遺跡内では特異な存在である。

特異な建物

南北辺4.9m、東西辺4.0m、平面積は18.87m²を測る。平面形態は、南北に長軸をもつ長方形を呈するが、東辺がやや長い。掘り方は地山シルト層6層まで到達しており、検出面からの深さは35~45cm程度である。古代包含層2層除去後に5層1面で検出されたが、覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物の主軸は方位はほぼ磁北をとる。貼り床が施され、床面の中央から東半分が硬化していた。焼土を囲むように硬化する状況から、西半と圧力のかかり方が異なる方法で使用されたと考えられる。貼り床を除去するとSI491と同様に地山面が凹凸しており、貼り床造成前の掘削状況を把握することができる。詳しく観察すると、鍬・鎌状器具による鋤き込み単位の見分けがつきそうな状況である。SI491のように平坦な部分と凹凸の激しい部分といった明確な差ではなく、全体に凹凸があるという印象である。地山面はSI493・495と同じく全面にわたって酸化鉄が集積・膠着していたが、形成要因は不明である。本遺跡においてSI492~495の範囲のみ検出されたので、水田耕土下に特有の酸化鉄沈殿集積1とは一概に処理できない。建物の使用に伴うものか、建物遺棄後の堆積作用によるものか判然としない。

貼り床下の
凹凸状況

本遺構は柱穴が伴わないことと上記①の理由から、SB04と同一の建物である可能性を指摘しておきたい。「掘立+豎穴」というより、中世集落の掘立柱建物内にある豎穴状造構に近い想定である。しかし青森県発茶沢(1) 遺跡例のように豎穴建物と掘立柱建物が接続するは知られるが、掘立柱建物の中に豎穴建物を包括する構造の報告例は皆見の限りみられない。否定的な要素としては、掘立柱建物の内部に大量の焼土を産出するような燃焼施設を構築するのは考え難いことである。煙出しが東辺にあるとすれば、柱間に設置されることになる。

掘立+豎穴

建物の入り口は特定できなかったが、入口を想起させる層位を西壁外の5層上面で確認した。数m幅の薄い層位で古代遺物を含み、硬く縮まりがあつて堅地層のような感触を受けた。入口の劣化を防ぐために固めたものか、出入りによって縮め固められた可能性もある。カマドと考えられる焼上範囲の反対側に位置するので、入口の場所としても妥当である。

[S I 4 9 5] SI492に切られ、全体像は明らかではない。東西4.5m、南北4.5m(復元値)、平面積18.605m²(復元値)である。平面形態は、正方形に近い。

1) 寺内真実1989「3 室詰めの方法」『越中上來窓』(富山大学考古学研究報告第3号)富山大学人文学部考古学研究室

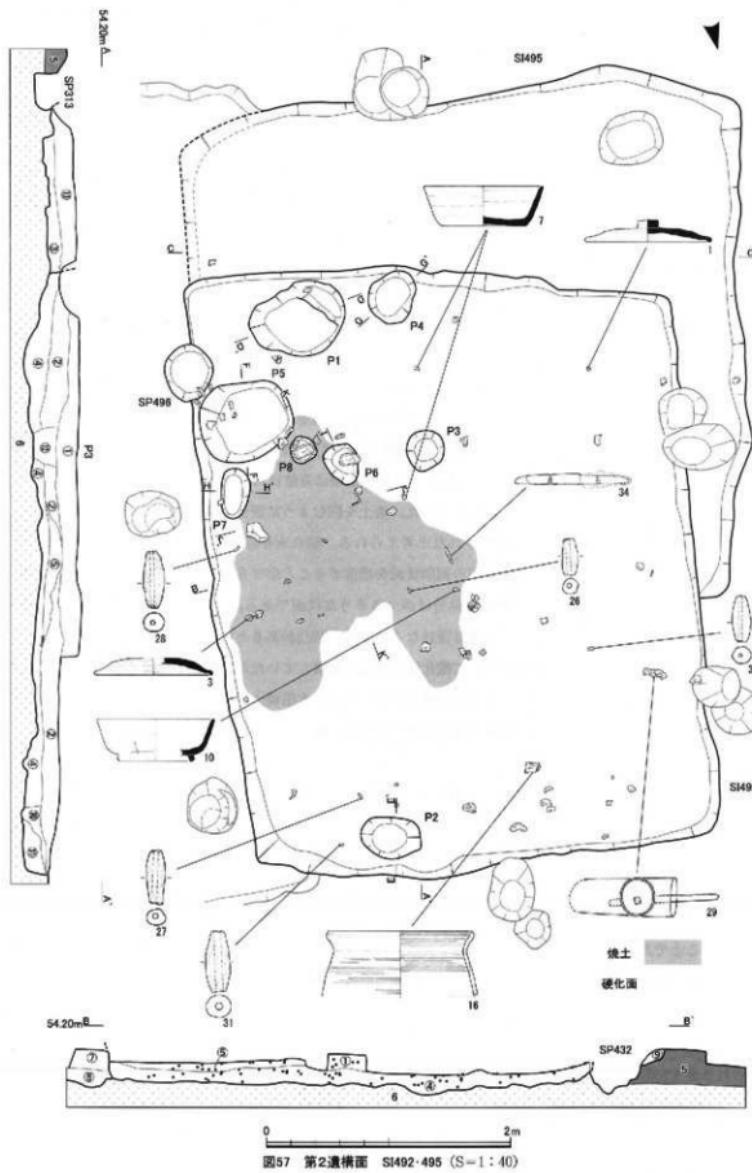


図57 第2縦横断面 SP492-495 (S-1:40)

柱穴 (SI492) 南東隅周辺でピットが集中的に検出されたが、柱穴に相当するピットは、検出されなかった。(SI495) 柱穴なし。

カマド (SI492) 明確なカマド跡は検出できなかったが、床面東半に焼土の広がりが認められた。焼土は広範囲にわたる。P8からカマドの袖石と思われる長細い礫が立ったままの状態で検出された。礫は元位置を保っている可能性が高く、焼土範囲との位置関係からカマドの袖石と考えられる。ただしP8礫に対応するもう片方の袖石は検出されなかった。

焼土が広範囲にあるので、廃棄に際して破却した可能性がある。カマドがあるとすれば、P8 多量の焼土礫の平面的長軸の向きから 東方向もしくは南東方向に煙出しがあったものと推測できる。ただし焼土の範囲・量が他の堅穴建物と比較して著しく多いことから、単なる日常的な煮炊を目的とした燃焼施設ではなく特定の目的をもって作られた施設の可能性もある。

他の堅穴建物(SI491, SI493, SI494)からは炭化米が出土しており、本造構でも床上から 炭化米1粒検出したが焼土からの出土はなかった。(SI495) カマドは検出できなかった。

- SI492
- ①褐色色シルト(10YR3/20)
- ②黒褐色色シルト(10YR3/2) 同表面少量・炭化物・植土含む
- ③黄褐色色シルト(10YR3/2) 同C.2.5m
- ④黒褐色色シルト(10YR3/1) 黄褐色色シルト少量・炭化物・植土含む
- ⑤明褐色色土層(GYR5/10) 焼土 炭化物を主体とする
- ⑥にぶい黄色色シルト(2.5Y6/3)
- ⑦褐色色シルト(2.5Y6/1) ややしらむる
- ⑧黄褐色色シルト(2.5Y6/1) S1492とS1493の境界となる層
強にぶい黄褐色色シルト(10YR4/6) ⑨よりまろかたし 植土含む
- ⑩にぶい黄色色シルト(2.5Y6/1) 植土・炭化物試験面に含む
- ⑪黄褐色色シルト(2.5Y6/1) 植土・炭化物試験面に含む
- ⑫にぶい黄褐色色シルト(10YR5/3) 灰化物試験面に含む



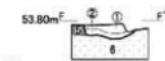
- SI495
- ①にぶい黄褐色色シルト(10YR5/20) 炭化物微量含む
 - ②黄褐色色シルト(10YR3/2) 固くしまる
 - ③黒褐色色シルト(2.5Y3/1)
 - ④褐色色シルト(10YR4/10) 黒褐色と近似色調と上質



- P1
- ①褐色色シルト(10YR4/1) 焼土・炭化物少量含む
 - ②紺褐色色シルト(10YR5/6) やや硬性か 少量含む 焼土層
 - ③黒褐色色シルト(10YR2/1) 焼土・少量少量含む



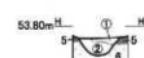
- P2
- ①黒褐色色シルト(10YR4/1) 6層少量含む



- P4
- ①黑色シルト(10YR2/1) 焼化物微量含む
 - ②褐灰色シルト(10YR3/1) 6層: ①少量含む



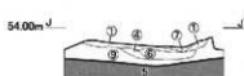
- P5
- ①褐灰色シルト(10YR4/1) 焼土・炭化物少量含む



- P6
- ①褐灰色シルト(2.5YR1/1) 焼土・炭化物少量含む
 - ②褐灰色シルト(1.5YR1/1) 5部: ④少量含む



- P7
- ①黄褐色色シルト(2.5Y6/1) 焼土・炭化物少量含む



- SI492地土
- ①にぶい黄褐色色シルト(5Y6/4) 焼化物・植土少量含む
 - ②褐灰色色シルト(1.5YR1/1) 少量含む
 - ③褐色色粘土質土(5Y6/6) 焼土
 - ④褐灰色色シルト(5YR1/1) ①少量含む

- ⑤明褐色色シルト(5Y6/6) 焼土・炭化物少量含む
- ⑥にぶい褐色色シルト(7.5Y6/6) ⑤
- ⑦褐褐色色シルト(5Y6/1) 焼土の上層焼土
- ⑧にぶい赤褐色色シルト(5YR5/4) 5部: ①炭化物少量含む ⑤と同質か不明瞭を疑う
- ⑨黒褐色色シルト(7.5YR2/1) 焼土・炭化物少量含むしません

0 2m
図58 第2造構面 SI492・495 土層図 (S=1:40)

遺物 [S I 4 9 2] 遺物は他の竪穴建物と比べて多い。焼土および貼り床面を中心として検出した。1~5は須恵器杯蓋であり、2法量(II・IV)ある。つまみの残る1・2とも径高指数が20前後で扁平化の傾向が認められる。口縁端部はかえりが小さく丸く収める。つまみはボタン状を呈し、扁平となる。2の外面は全面降灰し、端部近くで強い撫でにより凹凸の棱ができる。内面は中心部のみ無釉で、有台杯(杯B IV)と組み合わせの重ね焼きが想定できる。3はつまみが欠損し、口縁端部のかえしが小さい。4は口縁端部のかえしが大きい。

杯 A 5は口径が17cmを超える杯蓋である。6~15は杯類である。6は無台杯(杯A)で、底部と体部の境に強い撫でによる段がある。7は深身の無台杯(杯A)で、底部が鋸切りによって扁平となり、体部が直線的に立ち上がる。8は杯体部破片である。有台杯(杯B)は法量が2種(II・IV)ある。杯B IIは口径が11cm代であり、法量が杯B Vに近い。9は体部下半に強い稜「十」符記号ができる、体部がやや外反するように立ち上がる。10はP2出土で、外面下半に「+」字の符記号がある。高台を上に向け、十の書き順通りに鉛状工具で書かれる。11は杯体部破片で外面に自然釉がかかる。12是有台杯である。13は杯身の浅い個体である。14は器壁が薄く、口縁部に稜がある。15は底径が10cmを超える大型の有台杯(杯B II)である。16~24は煮炊具の長胴釜、上師器釜で、16~20は長胴釜、21~24は短胴釜である。16は口縁端部を上方につまみ上げ、体部外面に搔き目を施す。煮炊による煤が内外面とも頸部下約2cmに付着する。17は摩耗激しく調整不明瞭。18は焼成良好で、口縁端部に返しがつく。19は口縁端部を上方に厚くつまみ上げる。20は、口縁端部をわずかに返して収める。21は短胴釜で、被熱のため外面の劣化が激しい。内外面とも煤が付着し、口縁部内面にコゲが残る。口縁端部を返す。22は摩耗激しく調整不明瞭。赤彩楕眼。23は体部片で、内面を横撫で、外面は鉛削りを施す。24は土師器楕で、内外面とも赤彩される。底部は回転糸切り痕をわずかに残す。25は鍋である。口縁端部を上方につまみ上げ、端部を返す。26~31は土鍤である。計6点すべて土師質であり、表面に指頭圧痕がよく残る。4鉄製品~5cmのものと6cmを超える肉厚のもの2種があり、重さ、孔径にも差がある。32は筒状鉄製品の中に棒状鉄製品が入り込む。用途不明。筒部分は厚さ約2mmの鉄板を梢円筒に加工。33は、鉄製刀子。両側で直角、茎部には木柄の木質が遺存。34は鉄製刀子で切先を欠く。片側で直角、関部に幅約0.4cmの金具を装着。茎部には木柄の木質が遺存。

遺物の年代は、総体的にIV期(8世紀第4四半期)に帰属すると考えられる。

[S I 4 9 5] 1は土師器の鍋である。残りの良い個体で、内面は螺旋状の刷毛目調整、外面は刷毛目調整後、底部は鉛削り、上半から口縁部に搔き目を施す。2は須恵器杯蓋で、つまみが欠損する。概ねIV期(8世紀後半)に帰属すると考えられる。

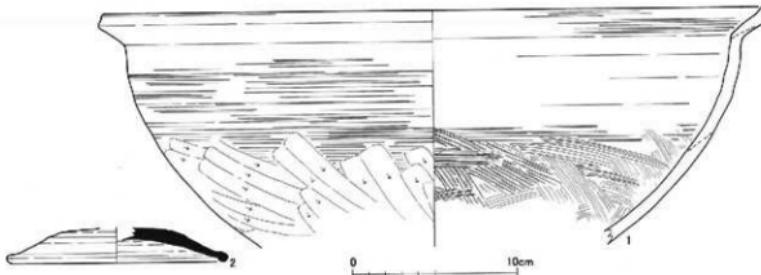


図59 SI495出土遺物実測図 (S=1:3)

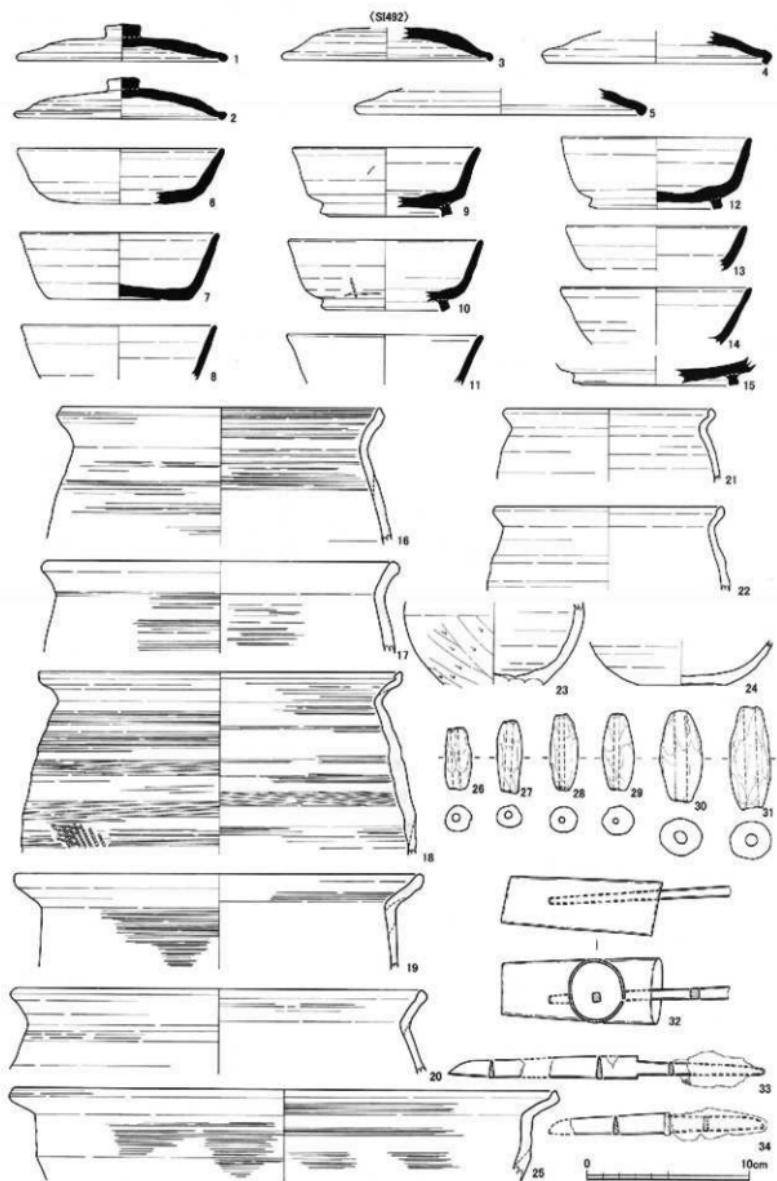


図60 造構出土遺物実測図(3) 穂穴建物 (S=1:3)

豊穴建物 (S1493) (図版24・25・42・43・47)

位 置 調査区東側、豊穴建物・掘立柱建物が複数切り合う場所にある。

重複関係 埋没後、SI495、SI492が造成される。3棟の豊穴建物の機能廃止後に素掘小溝が数条掘削される。はじめに南北方向の溝が掘られ、次いで東西方向の溝が掘られる。

規模と構造 南北辺6.7m、東西辺はSI492・495に切られるが推定復元すると5.8m、平面積は約28.97m²を測る。全体像が明らかでないが推定復元の平面積は、豊穴建物内でもっとも規模が大きい。平面形態は、南北が長方形を呈する。掘り方は地山シルト層6層まで到達しており、検出面からの深さは15~35cm程度である。古代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土内遺物と包含層遺物が接合することや覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物方位はほぼ磁北をとる。

貼り床は確認できなかった。検出層位が低く、床面を掘削・検出により破壊してしまった可能性もある。床面を確認できなかったため、遺物は少ない。覆土を除去すると地山面が凹凸しており、造成時の削除状況を把握することができる。地山面はSI493・495と同じく全面にわたって酸化鉄が集積し膠着していたが、形成要因は不明である。調査区内で酸化鉄集積層が確認されたのはSI492~495の範囲のみであるため、水出耕土下に特有の酸化鉄沈殿集積¹⁾とは一概には把握できない。東壁に沿って幅70~80cmの酸化鉄のない部分もあるが、南北壁は酸化鉄範

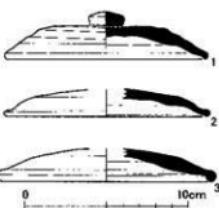
炭化米 団と重なる。覆土から炭化米が1粒出土している。

柱 穴 柱穴と思われるビットは検出していないが、中央北側にSK497がある。長軸1.65mの土坑で、形状は布掘り状柱穴に似るが柱穴と判断する要素はない。柱建ち構造か否かは不明である。

カマド カマドや焼土は、検出されなかった。

土 坑 本造構の南にSK489、東にSK490(図84)の2基の土坑が接する。両土坑との併存関係は切り合いや出土遺物年代からも把握できない。SK489は平面が長方形の土坑で、長軸が南壁に平行する。SK490は平面が正方形に近い形状である。両方ともIV期(8世紀後半)頃の無台杯が出土している。特にSK490は覆土の色調が他の上層遺構と異なっていたので、直感的に豊穴建物に付設する便所の可能性を考え、覆土の自然科学分析を行ったが、遺構性格を特定する手がかりは得られなかった(p.208)。両土坑とも平面的位置から、SI493と何らかの関係を示す可能性があると考えられる。

遺 物 遺物は、地山面に近い層位から須恵器を検出した。包含層出土遺物と接合した資料もある。1~3は、すべて須恵器の杯蓋である。1は擬宝珠形つまみが付き、口縁端部はわずかに垂下する程度である。外縁は回転撚によって3段の稜ができる。径高指数は24.0である。2は、器壁が薄く、口縁端部がやや隆起し、丸く收める。外縁全体に附灰し、粘土の剥離痕がある。重ね焼きで上位にあった杯蓋の口縁部が融着した痕であろう。3は天井部が肉厚の個体で、口縁端部を大きく丸く收める。時期はIV期(8世紀後半)に相当すると考えられる。



1) 大伏和之・安西徹郎 2001「古水川土墳」『土塙学報論』朝香書店

図61 SI493出土遺物実測図 (S=1:3)

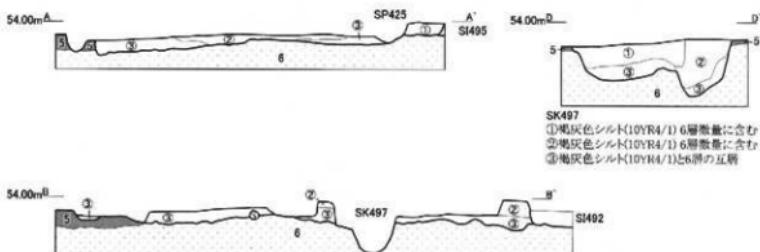
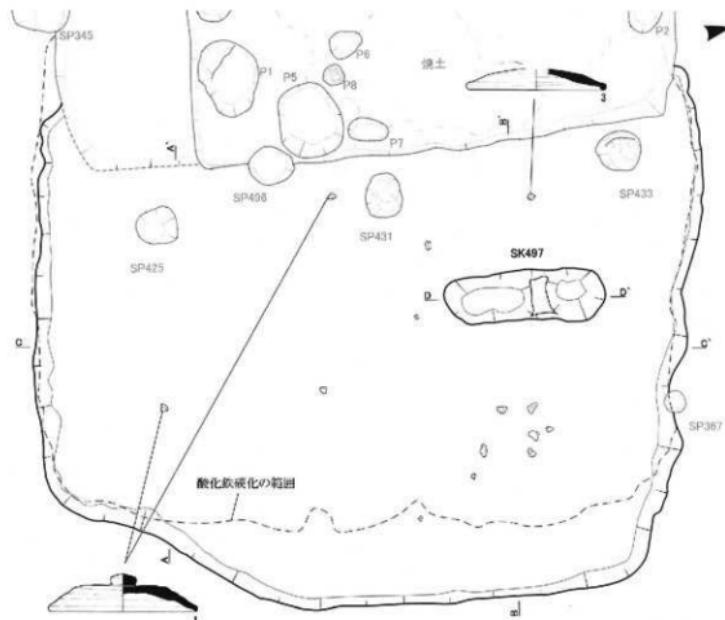


図62 第2造構面 SI493 (S=1:50)

竪穴建物 (S I 4 9 4)

〔図版63・64 図版26・27・28・42・43・44・47・48〕

位 置 調査区東側、竪穴建物・掘立柱建物が複数切り合う場所にある。

重複関係 埋没後、東西方向の素掘小溝が数条削削される。

規模と構造 南北辺3.9m、東西辺は3.8m、平面積は約15.458m²を測る。平面形態は、ほぼ正方形に近い形状である。掘り方は地山シルト層6層まで到達しており、検出面からの深さは30~45cm程度である。古代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土内遺物と包含層遺物が接合することや覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物方位はほぼ南北をとる。

貼り床は②層下面で確認でき、床面中央部が硬化していた。硬化範囲は広く、床面の人字を占める。床に対する圧力が少なかったためか、南西、南東、北東、北西の各隅が三角形状に非硬化であった。特に南西隅は須恵器杯2点が床に据え置かれた状態で出土しており、硬化範囲との空間使用の差異があるのかも知れない。

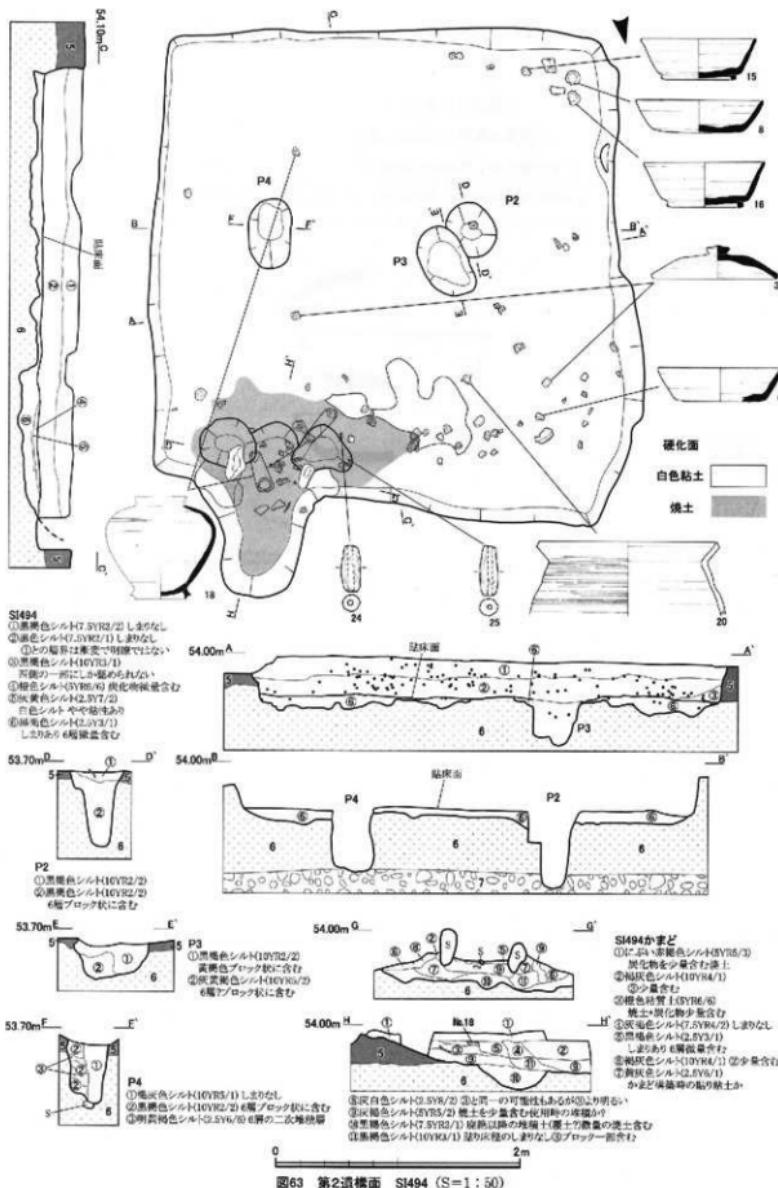
地山の凹凸 贊り床を除去すると地山の凹凸を検出した。中央部分が高く平坦で、周囲は壁から1m程度の幅で10~15cm深く削削し鋸き込み痕が激しい。写真(図版28)で見るとよくわかるが、明らかに意識して掘り分けていると認められる。竪穴建物の中でもっとも特徴的な掘り方を示している。建物造成方法を考える上で示唆的な資料である。

建物の入口は特定できなかった。

柱 穴 柱穴と思われるビットは、床面中央のP2・P4である。②層下面の床面で検出され、貼り床造成後に柱穴が削削されている。柱規模は小さいが、柱掘り方は柱を据え置くに充分な形状をしており、柱建ち構造は2本柱と考えられる。

カマド カマドは竪穴建物の中でもっとも良好な状態で検出された。北東隅で袖石が2枚出しし良好に残存しており、煙出しあは北壁から北に約90cm延びる。袖石は直立した状態で検出され、元位置を保っていると考えられる。袖石と壁の間に袖構築材の白色粘土がある。袖石は周囲より低く掘り進められた位置に設置される。煙突はカマド全体に広がっていた。特記すべきは両袖石の中間位置に、短頭壺(図64、18)の底部が残っていたことである。底部は休部が打ち欠かれ、内面を上にした状態で焼上・炭化物層の上面で検出された。煮炊具でない須恵器が人為的に打ち欠いた形状で袖石間中央に置かれた状況から、カマド廢棄の何らかの行為を推測させる。SI491と同様にカマドから炭化米が出土している(第4章1、p193)。

遺 物 遺物はカマド内部および周辺を中心出土した。南西隅床面の3~5cm上に須恵器杯(4・16)が据え置かれたように出土した。垂木の棚から転落遭棄した可能性がある。1~3は須恵器杯蓋である。1は口縁端部を内側に折り返し丸く収める。中心部を除く内面に降灰しており、内面を上に向け焼成している。2は天井部外間に施記号がある。3は宝珠形つまみが付き、口縁端部はわずかに垂下し、外側に面を造り出す。径高指数は27.7を測り、やや山笠形となる。4~17は杯である。4~6、8・9は無台杯(杯A)であり、体部が開き気味で立ち上がる傾向にある。外傾度は4・8が55°、5が60°である。ほぼすべて使用のためか器面が滑らかであり、5・6で顕著である。10~12は杯体部破片であり、高台の有無は不明。13は大型の有台杯体部(杯B II)と思われる。器壁が非常に薄く、口縁端部が内に向く。



14~17は有台杯(杯B IV)で、口径12cm前後である。すべて高台が内端接地となる。18は短容量 3.5 ℥ 頸壺である。体部を打ち欠いた底部がカマド中央に据えられていた。頸部の括れ度が44、相対狭口長胴壺的深さ186であり、いわゆる狭口長胴壺に分類される¹⁾。容量は3.5 ℥である。外面肩部に2条の沈線が施される。19~23は煮炊具の土師器釜である。24・25は土鍤である。無台杯の外極化が進行する等新しい要素も散見されるが、遺物年代は総体的にIV 2期(8世紀後半)と考えられる。未掲載だが、残存長6.4cmを測る鉄製刀子の刃部片があった。

1) 頸部の括れ度=頸部/体部最大径×100。相対的深さ=器高/体部最大径×100。算出方法は、下記論文参考。

北野博司 1990「須恵器対観の器種分類案」『北陸古代土器研究第8号』北陸古代土器研究会

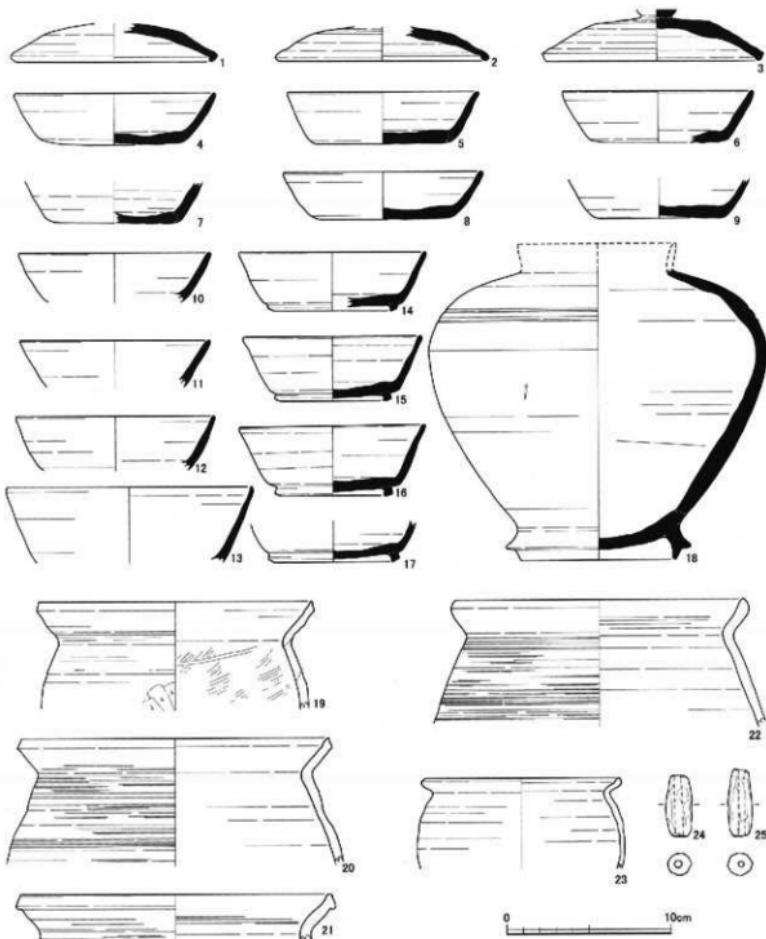


図64 SI494出土遺物実測図 (S=1:3)

堅穴建物(S 1550) [図65・66 図版29・48]

位 置 調査区西側、他の建物遺構と離れた場所にある。西側全体は遺構が希薄だが、S1550は西側中央南の土坑・ピットが集中する位置にある。

重複関係 重複関係にある遺構はない。

規模と構造 当初はS197に類する小規模堅穴建物として調査を進めた。堅穴状部分で建物 小規模堅穴が完結するとして完掘後、周辺ピット群の検出段階で堅穴を囲むようにピットが配置している 建物ことを認識した。本遺跡内において堅穴外柱をもつ堅穴建物が未検出であり、富山県内での検出例がありないことから調査員全員の念頭なく、充分な情報を記録することができなかっただ。不運な事にこの部分は重機による表土掘削時に掘り過ぎてしまい、包含層・覆土が削平された場所もある。今後の調査の課題としたい。

堅穴部分の規模は南北辺2.4m、東西辺は2.5mであり、平面積は5.71m²である。堅穴外柱を 壓穴外柱含む規模は、南北辺3.4m、東西辺3.8m、平面積が11.93m²である。建物方位はほぼ磁北をとる。堅穴外柱穴を作った堅穴建物については、樹生直彦の研究を参考にした。S1550は半柱穴と呼ぶような柱穴ではなく、規模は並列である。内傾する柱穴がないので、「壁立式」に分類される。壁立式柱配置は、堅穴部分を挟んで対応する辺の柱間が均等であるので「柱間整合タイプ」である。「堅穴外屋内空間」と呼ばれる「堅穴壁上端と堅穴外柱によって囲まれた堅穴外壁までの間の 壓穴外平坦面」は、30~70cm程度と狭く、「堅穴外屋内空間S類」にあたる。

屋内空間

S1550は半面積が13m²であり、本遺跡検出の堅穴建物の平均値に近い。検討する材料も少ないので憶測の域を出ないが、壁立式であるので壁は堅穴建物の壁と同じ空間的意味を持つ可能性がある。上屋構造の違いはあるだろうが、建物の占有面積に何らかの意味があるようと思われる。遺物の帰属時期は不明であるが、周辺遺構の年代や包含層を考慮し、8世紀後半から9世紀前半の年代を与えた。

柱 穴 堅穴部分の周間に10基の柱穴と思われるピットを検出した。先述したように堅穴部分を完掘した後に周開を検出したところ、柱穴と思しきピットの並びを確認したので、堅穴部分とピットの併存関係は把握できていないことを断っておく。堅穴部分の周間に同規模のピットが規則的に並ぶため、一連の遺構と認定したのである。柱穴はそれぞれ堅穴部分を挟んで対応する位置にある。SP587-SP642、SP590-SP644、SP575-SP645、SP641-SP646、SP640-SP647という具合である。それぞれの柱穴は非常に小さく、径20~40cm程度である。遺構深度が検出面からかなり浅いが、過掘削のためである。

P 1 燃土

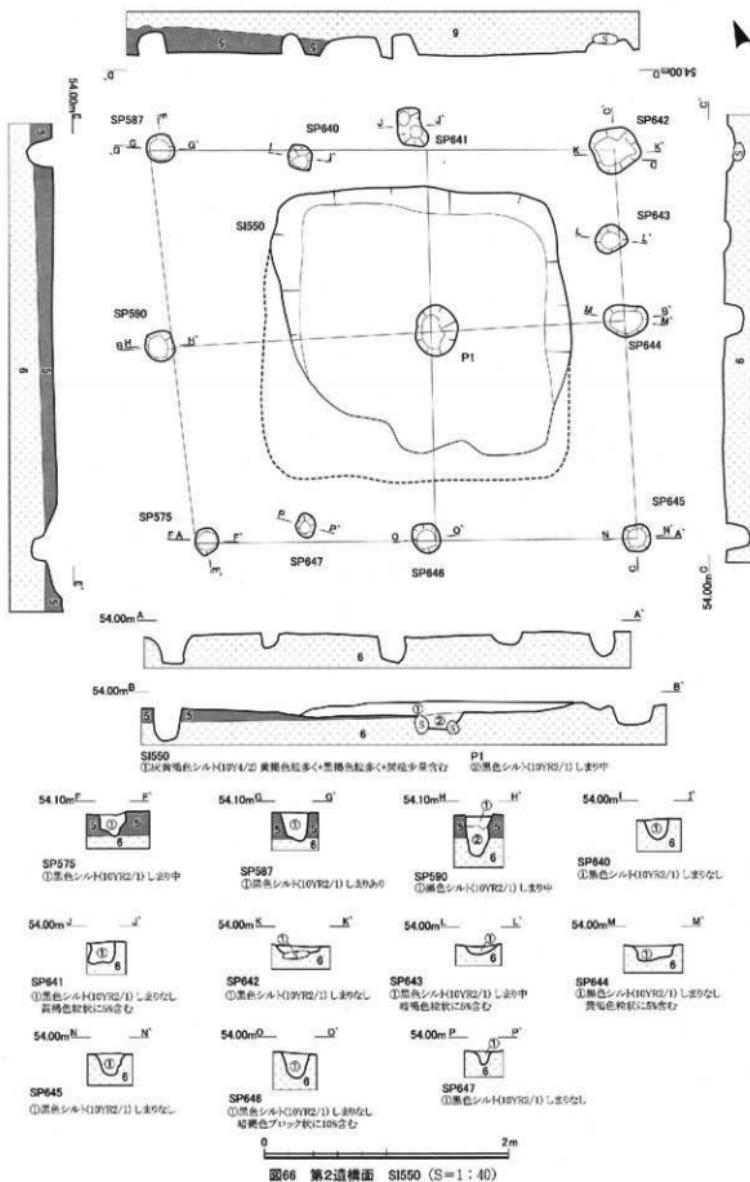
カマド カマドをはじめ明確な燃焼施設は検出されなかったが、堅穴部分中央のP1から若干の焼土が検出された。焼土が堆積していたが、既に被熱度は認められなかったのでP1内で燃焼した形跡はない。

遺 物 堅穴部分から1点だけ出土した。焼成良好の不明上器の口縁部である。内外面とも強い撫で仕上げられる。胎土がやや密であり、器種の見当がつかないため、不明上器とした。時期特定はできない。

1) 樹生直彦 2005 「V.堅穴外柱をもつ堅穴建物群の構成」「壙をもつ堅穴建物の研究」六一書房



図65 S1550出土遺物実測図 (S-1:3)



豊穴建物（S I 6 0 0）

〔図67・68 図版30・48〕

位 置 調査区西側、建物造構だけでなく造構自体が希薄な場所にある。

重複関係 重複関係にある遺構はない。

規模と構造 南北辺4.5m、東西辺4.1m、平面積は17.114m²を測る。平面形態は、南北が長方形を呈する。掘り方は地山シルト層6層まで到達しており、検出面からの深さは15~35cm程度である。古代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。SB02を除く建物は総じて主軸を南北方位もしくは磁北からやや東に振った位置にあるが、本造構だけ磁北から西に振った建物方位をとる。

主軸方位

貼り床は確認できなかった。建物の入口は特定できなかった。

固化していないが、覆土と造成基層5層の層界から打製石斧（図102、138）が出土している。

柱 穴 柱穴と思われるピットは6基あり、組み合わせは2通りある。P4・P7・P1
2・P15とP5・P8・P12・P15であり、4本柱を想定している。

カマド 明確にカマドを検出できなかったが、南隅に焼土が広がっていた。その北側 焼土の広がりに煮炊具の土器釜類の破片が散乱している。袖石に似た被熱した礫が豊穴外にあり、カマドは姿を留めない程破却された可能性がある。

遺 物 遺物は焼土範囲北側の覆土内を中心に出土した。1は須恵器の杯類である。2は無台杯（杯A）で、体部がやや開き気味である。外傾度55°、径高指数は26.7を測る。3は貯蔵用甕の口縁部である。4・5は土器器の短胴釜である。煮炊具のため、頸部から口縁部に煤が付着する。外面は体部下半に削り、内面は横撹で数条の綾ができる。6は長胴釜で、横撹で調整外面は格子目状工具、内面は同心円状工具によるタスキで仕上げる。

遺物年代は、V1期（9世紀第1四半期）に帰属すると考えられる。

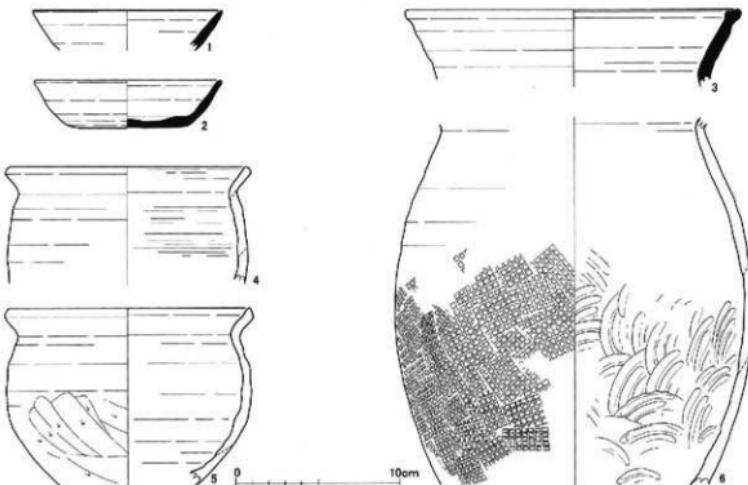


図67 SI600出土遺物実測図 (S=1:3)

